
魔法少女リリカルなのは ～転生者は最初から最強でした～

ラハール

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

魔法少女リリカルなのは ～転生者は最初から最強でした～

【Nコード】

N3678K

【作者名】

ラハール

【あらすじ】

主人公が死んで神の手違いで死んでしまった主人公
神が新たな人生やり直すことにした
転生先リリカルなのはの世界♪
神のおかげでチート化、原作ブレイクしまくるぜ!!

1話 いきなり死んだし?! (前書き)

下手ですモーレッツに下手です、すみません

1話 いきなり死んだし?!

俺死んでない?

俺の死体道路にあるしま、いつか

神「すみませんすみません」

俺「何で謝る?俺死んだんだし早く天国か地獄に連れてってくれな
い」

神「なんか凄い余裕ですね、ふつーはもつと取り乱すんですけど」

俺「それより早く連れて行け」

神「すみません、無理ですあなたはここで死ぬはずではなかったんですから」

俺「なんだてー?!」

神「ですから別の世界で人生楽しんでください、出来るだけの能力は付けますからどこがいいですか」

俺「わかったじゃありリカルなのはの世界で闇の書事件の二日前で名前は今までどうり猿飛佐助で

能力は、hackの全ての武器とスキルが憑神使えて能力ランクssでまあ王の財産《ゲートオブバビロン》は使えるようにして身体能力EXでお願い8歳の体でお願い」

神「わかりました、ではいつてらしやーいませ」

そして俺の異世界生活が始まった

1話 いきなり死んだし?! (後書き)

読んでくれてありがとうございます

2話 到着（前書き）

更新

この駄目作品お気に入りに入れてくれたありがとうございます

2話 到着

佐助「痛ってゝふつゝ落とすか？てゆうか金ないしバイトも出来ないし」

神「（お金なら講座にあります戸籍もつuckingておきましたきにしないでください）」

念話中

佐助「ビックリしたー?!いきなり出てくるなよ」

神「すみません、あと脳内に町の地図教えときました」

佐助「凄いな、だけどサンキュー」

神「いえいえそりゃー神ですから、では帰りますリリカルなのはstricker見たいので」

佐助「まいったか、海鳴図書館に移行」

海鳴図書館内部

「て、早!」

時間短縮です

「いいのかよ」

良いんです

佐助「まいいやお、はやて発見本当にいるし」

佐助「君が取りたい本はこれ？」

はやて「あっ、ありがとな」

佐助「別に、たいしたことしてないし」

はやて「いや本当に助かったで」

まあ、他にはやてが読みたい本をとってそのままはやての付きそいをした。

はやて「そこまでせえへんでもいいのに」

佐助「俺が君を手伝いたいから手伝う、迷惑だった？」

はやて「そんなことあらへん、ありがとな」

本を借りて外に出る

はやて「そういえば名前なんてゆうんや？」

佐助「俺？猿飛佐助よろしくな」

はやて「猿飛君かあ、ウチは八神はやてよろしく」

はやての荷物を持ってはやての家へ

はやて「折角だから上がっていってお茶でもどうですか？」

佐助「いやさすがにそ・・・」

その前に

はやて「どうですか」

佐助「いただきます」

佐助の家内部

はやて「どうぞ」

佐助「ありがとう」

佐助「家の人は？」

はやて「えーと、一人暮らしなんです」

佐助「そうかごめんね悪いこと聞いて」

はやて「そんなことあらへん」

佐助「そう、ありがとう」

佐助「（いい子だなゝさすがはやてだ）」

佐助「ごめんね長居しちゃって」

はやて「こちらこそ、引きとめてごめんな」

佐助「気にするな、また明日も図書館にいるかもしれないからその時はよろしく」

はやて「こちらこそな」

2話 到着（後書き）

佐助 「更新早いな」

作者 「だって休みだから」

佐助 「そうか・・・」

佐助・作者 「よろしくお願いします

3話 始まりていうよりメチャクチャ危ないし（前書き）

更新

楽しいですとても

3話 始まりていうよりメチャクチャ危ないし

2日後

昨日もはやてと図書館で話などをした

念話中

佐助「神いるか」

神「何ですか？」

佐助「助かった家まで作ってくれてでも何でなのはもとい魔王の家の前なんだ？」

神「面白そうだからです」

佐助「そうか・・・」

佐助「もういいぞ」

神「わかりました」

佐助「じゃあない翠屋行ってケーキ買ってはやてと食うか」

桃子「いらしゃいませー」

佐助「ケーキ4つください」

桃子「1500円になります」

佐助「はい」払って

佐助「図書館行こ」

図書館内部

佐助「またかよ」

またです、なにか問題でも？

佐助「無いけど」

佐助「あつ、はやて」

はやて「佐助君来てくれたんか」

佐助「そうだ、後でケーキ食べない？」

はやて「いいよ、だけど夜でええか」

佐助「別にいいけどなんで？」

はやて「それはな今日がウチの誕生日だからや」

佐助「マジでか！」

はやて「そうや」

佐助「そうかわかった」

そして夜

佐助「早いなやはり」

はやて「？」

佐助「ケーキ食うか」

はやて「そうやな」

はやてが闇の書を開けまで飛ばします

佐助「飛ばすな（怒）」

はやて「キャー」

佐助「ちっ、もうかよ」

佐助「扉をぶっ壊す」

蹴り破る

佐助「誰だよ！」

ヴィータ「誰だお前は」

ジグナム・シャマル・ザフィーラ睨む

佐助「（魔力開放S）」

佐助「出よ、虚空ノ双牙」

はやて「大丈夫やその人たちは多分悪い人たちやないと思う」

佐助「わかった（王の財産《ゲートオブバビロン》に）しまう」

ヴォルケンリッター「?!」

はやて「君たちの名前なんてゆうんや」

ジグナム「私は烈火の騎士ジグナム」

シャマル「私は湖の騎士シャマル」

ザフィーラ「私は盾の守護獣ザフィーラ」

ヴィータ「私は鉄槌の騎士ヴィータ」

はやて「そうか私は八神はやてよろしくな」

ジグナム「で、お前は」

佐助「俺ははやての友達の猿飛佐助」

はやて「じゃ、みんな家族やな」

ジグナム「家族ですか？」

はやて「そうや今日からみんなかぞくや」

そこからA、Sの本格的に始めます結構介入しますけど

3話 始まりていうよりメチャクチャ危ないし（後書き）

読んでくれてありがとう

4話 蒐集前日（前書き）

更新
）

4話 蒐集前日

結構経ったなてゆうよりも蒐集時期まではやての家に行って遊び色々なこととして遊んだジグナムたち名前で呼んでくれるようになった

シグナム「主はやて・・・我らの不義理を、お許してください」

佐助「ハイ、ストップ」

ヴォルケリッター「誰だ」

佐助「俺です猿飛佐助だ」

シグナム「猿飛なぜここにいる」

佐助「いや、それだけ魔力撒き散らしてたらたらしきずくからふつ」

シグナム「・・・確かに転送の為の撒き散らす魔力は大きい、しかしどのような意図を持ってここに立たれているか、という事、邪魔おするならば・・・」

佐助「切り捨てる、ですか」

佐助「いいこと教えましょうか？」

ヴォルケリッター「いいことそれはなんだ？」

佐助「ええ、はっきりいます今あなた方がやろうとしている蒐集

は全て無駄ですよ」

ヴォルケリッター「何・・・だと・・・？」

佐助「思い出せませんか？あなたたちが今までに使えてきた主のこ
とを、今まで使えて主はあなた方が蒐集を完了した後どうなりまし
たか？」

シグルム「それは・・・強大な魔力をて・・・」

シグルム「（・・・なぜだ思い出せない？我らが主に使え蒐集を行
い・・・どうなった？）」

他の皆も困惑顔だ

佐助「第一級指定ロストログア『闇の書』転性機能、無限再生機能
を併せ持つもつ、元々の名は『夜天の魔道書』主と共に旅をし各地
の偉大な魔術師の技術を研究をするために作られた、歴代の持ち主
がプログラムの改変して破壊の力を使う『闇の書』に生った真の主
以外このプログラムの改変できない完成後闇の書の意味（管理人格
『マスタープログラム』）との融合、管理プログラム、防御プログ
ラム両方のともの管理権限を得られず暴走するそれが闇の書だよ」

混乱する意思を置き去りに叫ぶ

佐助「だから、あなた方が蒐集してもはやては呑み込まれて暴走す
る」

シグナム「そ・・・そんな・・・まさか」

シャマル「はやてちゃん・・・」

ヴィータ「はやて・・・はやて」

ザフィーラ「主はやて・・・」

佐助「助ける方法があります」

ヴォルケリッター「なんだそれは」

佐助「蒐集するんです」

ヴォルケリッター「・・・」

シグナム「・・・猿飛、蒐集は駄目といわ無かったか」

佐助「ただ、やみくもにするなど言ってるのです」

佐助「まず、俺も協力しますがまず魔力の持っている生物からリンカーコアを取りますそして俺憑神メイガスでリンカーコアの魔力を十数ページぐらい増やします」

シグナム「！そんなことが出来るのか？！」

佐助「ええ、出来ます」

シャマル「そんなことが出来る人間みたこがないですけど」

ヴィータ「アタイもだ」

ザフィーラ「俺も・・・」

佐助 「では実行は明日からいいですね？」

ヴォルケリッター 「了解した」

4話 蒐集前日（後書き）

読んでくれてうれしいです

今頃だけど主人公紹介（前書き）

佐助 「本当に今頃だな」

作者 「ごめん忘れてた」

佐助 「忘れるなよ（呆れ）」

作者 「紹介しまーす」

今頃だけど主人公紹介

猿飛佐助

性別…男

年齢…8歳

容姿…黒髪・黒目どこにでもいる普通の容姿

性格…冷静・切れると怖い

術式…ミッドチルダにベルカ複合

技能…魔力変換資質「ほぼ全て」チートだから

使用武器「双剣虚空ノ双牙・大剣シラード・鎌万死ヲ刻ム影・銃剣

静カナル翠ノ楽園・拳・重槍十文字・回復魔法・精霊魔法

戦術…一体多数

魔力ランクSSSリミッター（自分の意思ですきに出来る）

制御ランク…EX

戦闘ランク…EX

総合ランク…EX

……生する前もそこそ頭も戦闘力もよっかたけど転生したら最強になった……

今頃だけど主人公紹介（後書き）

マジでお気に入りに入れてくれた人ありがとうございます

5話 蒐集蒐集疲れる（涙）（前書き）

こんな駄目作品を見てくれた人人ありがとうございます

5話 蒐集蒐集疲れる（涙）

佐助「集まりましたねでは行きましょうか」

ヴォルケンリッター「わかった」

佐助「転送魔法やりますか」

ジグナム「なぜ、闇の書のことになんか詳しい」

佐助「俺の能力の1つと改善方法は俺の憑神の1つ予言者のフィドヘルで知った」

ジグナム「そうか」

ヴィータ「ありえねーだろ普通は」

そして佐助とヴォルケンリッターは管理外世界へ転送した

某管理外世界

佐助「砂漠ですね、しかも強いのが近くに2匹」

佐助「1匹は岩竜ですねもう1匹勝手に名前をつけますがベヒモスですね」

シャマル「岩竜の2周りでかいですね」

佐助「面倒なので2匹の距離がちかずいたら俺の魔法で蹴散らしま

すそれに俺の実力も知ってもらいたいのぞ」

ヴィータ「いいぜ、見てやるよ」

岩竜が逃げようとしてるなかベヒモスは食いつこうとした時

佐助「よしきた、地の精霊魔法ヤースキン・ルフ」

ヤースキン・ルフの力2匹の周りに砂嵐がおきしかもここは砂漠砂嵐はさらにましやみ終わるころには二匹とも倒れていた

佐助「はい、終わり」

ヴィータ「すげーな、お前」

ジグナム「(戦ってしてみたい)」

佐助「やめときます」

ジグナム「!?(心を読まれた)」

佐助「さてリンカーコア退いて、来いメイガスリンカーコアの魔力を増殖」

シャマル「凄い、リンカーコアの魔力が上がってる」

ジグナム「闇の書蒐集」

ヴィータ「すげー、もう30ページも」

佐助「これが、メイガスの増殖だ魔力以外にも傷の回復を早くしたり出来る」

シャル「なんでも有りね」

佐助「そうでもない、さすがに俺でもできないことはある」

ジグナム「なんだ、それは」

佐助「完全に死んだ人間は、黄泉がえらせれないだが魂がまだあるのなら別だが」

ヴィータ「十分すげーよ、それは」

佐助「やべ、あの二匹に癒し水飲ませなきゃ《ゲートオブバビロン》あったあった」

岩竜に最初に飲ませて逃がす次にベヒモスに飲ます

佐助「じゃーねー」

それから何個か管理外世界にいつて蒐集した。

6話ー1 連れ戻すのにも一苦労前編（前書き）

自分の文才の無さに泣きます

6話－1 連れ戻すのにも一苦勞前編

5話からかなり時間がたってまあその間にはやての家出お茶をしたりゲームをしたりまあ色々あった蒐集も進んだ今は450ページまで進んだまあ225ページぐらいはメイガスで増やしたけど早くはやてが元気になってほしいから限界までリンカーコアの魔力をあげた

念話中

佐助「神いるか、つーか早く出ろ」

神「はい、あなたのそばにいる神でーすなんですか？」

佐助「今日何月何日だっけ？」

神「今は12月2日ですね」

佐助「やば・・・」

現在ヴィータはというと集中して魔力を搜索中。

ザフィーラ「見つかりそうか」

ヴィータ「・・・駄目だな」

ザフィーラ「わからないのか？」

ヴィータ「いるのはわかる、でもどのあたりかは分からない」

ヴィータ「蒐集は確かに進んでる、だけどはやての病状は少しずつ悪化しているこのままじゃ・・・」

ヴィータ「そんな事させねえ！」

ヴィータの脳裏には最悪の事態が頭によぎたがそれを振り払った

ザフィーラ「いいのか？ヴィータ」

ヴィータ「何がだよ」

ザフィーラ「猿飛は魔導師からリンカーコアを取るなど言ってたが」

ヴィータ「かんけいない、はやてのほうが大事だ」

ザフィーラ「そうか」

ザフィーラ「では、別のところを探す」

ザフィーラは別のところを探しにいった。

ヴィータ「ちっ！埒が明かねえ、当たるまで封鎖領域を広げる」

ヴィータ「アイゼン封鎖領域」

アイゼン「Get? ngnis der Magie.」

そして・・・

ユーノ「ごめん、なのは遅くなった」

なのは「ユーノ・・・君？」

ヴィータ「くっ・・・仲間か？」

フェイト「・・・友達だ」

佐助「なにやってるんですかヴィータさん」

ヴィータ「え？なんで猿飛がここに!？」

佐助「そりゃー俺が人から取るなどと言ってるのに取ろうとしてるから連れ戻しに来たんです」

6話ー1 連れ戻すのにも一苦労前編（後書き）

お気に入りに入れてくれた人ありがとうございます

6話ー2 連れ戻すのにも一苦勞後編

海鳴市 市街地封鎖領域内

ユーノ「増援!？」

佐助「初めましてユーノ・スクライア、フェイト・テストロッサさんいやフェイト・T・ハラウンさんの方がいいでしょうか?それと高町 なのはさん」

ユーノ「なんで僕たちの名前を・・・」

佐助「勘違いしないでくださいね、こっちとしては今回の事は想定外の事態だったからね、ヴィータさん連れ戻しに来ただけですから」
ヴィータがなんか喋ろうとしたとき

佐助「何もしないでください、俺があれほど魔導師を襲うなどといったのに無視して
今度やったら俺が相手しますよ（笑顔）」
ヴィータ「怖、わかったよ」

さてとこの場をどう乗り切るか

佐助「なのはさんすみません身内が迷惑かけた」

なのは「あ、あの、それはいいんですけど、
なんで私に攻撃し教えてくれませんか?理由を教えて貰えば何かお手伝出来るかもしれないし」

佐助「確かに正当な要求ですけど無理です、なぜならあなたが管理局の民間協力者であることとフェイトさんとユーノが管理局の人間だからです」

佐助はなのはに近ずいて

ユーノ「っ！なのはに何を！・・・」

佐助「黙っててくださいあなたの魔法より効率がいいので」

佐助「ファラリプス」

ユーノが何か言おうとする中魔法がなのはとフェイトを包み数秒後完全回復をしていた

佐助「すみません、これでかんべんな」

佐助「ヴィータさん帰りますよ封鎖領域解除してください導きの羽、ではさようなら」

アースラ内 談話室

クロノ「で、いきなり攻撃されたんだな？」

なのは「うん、話を聞こうとしたんだけど、聞いてくれなくて猿飛って言う人は私が管理局の民間協力者でフェイトちゃんとユーノ君が管理局の人間だからだって言ってた・・・」

フェイト「それに私が養女になることまで知ってたし」

クロノ「なぜそこまで！」

少ししてクロノが落ちつて

クロノ「わかったことは、事情不明、使用魔法はベルカ式が一人と全く未知の能力者一人分らないことだらけだな」

なのは「だけど、猿飛って言う人そこまで悪い人じゃないよ？私とフェイトちゃんの傷治してくれたし」

はやての家

佐助「なにやってるんですかヴィータさん、はやてが心配なのも分かりますけど

管理局に目をつけやれたら駄目じゃないですか」

ヴィータ「ごめん」

佐助「分ければいいですけど、
今日で540ページですあと126ページですもう少しです頑張り
ましょう」

ヴォルケンリッター「おう！」

6話ー2 連れ戻すのにも一苦労後編（後書き）

読んでくれてありがとうございます

7話 介入しようが面白ければそれでよし（前書き）

読んでくれた人やお気に入り登録してくれた人ありがとうございます

7話 介入しようが面白ければそれでよし

アースラ内

クロノ「今回の件は、各世界で報告にあった魔法生物襲撃事件と同一と考えていいだろう」

エイミイ「クロノ君なんで？今回はなのはちゃんが襲われたただけで魔法生物はいなかったよ？」

クロノ「狙いはなのはリンカーコアだろう」

エイミイ「リンカーコア？なんで」

クロノ「闇の書だ」

エイミイ「闇の書！？第一級指定ロストログアの！？」

クロノ「ああ、魔法生物のリンカーコアがかなり弱くなっていたから多分闇の書だろうって僕の師匠に当たる人が連絡をくれた」

エイミイ「弟子思いなんだね」

クロノ「ただ、分かんないのが、高レベルの魔導師を襲い、倒しながらも魔力蒐集を行なわなかったこと、過去にこんな前例はなかった」

エイミイ「猿飛っていう人が止めてたもんね、なに考えてるんだらうね？」

クロノ「それも含めて今度会ったら聞くことにする」

アースラ内 デバイスルーム

ヴィータとの戦闘で傷ついたレイジングハートの修理が行われている

アルフ「CVK792?」

マリー「そうなの、レイジングハートが要求してるんだけど・・・
これって・・・」

アルフ「ベルカ式・・・カートリッジ・・・システム?」

マリー「とにかくなのはに聞いてみよう」

なのは「え?レイジングハートが?」

マリー「そうなの、負けた事が悔しかったらしくて」

なのは「分かりました、お願いします」

バルディッシュ「Sir.」

フェイト「え、バルディッシュ?」

バルディッシュ「Please.」

フェイト「・・・うんマリーさんバルディッシュもお願いしてもいい

いですか？」

マリー「・・・分かったは、一週間以内で済ませるは
はやての家

佐助「あと84ページですか後8匹く10匹からリンカーコア取ればいいですね」

ジグナム「ああ、そうだな」

ヴィータ「本当にメイガスっていう憑神卑怯だな」

シャマル「だけどそのおかげでこんなに早く進んでるんだしいいじゃない」

ヴィータ「確かにそうだけどさあー」

7話 介入しようが面白ければそれでよし（後書き）

佐助 「題名どうかと思うぞ」

作者 「え？ 本当のことだし」

佐助 「いや、本当でも駄目だろ！」

作者 「関係ない、というより最初に原作から変えたのお前だろ」

佐助 「確かにそうだけど面白ければはなしだろ」

作者 「はいはい、分かった・・・それではさようなら」

佐助 「逃げるな」

8話　なのは・フェイト新たなる力の開放（前書き）

すみませんレイジングハートとバルディッシュの確認台詞省きます
本当にすみません

8話　なのは・フェイト新たな力の開放

翠屋内部

桃子「いらしゃいませ」

佐助「えーと、今日はシュークリーム2個とチョコレートケーキ2個とコーヒ砂糖なしでお願いします」

桃子「1600円になります」

佐助「はい」

なのは・フェイト「!!」

念話中

なのは「ねえ、教えてなんで闇の書を完成させようとしてるの?」

佐助「今、食事中だしそれにあの時も言ったけど管理局に協力してる時点で無理」

フェイト「じゃあなんで魔導師からリンカーコア取らないの?」

佐助「その前に俺が食い終わったらその質問には答えよう」

なのは・フェイト「分かった」

10分くらいで食べ終わりました

佐助「さっきの質問だが、理由は簡単、

闇の書に魔導師のリンカーコアを食わせたらあとあと面倒だからだ」

なのは「どうゆうことなの？」

佐助「その前にあなた達は闇の書のことをどこまで知ってる？」

フェイト「えーと、第一級指定ロストギアで最後のページまで集めたら暴走するってこと

」

佐助「まあ、管理局が知ってるのはそこまですわね」

フェイト「どう・・ゆうこと」

佐助「まあそれはクロノがいるときに、ではまた」

なのは「待って！」

フェイト「管理局がってていうのはあの人はその以上のことを知っているということ」

なのは「でも、悪い人ではなかったの」

フェイト「たしかにね悪い人じゃなかった」

12月9日 強装結界内

ザフィーラ「管理局か」

ヴィータ「でもチャライよこいつら、返り撃ちだ!」

クロノ「ステインガーブレイド! エクスキューションシフト! 撃え!」

頭上から襲い来る無数の魔力刃。

ザフィーラは手を前に突き出し粒子が渦卷いたようなシールドが形成された

着弾と同時に魔力刃が爆ぜ、視界が見えなくなる

クロノ「少しは・・・通ったか?」

ザフィーラに三本魔力刃が刺さった

ヴィータ「ザフィーラ!」

ザフィーラ「この程度で・・・どうにかなるほど・・・やはじやない!」

ザフィーラ魔力刃を碎いた

ヴィータ「上等」

エイミィ「(武装局員、配置終了OKクロノ君)」

クロノ「(了解)」

エイミィ「(それと強力な助っ人呼んで置いたよ!)」

クロノの眼下を見ると、そこにはなのはとフェイトが並んで立っていた

なのは「レイジングハート」

フェイト「バルディッシュ」

「「セーツト、アープ!!!!」」

レイジングハートとバルディッシュ交互に確認を開始する

なのは「レイジングハート・エクセリオン！」

フェイト「バルディッシュ・アサルト！」

ヴィータ「あいつらのデバイスまさか!?!」

8話　なのは・フェイト新たなる力の開放（後書き）

佐助「今日、出番少なくてね」

作者「メインなのはとフェイトだし」

佐助「なるほど、分かった」

作者「簡単に認めた!!」

佐助「そりゃーな」

佐助・作者「「それでは次回も読んでください」

9話 やつと魔導師の戦闘、え？そこまで俺戦闘しないの（ショック）

海鳴市 上空

ジグナム「強層型の捕獲用結界か」

佐助「ヴィータさん達が閉じ込められた様ですね」

佐助「では、行きますか」

ジグナム「そうだな、では」

そういつてジグナムはレヴァンティンを構える

佐助「待ってください、カートリッジがもったいない俺が穴を開けます」

ジグナム「わかった」

佐助「出ろ、シラード」

佐助「では、奥義・甲冑割」

そして結界に穴が開いた

佐助「行きましょうジグナムさん」

ジグナム「あ、ああ（こんなにたやすく結界に穴をあけるとはこの男底が見えん）」

結界内部

フェイト「私達は、貴方達と戦いに来たわけじゃない、まず話を聞かせて？」

なのは「闇の書の完成を目指してる理由を！」

ヴィータ「あのさあ、ベルカの諺に『和平の使者なら槍は持たない』」

なのは・フェイト「「？」」

ヴィータ「話し合いしようってのに武器を持ってくる奴がいるか馬鹿って意味だよ、馬鹿」

なのは「な！いきなり有無を言はず襲いかかってきた子が言う！？」

ザフィーラ「それにそれは諺ではなく、小言のおちだ」

ヴィータ「うっせえ！いいんだよ細かい事は！」

場が白けきっていた時、結界が割れ剛雷が轟いた

ザフィーラ「佐助とシグナムか」

ヴィータ「これで勝てる！」

佐助「なんで、ザフィーラも居ながら捕まってるんですか？」

ヴィータ「うるせえー、ちょっと油断してただけだ」

ヴィータが口を尖らせながら言う

ザフィーラ「すまない」

佐助「では、出ましょうか」

クロノ「時空管理局執務官クロノ・ハラOWN話を聞かせてもらおうぞ」

佐助「皆さんはこれを吹いて先に帰っててください俺はこいつ等を倒していくんで」

ジグナム「わかった」

ジグナムは精霊のオカリナ吹いて他のみんなと転送した

佐助「なのはさんとフェイトさんと呼んでください」

なのは「もう居るよー」

佐助「そうですか、もれないように結界を張ってこれで録音できないしほかの人には聞こえない」

佐助「なのはさんとフェイトさんとの約束どうり話しましょう闇の書のことを」

なのは・フェイト「お願い」

クロノ「勝手に進めるな話はアースラで聞く」

佐助「俺はここでしか話すきはありません聞くのならここしかないですよ」

クロノ「くっ、分かった」

佐助「では、始めます、第一級指定ロストログア『闇の書』転性機能、無限再生機能を併せ持つもつ、元々の名は『夜天の魔道書』主と共に旅をし各地の偉大な魔術師の技術を研究をするために作られた、歴代の持ち主がプログラムの改変して破壊の力を使う『闇の書』に生った真の主以外このプログラムの改変できない完成後闇の書の意味（管理人格『マスタープログラム』）との融合、管理プログラム、防御プログラム両方のともの管理権限を得られず暴走するそれが闇の書ですそして夜天の書は管理プログラム、防御プログラム両方のともの管理権限を得て暴走はしない」

佐助「それが闇の書です、ここまで話したので帰らせていただきます、もしかしたらあなた達の力が必要になるかも知れないので」

精霊のオカリナを吹いて帰えた

クロノ「待て！」

なのは「じゃあ、暴走しない夜天の魔導書に出来るってゆうことだよね？」

フェイト「今の話じゃね」

クロノ「そんなの嘘かもしれないぞ第一信用できん」

9話 やつと魔導師の戦闘、え？そこまで俺戦闘しないの（ショック）（後書き

佐助「俺、戦ってないし！奥義・甲冑割しか使ってない（涙）」

作者「ごめん、A・Sでもそろそろ本格的に戦うから」

佐助「分かった」

佐助・作者「次回も読んでください」

外伝 ディスガイアの技って恐ろしいよね

始めってすぐですが念話中

佐助「神頼みがある」

神「珍しいなんですか？」

佐助「hackの技だけじゃ不満だから魔界戦記ディスガイアの技も頼むこっちの方が面白くなるから」

神「しょうがないですね〜今回だけですよ♪」

佐助「楽しんでない!!」

神「楽しんでますよなにか？」

佐助「何も無いけど・・・」

とまあこんな感じでディスガイアの技の手に入れました

佐助「いいのか？自分で言って何だけど？」

はやての家

佐助「試したい技が有るからでずだってくれシグナム」

シグナム「いいですけど、ここですか？」

佐助「ここじゃない、生物すらない管理外世界だ」

管理外世界

佐助「着いた」

シグナム「では、早速」

佐助「待て、その前に一発練習させてくれ」

シグナム「分かりました」

佐助「魔力を溜めるのはSSランク、魔王玉」

デイスガイアを知っている人は知っているかもしれませんが魔王級エネルギー頭上に溜め一気に投げつける強力な技です

・・・ドッ・・・カーン

佐助「え?・・・マジ!？」

シグナム「星を1つ・・・壊すとは・・・なんと恐ろしい技だ」

・
ただ今の衝撃で管理外世界が消滅しました塵埃1つ残さずに・・・

佐助とシグナムは精霊のオカリナで逃げました

佐助「シグナム・・・魔王玉クラス使うときは魔力溜めるのBランク位にするはかなりいや
滅茶苦茶危険だし!!」

ジグナム「ええ、そうしてください、てっ！クラス！？何個ぐらいあるんですか？」

佐助「え〜と・・・11個位・・・って多！」

佐助は本当に危険な時しか使わないと心に決めたのだった

外伝 ディスガイアの技って恐ろしいよね（後書き）

佐助 「危ないから！！絶対危ないからもうやめよう魔王玉は！！！」

作者 「やだ、だって面白いじゃん」

佐助 「だからって星1つ個壊すのかよ！」

作者 「うん、その方がどれだけ恐ろしいか簡単に分かるし」

佐助 「そうですか、じゃあお前が魔王玉くらえ〜〜〜」

作者 「ぎゃ〜、逃げろ〜！！！」

佐助 「おさはがせすみません次回も見てください」

外伝 誘拐犯？魔法使わずに遊んで倒すよ

これは蒐集が始まる前の話です

今俺は自転車である車を追っています

佐助「なんで俺はいつもこうなんだよ、マジで！誘拐なんてやるな
よしかも俺が近くで」

回想中

佐助「まだ蒐集するまでに当分時間あるしのんびりできるな」

誘拐犯A「大人しくしてもらおうか！」

どこからかこえがきこえる

アリサ「放しなさい、すずか大丈夫？」

すずか「ええ、何とか」

誘拐犯B「さっさと乗れ」

佐助「しょうがね、助けるか・・・ってもう行ってるし！」

ちようどいいことに自転車乗った少年

佐助「すまんこの自転車借りる、これで新しいの買ってくれ」

少年に2万円ほど渡して車を追う

回想終了

で、現在に至る訳です

佐助「止まった、か・・・」

現在誘拐犯の車と200mほど離れてます

佐助「廃棄工場か・・・今ある武器は腰に付けてる木製の双剣と手に巻いてあるアングルそしてさっき拾った石5個・・・か」

え？ゲートオブバビロンで出せばいいって？虚空ノ双牙ってどう見ての普通の武器じゃないし、え？普通に乗り込んでも勝てる？だってこっち方が面白いし

佐助「ミッシェンスタート」

まずはアングルで周りを見はたせる場所へ

へーあの歩き方からすると雇われた傭兵か

佐助「周りを見渡してる男三人」

佐助はまずは手に持ってる石で警戒を逸らすアングルを使い男に飛び蹴り残りの二人は双剣で切り沈んだ

佐助「まずは三人・・・」

そのころアリサ達は

目隠しと両腕を後ろで縛られていた

傭兵D「計画第1段階終了第2段階へと移行します」

黒いスーツを着た30代後半の中年の男

誘拐犯大将「お前らには大金を払ったんだミスはするなよ」

傭兵D「わかっています」

誘拐犯大将「悪いねお嬢ちゃん金さえ入れれば開放してあげるからその間我慢しててね」

アリサ「――っ！あんた最低ね」

誘拐犯大将「子供が吼えてもまーったく怖くないから」

なぜか他の傭兵が5人が集まってきた

傭兵E「隊長言いたい事とは何でしょう？」

傭兵隊長「そんな事一言も言っていないが？」

外の見周りの傭兵「」「」「？」「」「」

傭兵隊長「っ！罠だ！！」

佐助はもう進入して目的地にしていたのだ

佐助「甘いよ」

佐助は素早く5人を双剣で沈めた

佐助「まあ、誘拐犯なんてそんなもんだと思ったけど女性を誘拐なんて本当に小物だな」

佐助はいい終わるとすぐに持っていた石で後頭部に当てて沈めた

佐助「あとは、あんただけだよ隊長さん♪」

傭兵隊長「そのようだな」

ピーポー・・・ピーポー・・・

佐助「ちっ、警察かみんな復活してるし逃げな」

傭兵隊長「いいのか？すまない」

佐助「じゃあな」

佐助「さて、お姫様を助けますか」

アリサ達の目隠しを取り両腕に縛られているヒモを取った
佐助「大丈夫ですか可愛いお姫様」

アリサ「可愛いって／＼・・・助けてくれてありがとう／＼／
すずか「可愛い／＼・・・ありがとう助けてくれて／＼／」

佐助「いえいえ、当然のことでしたまでですそろそろ警察も来るので引かせてもらいます」

すずか「かつこよかったね」

アリサ「ええとつても」

10話 リインフォース誕生

佐助「そろそろはやてに話すか」

ジグナム「そうですね」

佐助ですこんな感じではやてに話すことが決まりました・・・だつてあと十ページで完成だから

はやての家

食後。居間に全員が集まり、顔を突き合わせている

はやて「で、改まってどうしたん？皆神妙な顔して」

守護騎士たちは一斉に頭を下げる

ジグナム「主はやて、まずはお詫び申し上げねばなりません」

ジグナム「我らが騎士の誓いを破りし事、いかなる処罰もお受けします」

はやて「ど、どしたん、皆して？何か悪い事でもしたん？」

ジグナム「これを」

ジグナムは闇の書を差し出す

完成間近まで蒐集された闇の書が晒される

はやて「これって……理由聞いてもええ？」

佐助「それは俺が言う」

はやて「そうや！佐助君これは」

佐助「大丈夫だ知っているそれに関係者いや共犯者でもある蒐集に俺も参加していたからな」

はやて「え？佐助君も魔法使いなん？」

佐助「近いものだが違う、急に胸が苦しくなったりしたことが無かったか？」

はやて「え！無いよ」

佐助「誤魔化ても無駄だよ、石田先生からシグナムとシャマルが聞いているし

原因は闇の書の浸食、理由は蒐集を行わなかった事だよ」

はやて「ちょ、ちょっと待って下さい、何でそんな事急に……」

佐助「そのままシグナム達が蒐集を行った理由だからなんだ蒐集を行わなければはやて、

君は長くは持たなかった」

シグナムが勢いよく立ちあがる

シグナム「佐助、もっと言い方があるだろ」

佐助「事実だ、それを何とかする為におれが協力している1つ目蒐集の協力2つ目こっちが本題」

はやて「・・・何ですか？」

佐助「はやて、君には闇の書の改修をしてもらう、闇の書の闇防衛防衛プログラムの改修を」

はやて「分かりました」

佐助「よし、あとはジグナムに教えたてある、俺は行くところがあるから」

佐助「ワード 管理 世界の 秩序に転送

時空管理局 本局

ギル・グレアム提督執務室

グレアム「闇の書の覚醒：『ヴォルケンリッター守護騎士』の出現、

主の容体悪化による蒐集開始ここまでは計画通りだった、しかし…」

何故か守護騎士たちは魔導師からの蒐集を行わず、魔法生物からのみ蒐集している

グレアム「本来主にしか従わぬ守護騎士が何故・・・」

佐助「簡単な話です、俺が闇の書の真実を教えたからです」

グレアム「誰だね君は」

佐助「すみませんねグレアム提督殿、猿飛佐助です」

そくざにグレアムは結界を張った

グレアム「これで逃げられないよ」

佐助「じゃあ忠告です蒐集が最終段階になりました、もうあなたで手を出さないでくださいそう猫の姉妹に言って下さい、あなたが八神はやてを使い闇の書ごと凍結させ永久封印しようとしているその計画はもう無意味だからね」

グレアム「なっ！なぜそのことを！？」

佐助「では、失礼させていただきます」

精霊のオカリナを吹いて去った

グレアム「なんという少年だ・・・」

戻りましたはやての家へ

佐助「ただいま」

リインフォース「…不可能です、今回の闇の書は魔法生物が主な魔力原です、魔導師のリンカーコアであれば私に回される魔力量が多くなりますが、今回の蒐集で集められた魔力は大半が防衛プログラムに回されている、今の防衛プログラムを抑え込むのは至難の業で

す」

佐助「大丈夫だそいつの相手は俺がする俺は蒐集中十分の一の力も出していない」

リインフォース「・・・分かりました、主はやてよろしいですか？」

はやて「うん、よろしくな管理人格さんって呼びにくいなあ、名前ってないん？」

リインフォース「：いえ、私は闇の書の管制人格。それ以上でもそれ以下でもありません」

はやて「んゝ：あかん！私が名前付けてあげる！私は闇の書の主やから」

リインフォース「い、いえ、主はやて、いいのです。私にはそのような・・・」

はやて「決めた」

リインフォース「え？」

はやて「リインフォース！」

リインフォース「リイン：フォース・・・」

はやて「そうや」

リインフォース「し、しかし」

はやて「闇の書の主の名において汝に新たな名を贈る。強く支えるもの、幸運の追い風、祝福のエール、リインフォース」

リインフォース「・・・あ、ありがとう・・・ございます・・・」

はやて「よろしくな！リイン！」

リインフォース「・・・はい」

11話 やつと俺も戦闘(前書き)

結構遅れてすみません

11話 やつと俺も戦闘

現在フェイトの家の前

ピンポーン

リンディ「はい」

佐助「こんにちは（ニコッ）」

佐助「出来ればデバイスを向けなくてもくれませんかクロノ執務官」

クロノ「何の目的できた」

佐助「闇の書の事を話したとき、
もしかしたらあなた達の力が必要になるかも知れないといったはず
ですが？」

クロノ「あの言葉は僕は信用してない！」

佐助「あつ、すみませんどうぞつまらないものですがみんなで食べてください、それとクロノ執務官、俺が交戦する気ならこのマンシ
ョンもろとも破壊してますからw」

クロノ達「・・・」

佐助「簡単に説明しましょうなぜ闇の書を元の夜天の魔導書に戻したいか」

クロノ達に説明したちようどなのはとユーノが来たのではやての事も説明した

クロノ「…言いたい事はわかった、だが、それならそれで何故最初に我々に協力要請をしなかった？
そうすれば戦闘など起こらなかっただろうに」

佐助「なら、あなた方管理局が野生の魔法生物の蒐集認めましたか？それに管理局は信頼できない個人的に信用に値するのがなのはにフェイトにリンディ艦長ぐらいですから」

佐助「それに、誰かを救うために、1を救うために100を切り捨てるのは悪何でしょうか？友人が死に瀕している時、何かを切り捨てて友人を救うのは悪何でしょうか？ああ、法的には悪でしょうね、それを友人が望まないというならそうでしょうね、だが、別に俺は彼女の為に動いているわけではない他の誰でも無い、俺の為に救えるのならそれが罪だろうと行なう自分が他人のせいで傷つくのは嫌ですから」

皆さん「・・・」

佐助「模擬戦しませんか？あなた方の實力も知りたいし場所は海鳴市周辺の海上でどうですか？」

リンディ「分かったはいいでしょう」

クロノ「か、艦長！」

リンディ「で相手は誰？」

佐助「話の分かる人だ・・・、相手はなのは・フェイト・アルフ・クロノ・ユーノの5人ですね」

リンディ「今ここにいる魔導師全員！」

佐助「これでもまだ足りないんですけど、それでは転送開始」

現在海鳴市周辺の海上

佐助「結界も張りましたし始めましょうか」

アルフ「先手必勝」

素早く間合いに入り殴りかかる佐助はガードし攻撃に入る

佐助「獄・炎・ナツクル」

炎を拳に宿しアルフを殴った

佐助「一人目」

クロノ「ステインガブレイドエクスキュージョンシフト」

虚空ノ双牙を出し

佐助「夢幻繰武」

高速魔法刃を切り落とす

クロノ「バ、バカな！」

佐助「遅いよ疾風双刃」

佐助「二人目」

大剣・大百足を出し

なのは「みんな離れて全力全開！！スターライトオーブブレイカーア
アアッ！！！」

特大の桜色の砲撃が放たれた

佐助「うん、絶対もろに食らったら危ないねギガファイア！」

スターライトブレイカーとギガファイアがぶつかり合い

なのは「うそ！！」

佐助「すげーあれでもかなり魔力入れたのに相殺された」

ユーノに近ずき

佐助「虎乱襲」

佐助「三人目」

佐助「フェイトあなたにはこの武器で戦いましょう」

刃威音・零という大鎌を取り出した

フェイト「行こうバルディッシュ」

バルディッシュ「Yes Sir !」

フェイトがバルディッシュをハーケンフォームにして左側から切りかかる

佐助「あまいよ環伐」

フェイト「クツ」

佐助「なかなかやりますね」

なのは「ディバインシューター」

D G—Zを取り出す

ディバインシューターほとんど相殺したが2発あつた

佐助「やりますね少し本気を出しますか」

虚空ノ双牙

佐助「破裏剣舞」

佐助「終了」

佐助「期限は12月24日だからじゃーねー」

12話 ガメ〇登場（防衛プログラムで）無しでしょ・・・（前書き）

こんな駄目作品を読んでもくれた人ありがとうございます

12話 ガメ○登場（防衛プログラムで）無しでしょ・・・

12月24日

シグナム「これで最後だ」

佐助「次元転送を感知しましたか予定どうり5分後よろしく願います」

ヴィータ「分かってるよ安心しな」

アースラ艦内

エイミィ「感知しました。いえ、こちらに信号を送っているようです」

リンディ「ではそちらに進路を」

はやての家近辺

佐助「（皆さん答えを聞きにきました、協力するか協力しないか）」

リンディ「ごめんなさい、協力できないは」

佐助「（そうですか分かりました、ですが、あなた達が管理局の命令どおりやってそれが失敗しても、それはあなた方の責任だってことを忘れないでください）」

リンディ「分かりました」

クロノ「（ストラグルバインド!）」

佐助の体を展開した魔法陣から伸びる魔力で編まれた縄が捕捉する

クロノ「大人しくしろ、そのバインドは容易くは抜けられない」

佐助「はあく、予想どうりすぎてあきれる、まあ、俺は手は出しません何があるうとね」

クロノ「?まあいい。そこで見ている」

佐助「ええ、見せてもらいましょうか」

佐助は笑っていた全てが計画道りと言った様に

クロノ「何だこの反応は!?!エイミィ!?!」

エイミィ「（前方、信号発信地点から強大な魔力反応!闇の書が完成したと思われます!）」

クロノ「（艦長!）」

アースラ艦橋

リンディ「アルカンシエル、バレル展開!」

リンディが目の前の箱に始動キーを差し込むと、周囲を包んでい

た箱状のファイアリングロックシス テム（火器管制機構）が赤くなり、環状魔法陣が不規則に周囲に展開される

リンディ「ごめんなさい。・・・アルカンシエル！発射！」

アースラの前方に3つの巨大な環状魔法陣が展開される、光球の収束が終わり、遂にアルカンシエル が発射される

佐助「あらら、やちゃ、た」

クロノ「どうゆう意味だ！」

佐助「簡単なことだ、闇の書の防御プログラムが主を守るために発動するだけ♪」

クロノ「何だと・・・」

エイミィ「アルカンシエル着弾確認！空間歪曲開始します！」

アルカンシエルは撃ち出される弾体自体に攻撃力はほとんどなく、着弾後一定時間の経過によって発生する空間歪曲と反応消滅で対象を殲滅する魔導兵器

エイミィ「反応消滅終息、視界、クリアになります、対象領域サーチ・・・え？」

リンディ「どうしたの？」

エイミィ「それが・・・闇の書の反応・・・健在です・・・」

エイミイが顔を青くしながら報告する

リンディ「なんですって!？」

着弾地点を中心に百数十キロは何も無い空間が広がっている

否、中心にのみ存在するものが有った

大きさ60mぐらいの亀もはや有名なガ○ラのであった歴代の防衛プログラムの中でも1・2を争うものだろう

佐助「もはやガメ○だな・・・かっこいい」

モニターにクロノが表示されるその背後には縛られたままの佐助がいた

通信中

クロノ「艦長、これは!？アルカンシエルは確かに着弾したはず!」

佐助「簡単な話ですよ、あのガメ○がアルカンシエルを耐えただけですから、さすがガメ○」

クロノ「何だと!？」

佐助「俺達は魔法生物からのみ蒐集してきました、666ページ、キメラは色々な生物が集まって出来ています、あれも同じです七・八十対魔法生物の集合体どれほどの魔力と力を持つでしょうか?」

リンディ「そんなものを解き放ったのは貴方達でしょう!？どうするつもり?」

佐助「何もしませんよ、何か？」

クロノ「貴様！！！」

佐助「言いましたよね（失敗しても、それはあなた方の責任だってことを忘れないでください）」と

確かに予定では出ましたよ守護騎士達とはやてが結界を張り俺が憑神《アバター》を使い倒す予定でしたが、あなた方のおかげで予定が崩れた」

リンディ「・・・どうということ？」

佐助「俺達はまず、闇の書を完成、はやてと管制人格、リインフォースを融合させ、闇の書内部から新しい防衛プログラムをインストール、その後、古い防衛プログラムのみを分離、そして防衛プログラムを出し魔力補給を出来ないようにしてさっき言ったように倒すそれが予定でした、まあ、あなた方には結界を強固な物にしてもらうために協力してもらおうと思ったんですが」

リンディ「では何故あんな事に？」

佐助「何故？単純な事ですよ、闇の書がアルカンシエルを防ぐために防衛プログラムを起動した、しかも古いプログラムのまま機動した」

リンディ「そん・・・な・・・」

佐助「バリアーか何か張った方がいいですよ」

リンディ「え？」

エイミィ「艦長！闇の書から膨大な魔力反応！こちらに向けて攻撃してきます！」

佐助「ハイ・プラズマ！！マジでガメ○じゃん！！」

口内に集束される魔力。その魔力量は人智を遥かに超えていた

12話 ガメ○登場（防衛プログラムで）無しでしょ……（後書き）

佐助「え……俺ガメ○と戦うの……」

作者「うん♪」

佐助「やめて死んじゃうから」

作者「ハセヲだってグビア倒したし大丈夫ww」

佐助「そうゆう問題じゃない（涙）」

作者「大丈夫勝つから……多分」

佐助「なんでその根拠なさげなの!!」

作者「次回も読んでください（逃げる）」

佐助「逃げた……」

13話 ガメ○に勝てるかな？ (前書き)

作者「感想に読みづらいたったんで書き方を変えました
まだ読みづらかったら忠告お願いします」

13話 ガメ○に勝てるかな？

アースラ艦橋

通信中

リンディ「デイストーションフィールド、全力展開！！！！急いで！」

エイミィ「了解！クロノくん！急いで艦内に！」

クロノ「分かった、お前も来い！」

佐助「はいはい、分かりました、大変な事になったねー」

クロノ「良いから来い！！！」

迫るプラズマをまとった火球

大きさはアースラを飲み込むぐらいはある

フェイト「なのは、なんだか様子がおかしいよ」

なのは「うん、何か慌ただしい様な」

リンディ『総員対ショック体勢！！！！』

フェイト・なのは「「え？」」

瞬間、凄まじい衝撃が2人が襲った

フェイト「なのは！」

なのは「フェイトちゃん！」

暫くすると振動は収まりました

フェイト「・・・大丈夫？なのは」

なのは「うん、大丈夫だよ」

パシユン

扉が開く音とともにクロノと連れられた縛られた佐助が入ってきた

クロノ「無事か？2人と・・・も・・・」

佐助「ヒュ〜よくやるね〜お・二人さ・ん、こんな非常時の中で」

2人の今の体勢はフェイトがなのはに覆い被さる様になっている
そんな状態で見つめあっていれば、いらない誤解も受けようという
もの

フェイト「く、く、くくクロノ！？ち、違うよ！？これはってなん
で佐助君がいるの？」

佐助「簡単に言うと、このKYに捕まった」

クロノ「誰がKYだ！そもそも君がちゃんと説明していれば！」

佐助「その前に人を捕まえてアルカンシェルぶっ放したのはそつちだし」

なんで協力者じゃないあなた方に説明する必要がある？」

クロノ「ぐっ！」

通信入りました

リンディ「クロノ、ああ、なのはさん達の所にいたのね
丁度良いわ、佐助君も連れて艦橋に来なさい」

クロノ「わかりました」

なのは「クロノくん、何がどうなってるの？」

クロノ「艦橋に行くまでに話すよ」

アースラ艦橋

エイミィ「現在防衛プログラムは甲羅に籠り、一切のアクションを
起こしていません

おそらくこちらの出方を窺っているのかと」

リンディ「佐助君、あなたならどうにかできるかしら？」

佐助「予定してた防衛プログラムの5倍ぐらい強いですが何とか
なれるでしょう」

リンディ「なら、お願い出来るかしら」

佐助「だが断らしていただきます」

クロノ「ふざけるな！分かってるのか！このまま放っておけば次元世界全体の問題になるんだぞ！？」

佐助ちよつとキレぎみ

佐助「お前こそふざけてんじゃねーぞ
お前等は協力しないといった、だが静観していればもっと弱い奴が出てたはずなんだ
なのに、その責を俺に押し付けんじゃねーぞ！」

なのは「佐助君怖いの」

クロノ「お前がやれば奴を倒せる！なのに何故しない！？」

佐助「お前等、虫良すぎじゃねーのか
協力を申し出た相手に協力しない、いざ問題が起こったら頼る、ふざけんな！」

クロノ「それは・・・」

リンディ「クロノ、下がりなさい」

クロノ「艦長！？しかし！」

リンディ提督は深々と頭を下げる

エイミィ・クロノ「艦長」

リンディ「虫の良いお願いと言うのは分かっています、しかし、そうしなければ世界の危機になりえます、どうか、お力を貸して下さい」

佐助「はあ、あんたがそこまでするんだ、なら殺しましょう

その代わり条件があります今回の件での俺と守護騎士達『ヴォルケンリッター』と闇の書の主はやての無罪放免」

リンディ「わかりました」

佐助「相手は予定の5倍強いんだ結界の強度上げる為にここにいる魔導師全員で強力な結界を張りますから手伝ってください」

なのは・フェイト「わかりました（わかったの）」

13話 ガメ○に勝てるかな？（後書き）

佐助 「虚空様・鴉 様感想ありがとうございます」

佐助 「とうとう死合するのか〜ガメ○と」

作者 「頑張れ〜」

佐助 「バーナーとウルティメイト・プラズマ使わないよな？」

作者 「さ〜ね〜」

佐助 「バーナーとか別名イデオ○ソードだぞ！地球壊れるぞ！」

作者 「君なら何とかできる」

佐助 「どうやって？」

作者 「似てる技で」

佐助 「・・・」

佐助・作者 「次回も読んでください」

14話 憑神《アバター》スケイス（前書き）

こんな駄目な作品読んでくださる読者の皆さんありがとうございます

14話 憑神《アバター》スケイス

はやての家近辺

佐助「オイ、なのはとフェイト道路の方にアリサとすずかがいる
さっさと避難させろ！」

なのは・フェイト「え!?!」

ガメ○はなのは達に向けて追尾機能がついたプラズマ火球、
ホーミング・プラズマを放った

佐助「ギガクール！」

両手からギガクールを放ちホーミング・プラズマ何とか相殺さ
せた

佐助「さっさと行け！」

ガメ○はなのは達に何回もプラズマ火球放ったがギガクールに
相殺された

通信中

佐助「リンディ艦長、認識阻害かけてあるな」

リンディ「ええ」

佐助「なら、全速山のほうに行くアースラも来い」

全速で山のほうに行きましたええそれはもう全速で

クロノ「何!! 亀が飛ぶのか!?! しかもなんて速さだ」

エイミィ「飛行速度マッハ3!」

佐助「ここなら被害も出ないな」

ガメ○着地震度2ぐらいの地震

佐助「さて、そろそろははやてが出てくるだろう」

念話中

はやて「さすが佐助君や、今そっち行きますから」

佐助「順調に事進んだ、（丁度良い、ついでに守護騎士達も呼び出してくれませんか）」

はやて「はい! 守護騎士システム起動! 皆!」

空中に光の柱が立つ。

眩いばかりの閃光が晴れると、そこには中央の光球を中心に、守護騎士達が四方に立っていた。

シグナム「我ら、夜天の主の元に集いし騎士」

シャマル「主ある限り、我らの魂、尽きる事無し」

ザフィーラ「この身に命ある限り、我らは御身の元に有り」

ヴィータ「我らが主、夜天の王、八神はやての名の元に！」

口々に告げる守護騎士達

ヴィータの口上と共に光球が割れ、中からはやてが現れる

はやて「夜天の風よ、我が手に集え！導きの風！リインフォース！セーフトアップ！」

掛け声とともにはやての体が騎士甲冑に包まれていく
髪の色は薄くなり、瞳も青に変わる

はやて「佐助君、リインが防衛プログラムへの魔力供給をカットしてくれたで」

佐助「そうですか、よくやってくれました」

クロノ「夜天の…王？」

佐助「そうです、今日もって闇の書は終わり、夜天の書にです」

佐助「俺も本格的に始めますか、皆さん結界をお願いします」

佐助は右手を握り

佐助「来い・・・！」

そして左手で頭押さえ

14話 憑神《アバター》スケイス（後書き）

佐助「ふう〜よかったまだ死合しなくて」

作者「残念、無念」

佐助「待て！俺を殺すき！！」

作者「うん、だけど大丈夫スケイスいるし」

スケイス「当たり前だ」

佐助「喋れたんだ・・・」

スケイス「え？他の憑神《アバター》も喋れるぞ」

佐助「凄！」

スケイス「俺はお前だぜ」

作者「おい！俺を忘れるな！！」

佐助「あつ、ごめん」

スケイス・作者・佐助「」「次回も読んでください」「」

15話 スケイス2ndフォームvsガメ○（前書き）

こんな駄目作品を見てくださった読者のかたがたありがとうございます
ます

15話 スケイス2ndフォームvsガメ○

結界内部

スケイス
佐助「オラオラオラオラッ！」

佐助はガメ○に大鎌で何度もきりつける

佐助「ほとんど効いてねー」

ラッシング・クローで佐助のを引き裂こうとした

横にダッシュし佐助はラッシング・クロをかわす

佐助「ち、ならスタンを使うか」

左手からスタンを連続で飛ばす

ガメ○もプラズマ火球を連発し相殺するが何発かスタンが当たる

佐助「よし、麻痺った！」

3回斬った後大幅にさがりスラッシュウェーブを放った

佐助「これは、さすがに効いたか」

結界外部

ヴィータ「なんだよ！まだあんな力隠してたのかよ！」

なのは「ええ！？ヴィーちゃん、知ってたんじゃないの！！」

シグナム「いや、一体化している姿を見るのは初めてだ」

フェイト「一体化？どうゆうこと？」

シグナム「メイガスの時は猿飛の後ろにでかい人形のような姿で出ていたからな」

リンディ「まって、メイガスの時って言ったけど、メイガス・スケイス以外にもあるってこと？」

シャマル「ええ、話によると八体いるそうです」

リンディ「名前はわかる？」

シャマル「私の知っている限りではスケイス・メイガス・フィドヘルぐらいです」

リンディ「そう、ありがとう」

結界内部

ガメ○相当傷ついてます、だって甲羅が少し砕けてますから

頑張りましたよ、多分25回くらい同じ所大鎌で斬りましたから

ハイ・プラズマですねわかります、でかいですから

佐助「これぐらい、打ちかいしてやる」

ハイ・プラズマを大鎌の連続の攻撃で打ちかいした

佐助「自分の攻撃ださすがに効くだろう？」

ウルティメイト・プラズマを放とうとしていた

佐助「やる事は・・・一つだな、来いよ受け止めてやるぜ！」

ウルティメイト・プラズマが放たれた

佐助「環伐・環伐式閃・環伐乱絶閃」

環伐は自分を中心に円陣を敷き 環伐式閃自分を中心に円陣を
何度も描き、

環伐乱絶閃は環伐式閃のモーションに、最後に強靱な悪魔の巨
爪を召喚する

佐助「な！これでも押さえきれないか！！」

ウルティメイト・プラズマ（結構威力半減）をくらった

佐助は結界の端まで飛ばされた

ドカッ↑（結界に当たる音）

佐助「グ・・・、まともに・・・くらっちゃまった・・・」

ヴィータ「おい！大丈夫か！！」

佐助「ああ・・・なんとかな

今の攻撃でかなり魔力の無くなったはずだ、なら！」

ガメ○の見える範囲まで近づき

右腕にまるで砲台のようなものが現れ動きを止める玉が当たり

佐助「データドレイン！！」

砲台のようなものから8枚の花弁のようなものが現れる

動きを止める玉を中心に光線のように砲台のようなものに吸われた

佐助「なんとか・・・勝つ・・・た・・・」

アースラについた瞬間佐助は倒れた

15話 スケイス2ndフォームvsガメ○（後書き）

なのは「佐助くん、がんばったの」

佐助「サンキュ、なのは」

フェイト「でも、なんでウルティメイト・プラズマかわさなかったの？」

佐助「いや、かわしたら完全に結界壊れるしアースラ直撃してたし」

なのは・フェイト「……」

フェイト「で、でも結界全員で張ったんだよ！」

佐助「無理だな、あれはガメ○の最終奥義だ絶対結界破壊してた」

なのは「よく勝てたね……」

佐助「うん、もう一度やったら勝てる自信ない」

作者「ま、そこは置いというて」

佐助「置いとくのかよ!!」

なのは「まあまあ、落ち着いて」

佐助「しょうがねなく、わかったよ」

佐・な・フ・作「「「次回も読んでください」」」

16話 分の悪い賭けほど賭けほど賭けがいがある

俺が倒れてまあ30分後俺復活しました・・・でも何で！こんなにあちこち痛いの！！

佐助「よし、まず快癒の水飲もう」

飲みましたよ痛みも引いて完全回復

佐助「アースラ艦橋行きますか」

アースラ艦橋

リインフォース「主はやて申し訳ありません

闇の書の闇がまだ私の中にあるので夜天の魔導書を破壊しようと思います

大丈夫です、消えるのは私だけ」

はやて「いやや！なんで・・・なんでリインが消えなきゃいかんのか」

リインフォース「主はやて・・・」

佐助「おいおい、なに話を俺抜きで進めてるんだ、たく」

はやて「佐助くんならなんとか出来るはずや」

佐助「ああ、出来ないことも無い・・・だが・・・分の悪い賭けに

なるがそれでもいいか？」

はやて「ええよ、成功する確率は何パーセント」

佐助「だいたい40パーセントだ」

はやて「わかりました、お願いします」

リインフォース右腕を向けるそして

佐助「ドレインハート！」

8枚の花弁のようなものが現れるその花弁のようなものからが
伸びリインフォースを貫いた

はやて「なにしとるんねん！」

佐助「問題ない、これが成功率40パーの分の悪い賭けだ」

ドレインハート終了

はやて「どうや、成功したか？」

佐助「成功といえば成功したし、失敗といえば失敗かな」

はやて「どうゆうことや？」

佐助「簡単に言うと、ユニゾンデバイスとしての能力が無くなった」

リインフォース「それぐらいなら構わない」

はやて「ありがとな、佐助くん」

アースラ内部

はやてと守護騎士全員は、これから管理局へ奉仕する予定だ。
ただし、今はまだはやての足が完全に治ってないため、しばらくは
守護騎士が行くことになるだろうが

クロノ「猿飛喜べ、死刑だ」

佐助「そうか・・・さっさと殺せ」

クロノ「冗談だ」

佐助「そうか」

リンディ「佐助君に聞きたいんだけど

八相にはどれだけの力があるか能力・八相の名前教えてもらえる？」

佐助「わかりました、まず八相全てに星を1・2個塵も残さずに破壊できます」

全員「!？」

佐助「名前と能力は同時に教えます、

第一相 死の恐怖スケイスはスケイスが敵を倒したら倒した分だけ強くなります

第二相 惑乱の蜃気楼イニスは蜃気楼はほぼ現実と変わりません

第三相 増殖メイガスはリンカーコアの魔力を上げたりも出来ます

第四相 運命の預言者フィドヘルはその名のとうりこれから起こりうる運命を預言します

第五相 策謀家ゴレは俺もよくわかりません

第六相 誘惑の恋人マハは相手を毒などのにする事が出来ます

第七相 復讐する者タルヴォスは自分の意思で物理的ダメージ魔法ダメージを無効に出来ます

第八相 再誕コルベニクは簡単に言いますとこの世界の初期化プログラムです

これが八相の名前と能力ですあとスケイスには3rdフォームまでありますが」

うん、みんな驚いてるね、まあみんな固まったてるね・・・10分ぐらい待ちましたよ

佐助「俺、管理局に入っているんですが条件があります」

リンディ「なにかしら？」

佐助「Sランク以上の任務しか俺は受けませんそれが条件です」

リンディ「わかりました」

なのは「なんでSランクしかやらないの？」

佐助「Sランク以下だとならないから」

クロノ「それなら囑託魔導師か？」

佐助「いいや、まずは正式な局員になりますが」

クロノ「なら。しばらく陸士の士官学校に行ってもらおうが・・・」

佐助「分かっている」

フェイト「そういえば、佐助くんはどうやってデバイス持っていないの？」

佐助「ああ持っていないが」

クロノ「何ッ！？デバイス無しであの特大魔法を行使したのか!？」

佐助「普通出来るだろ」

案の定、クロノを始め、俺とお話をするために来た（今回はちゃんと話した。滅茶苦茶嬉しそうにしてたのが怖いが…）なのは、フェイトも驚いていた

クロノ「まあ。陸士のほうに行くのはなのはやフェイトと一緒にだ」

佐助「分かった」

クロノ「まあいい、で、君はご両親にはどう説明する？」

佐助「そのことだが、俺の両親は死んでいる」

クロノ「あっ……いや、すまない」

佐助「気にするな」

一応生きてるよ？ただし、この世界とは違う世界で、だけどね

佐助「試験、あるんだろ？」

クロノ「あ、ああ、だがまあ今はまだ先だ」

佐助「そうか、なら、修行するか」

なのは「えっ？学校は？」

佐助「行く金が無い」

なのは「あっ、……そうなんだ」

佐助「問題ない大学卒業くらいの知識はある」

つうかまた小学校からやり直すとかったりもん

なのは「えっ？じゃあお家は？」

佐助「家をなんとかするくらいの金しかない」

なのは「ごめん……」

佐助「別に誤る事でもない」

なのはの頭を撫でる

なのは「／／／」

リンディ「それくらいの面倒なら。私が見てあげるわ♪」

クロノ「母さ・・・艦長」

佐助「迷惑かけるからいいです」

リンディ「別に構わないわ、子供は子供らしく、学校に行って然るべきなのよ？それに、お友達も増えたほうが楽しいし、ねっ？」

いや、ねっ、とかウィンク混じりに言われても
・・・なんかフェイトとなのはがすげーキラキラした目で「「そうだよ！それがいいよ！！」」みたいな事視線で訴えてるし

佐助「分かりました、お願いします」

人生で二回目の学校生活始まります

16話 分の悪い賭けほど賭けほど賭けがいいがある（後書き）

はやて「よく、40パーセントで成功したな」

佐助「ごめん、あれ嘘データドレインで40パードレインハートの成功率80パーだぞ」

作者「ごめん、そっちの方が面白そうだから」

はやて・佐助・作者「」「次回も読んでください」「」

17話 人生二回目の学校（前書き）

知らないうちに十万PV突破二万ユニーク突破しましたありがとうございます

17話 人生二回目の学校

年明けて、新学期。

先生「えーと、今日は皆さんに嬉しいお知らせです、今日からこのクラスに、二人、皆さんと一緒に勉強をすることになった友達が来ます！」

「先生！男の子？それとも女の子？」

「両方です、入ってきて！」

ガラツ、と教室の扉を開く音。

そこにいたのは、茶髪にショートカットの女の子

もう一人は黒目、黒髪、の男の子

先生「それじゃあ、自己紹介を」

はやて「八神はやてです、今年からこの学校に復学します、皆さんよろしく願います」

佐助「猿飛佐助だ、よろしく頼む」

先生「えーっと、猿飛君の席は・・・バニングスさんの隣でいいわね

それじゃあ、あそこの席に座ってね」

佐助「わかった」

はい、アリサの隣ですね、ほんとうにありがとうございます
はあゝいろいろとめんどい

佐助「はじめまして」

アリサ「アンタ・・・」

佐助「どうかしたか？」

アリサ「なんでもないわ」

先生「猿飛君は編入試験で満点を出すほど頭が良いから、みんなも頑張ってるね？」

その情報はいわなくてもいいんじゃないかなあ？

横の金髪さんとか超睨んでますから

みんな元気だな、先ほどから質問攻めに会ってるよ

俺の方は全く問題ない問題ははやてだ

元々人と接するのは苦手ではないが、ああも大人数に囲まれるとさすがに無理があるか

おっアリサが仕切り始めた。やっぱアニメ通りだな。

なのは「佐助君！」

佐助「なにか用か、高町なのは」

なのは「なのは、って呼んでくれるかな？」

佐助「わかった、なのはこれでいいか？」

なのは「うん！」

佐助「で、用事は、なんだ？」

なのは「一緒にお弁当たべよ？はやてちゃんも行くって言ってるし」

佐助「構わない、で、どこで食べる？」

すずか「あたしたちはいつも屋上でたべてるわよ」

佐助「わかった、なら行くぞ」

すずかの言葉に従うように6人で屋上に行くことになった
うん、周りからの視線が痛いですねぶっちゃけ視線で人が殺せるなら

今頃俺は惨殺死体になってるな

まあ結局は屋上でのおんぴりとみんなはたべてますでど

俺のは軍人食ですから

なーんか雰囲気がおかしな感じですねアリサから不穏な気配が
します

まあ今は飯を食うことだけを考えましょうすずかもこっちを見
てますけど

17話 人生二回目の学校（後書き）

佐助 「俺はそんなに頭よかったんだ」

作者 「うん、ハーバード大学入れるぐらいね」

佐助 「すごー！」

作者 「デバイスも自分で作れるぞけど」

佐助 「俺人外だな・・・」

作者 「まーね」

佐助 「泣いていい」

作者 「駄目」

佐助 「もういいや・・・（涙）」

作者 「佐助も泣いたんで次回も読んでください」

18話 (前書き)

読んでくれた人ありがとうございます

18話

今現在屋上にいます・・・なのは達と飯を食べる事になりました
このメンバーなら素でもいいか

佐助「さうて、飯食いますか」

アリサ「なんか、雰囲気変わったわね」

佐助「これが、素の俺だぞ」

フェイト「なんで、学校内で変えるの？」

佐助「他の奴とはかかわりたくないからだ」

すずか「あの・・・」

佐助「なに月村さん？」

すずか「あ、私のことはすずかでいいですよ」

佐助「わかった、俺のことも佐助でいい」

すずか「はい、じゃあ佐助君ですね」

佐助「改めてよろしくなすずか
お前らも佐助でいいぞ」

なのは・フェイト・アリサ「「「わかった（の）（わ）」「」」

佐助「アリサ・バニングス聞きたい事があるんじゃないか？」

アリサ「アリサでいいわ、ええ、アンタ、あのときいたやつね」

佐助「あのとき、だけじゃわからないですけど」

アリサ「あたしとすずか誘拐された時よ！」

すずか「あ、私もそれを聞こうと思ったんです」

佐助「あゝ、なるほどあの時か」

なのは「佐助君、本当なの！」

佐助「ええ、まあ簡単に終わりましたが」

それから少しの間アリサとすずかが誘拐されていた時の話をしていた

アリサとすずかが拉致られてるのを見て自転車で追いかけて助けた程度だった

はやて「凄いな、魔法使ったん？」

佐助「いや、純粹に俺の双剣で倒した」

佐助「他に聞きたいことは？」

アリサ「別にないわ」

すずか「私もないですね」

フェイト「今日。帰ったら模擬戦。しょ？」

佐助「いいけど、俺は遠慮しないぞ」

フェイト「わかった」

佐助「なのは、明日お前の家に行っていいか」

なのは「いいよ」

19話 フェイトと模擬戦（前書き）

一から十九話を書き直しました

19話 フェイトと模擬戦

放課後

アースラの訓練室

結界張り役としてユーノ・シャマル・ザファイラがいた

佐助「クロノルールは？」

クロノ「時間は無制限、どちらかが魔力切れ・気絶・負けを認めた場合終了とする」

佐助「了解」

フェイトはもうバルディシュを構えてスタンバイ・・・速いなさでどうするかねえいつそのことフェイトの成長のために悪役になってみるかねな

蒼炎のカイト（G・U）・オーヴァン・ハセヲ（一番最初の）・
楚良どれがいいかなあゝ
・・・成長目当てならオーヴァンだな

佐助「はああああ！」

佐助の肩から鎌のようなものが出てくる（魔力で作ったAID Aの腕）、そして佐助は来タリシ転生ノ刻を持つ

クロノ「で・・・では・・・始め！」

フェイトSIDE

クロノが始めと言った瞬間に訓練室がどこかの壊れた塔の頂上のような場所になった

フェイト「え？なんでシグナムとなのはまでいるの」

そうなぜかシグナムとなのはがいる

佐助「はぁ！」

佐助の肩の鎌がシグナムを斬ってシグナムが倒れたと思った瞬間シグナムが光の粒子になって消えた

フェイト「え？」

そして佐助の肩の鎌はなのはを狙っていることにきずいて私はなのはに叫んだ

フェイト「なのは！」

だが遅くなのはも斬られて光の粒子になって消えた

佐助「フェイト真のトライエッジを教えてやる」

フェイト「なんで・・・なんでこんなことするの佐助・・・」

佐助「今の俺とお前は敵どうしだ」

佐助の言葉を聞いた瞬間に私は自分の制御がなくなつた

フェイト「許さない・・・許さない！」

フェイトSIDE終了

佐助「（これにききうてるのは・・・ユーノとシャル・・・おザフィーラもききうてるか、まあこの三人は顔を青ざめてるからな）」

フェイトが斬りかかってくるのを剣の方で受け止め銃の方を撃つ

フェイト「ッ！」

フェイトはなんとかソニックムーブで横に回避する

佐助「あまい！」

肩のAIDA（魔力）の腕でフェイトに追撃する

それをフェイトはバルディッシュで受け止めるがふっ飛ばされる

佐助「どうしたフェイトお前はどの程度か・・・」

フェイト「ハーケンセイバー！」

佐助「この程度か・・・三連星射」

ハーケンセイバーに向けて三発銃弾を放つ

フェイト「トライデント・・・スマッシュー!!」

佐助「ほお」

AIDAの腕で受け止めフェイトに三連星射を放つ、それを回避する

佐助「フェイトお前は・・・弱い」

佐助は来タリシ転生ノ刻の左手の銃の方を右手の剣と同じものにする

フェイトはAIDAの腕に足を捕まれ右上の壁次に地面に叩きつけられ逆の方向の放り投げられる

佐助「これが・・・真の・・・トライエッジだ!」

フェイトは三爪痕のマークに斬られる

フェイト「うつ・・・まだ・・・まだやれる・・・なのはのシグナムの敵を討つまでは・・・」

フェイトは起き上がろうとするフェイトに近づき

佐助「少し眠ってろ・・・零距离バスター」

フェイトは完全に気絶した、それを見た佐助はAIDAの腕を消した

佐助「・・・やべやりすぎたかも・・・」

結界を解いてユーノ・シャル・ザフィーラが寄ってきて

ユーノ・シャル・ザフィーラ「「やりすぎだよ（です）（だ）
！」「」」

シグナム「おいシャル最後にテストロッサが私と高町の敵を討つ
まではと言ったがどうゆう意味だ？」

なのは「うん」

シャル「医務室で話すわ」

（医務室）

シャルが幻術で見せた塔での事をなのは・はやて・シグナム・
ヴィータ・クロノに話しました

なのは「ねえ佐助君どうしてフェイトちゃんにそんなことしたの！」

佐助「はあ、なのは・はやてにも言えることだがお前らは管理局の
軍隊・警察の部分に入ることとは敵は犯罪者や敵対組織

戦いの途中に仲間や友達だって殺される事だってあるお前らにはそ
の覚悟がない、だから今回のフェイトのように自分が制御できずに
怒り任せの戦いになる、クロノお前は経験あるんじゃないか？」

クロノ「・・・ああその時の隊長が止めてくれた」

佐助「そうか」

はやて「でもそこまでする必要なかったとおもうで」

佐助「だがもしもの可能性があるからな」

フェイト「うつ・・・」

シャル「起きたようね」

佐助「・・・（ニヤリ）」

何かを思いついたのか空間から何か看板を出す

なのは「フェイトちゃん！」

フェイト「え？なのは？・・・なんで!？」

佐助「はい注目！これなんだ？」

佐助はフェイトに看板を見せる

フェイト「ドッキリ大成功？」

佐助「その通りなのはとシグナムの奴はドッキリでした
でクロノ説明お願い！」

クロノ「はあよく聞けよフェイト・・・」

佐助のした説明をクロノがする

フェイト「……覚悟か、佐助にはあるの？」

佐助「ん、俺か？俺の場合は怒りに任せた戦いではなく完全殲滅の技でその星ごと壊すかな（笑）」

その場の全員「（本当にやりそう）（やな）（だ）」

佐助「まあちょっとやりすぎたなすまん」

フェイト「えっと……いいよ」

佐助「そうか」

20話 シスコンをぶっ飛ばせ

屋上現在昼飯時

佐助「昨日言ったとおり今日なのはの家に行くからな」

アリサ「もちろんあたしたちも行くわよ」

なのは「分かったの」

フェイト「なんで、佐助は、なのはの家に行きたいの？」

はやて「それは、ウチも気になるな」

佐助「その事か、御神流の使い手である恭也さんと手合わせしたいのも1つだが翠屋のケーキが食いたい！」

はやて「そうなんや」

なのはの家に行く途中・・・

なのはが石でこけそうになりました

なんでだろ？俺の体がとっさに動いてなのはを抱き止めていた

佐助「大丈夫か、なのは」

なのは「うん／＼／」

なんで顔少し赤くなってるの？

翠屋につきました

なのは「ただいま〜なの！」

士郎「おかえり、なのは、でその君は？」

佐助「なのはの友達の猿飛佐助といいます、以後よろしくお願いします」

士郎「こちらこそ、高町士郎だ、よろしく佐助君（動きに無駄がなくな）」

佐助「御神流の使い手である高町 恭也さんと手合わせしたいのですがいいですか？」

士郎「・・・いいだろう、恭也なら道場にいるからついて来なさい」

佐助「ありがとうございます
なのは達も来るか？」

アリサ「当たり前でしょ」

士郎「さて、道場の方に移動しようか」

高町家道場

士郎「恭也、佐助君と変わってくれないか
美由希はなのは達と見学してるという」

恭也「わかりました」

佐助「恭也さんよろしくお願いします
武器は持ってきてるのでいいです」

木製の双剣をコートの中から取り出す

士郎「ほお、双剣を使うのか、・・・二人とも開始線へ」

恭也「永久不動八門一派・御神真刀流小太刀二刀術 高町恭也だ」

佐助「死の恐怖 猿飛佐助、推して参る」

恭也「《御神流・裏奥義之参“射抜”》」

二連撃の刺突

佐助「いきなりですか」

双剣で二連撃の刺突をはじく

恭也「《御神流奥義之壱“虎切”》」

一刀での高速の抜刀術

佐助「甘い」

片方の双剣で受け止め恭也に蹴りを入れるがガードされた

佐助「なら、こちらも疾風双刃」

逆袈裟からの3連撃

からすぐに攻撃に入る

佐助「連撃、一双燕返し」

高く斬り上げた後上から恭也を叩き落とす

佐助「ちっ、うまく着地したか」

見学組み

美由紀「ありえない・・・」

そう呟いた美由紀が呆然としているが、それも仕方がない

よく手合わせをし、そして自分の師匠でもある恭也が押されているのだから

その動きは自分を相手にする時より明らかに速いにもかかわらず

フェイト「佐助の雰囲気、模擬戦の時と似てる・・・」

なのは「うん、でも、まだ本気じゃないの」

恭也「《御神流奥義之歩法“神速”》」

集中力を極限まで高め、モノクロの世界に飛び込む

恭也「《御神流奥義之式“虎乱”》」

二刀で放つ連撃技

佐助「早いとその分隙が大きい、虎輪刃」

自身が回転しながら斬りつける

佐助「舞武」

恭也を連続で10回くらい斬りつける

佐助「終わりだ！旋風滅S・・・」

士郎「そこまで！！」

士郎「どうだ？上には上が居るってことがわかっただろ」

佐助「こんど、手合わせの時には

無手・棒・鎌・大剣それか今回と同じように双剣か選べるようにしておきます」

士郎「・・・そうか。出来れば今度は私と手合わせしないか」

佐助「わかりました、ですが士郎さんの場合は最初から本気でいきます」

20話 シスコンをぶっ飛ばせ（後書き）

佐助 「ふう、楽しかった」

作者 「手加減しすぎ！何で本気出さなかった!!」

佐助 「本気出したら駄目だろ」

作者 「いいのいいの、無双隼落とし一撃で終わるのに・・・」

佐助 「はいはい」

佐助 「次回も読んでください

21話 黄泉の国へGo

現在黄泉の国

皆さんの言いたい事はわかります

なぜ黄泉の国にいるかでしょ

簡単に言いますとプレシアとアリシアの蘇生させようと考えて
のです

佐助「お！見えてきた、後もう少しで黄泉の王様の元へ着くな」

黄泉の王の城の内部

佐助「?なんで敵が出てこないの?なんで?」

???「それは、お前の魔力がリミッターつけてもでかいからだ
その魔力上級の上の黄泉兵並だぞ」

佐助「じゃあ、リミッタ3つつ外そう」

???「ほー、我には劣るがいいだろう戦ってやる」

佐助「で、あなた誰?」

???「黄泉の国の王スサノオだ」

佐助「え?・・・ええええ!」

スサノオ「我と戦いに來たのだろなぜ驚く」

佐助「気軽すぎ！しかもいきなり！！」

スサノオ「うん、じゃあなぜ來たか教えて」

佐助「二人ほど生き返らせてほしいんだけど
・・・無理ですね」

スサノオ「できるよ、この頃暇だから、
我と戦って勝つか我が認めたら生き返らせていいよ」

佐助「軽！」

スサノオ「結界も張った始めよ」

佐助「ああ」

俺はアルビオン様から頂いたアロンドイトを出す

スサノオは天羽々斬あめのはばきり劍を出す

佐助・スサノオ「勝負」

スサノオ「獄炎球」

地獄の炎を放つ

佐助「ギガクール」

獄炎球をギガクールで相殺し
アロンドイトで斬りつけるが、ガードされる

スサノオ「なかなかやるな」

佐助「そちらこそ
リミッター4つつ目解除」

スサノオ「地獄閻魔斬」

地獄の炎を剣にまとい四連撃をくりだす

佐助「アロンドイトで、できるかわからないが無影閃斬！」

スサノオに突進し、そのまま連続して4斬撃を放つ

地獄閻魔斬と無影閃斬がぶつかり合いクレータができた

12時間ほど戦っていました

スサノオ「これで最後の一撃でいいな」

佐助「ああ、いいぜ」

スサノオ「我が最大の一撃！！獄炎滅龍波！」

佐助「我が剣最大の一撃！！大次元斬！」

この二人の一撃で黄泉の国にさらに深い穴ができました
この穴は底が見えません・・・落ちたら普通に死人がさらに
死にますね

スサノオ「あゝ、楽しかった♪

まずは、はいこれ我の携帯番号とメアド」

えゝ黄泉の王の携帯番号とメアド貰いましたすげゝ

佐助「サンキュ、スサノオ」

スサノオ「佐助の言ってた、プレシアとアリシアだっけ？
そいつ蘇生させといたから、多分公園あたりにいると思うわ」

佐助「おう、ありがとなスサノオ
またいつか戦おうぜ」

そう言い転送してか帰るのだった

スサノオ「やっぱ、面白いな佐助は」

佐助は黄泉の王に気に入られるのだった

現在位置公園

プレシア「ここはどこ?」

佐助「始めまして、プレシア・テストロッサそして、アリシア・テストロッサ」

プレシア「あなた、何者?」

アリシア「お兄ちゃんだ?」

軽く、くびをかしげるアリシア・・・かわいい

こりゃーおちますね特に、ロリコンとかロリコンとかロリコンとかが

佐助「俺ですか、俺は猿飛佐助、フェイトの友達でありあなた方の蘇生を頼んだ人物です」

プレシア「蘇生なんてできるわけ・・・」

佐助「できますよ、黄泉の国の王ならね」

プレシア「黄泉の・・・国の王?」

佐助「ついて来てください、プレシアさんアリシアちゃん」

ハラオウン家前

チャイムを押す

ピンポーン

エイミィ「はーい」

エイミィさんが扉を開けてくれました

エイミィ「佐助君1日居なかったけどどうしたの？
それと後ろのひ・・・とは」

佐助「そのことですが中に入ったら話します
・・・もしかして、なのは達いますか？」

エイミィ「ええ、アリサちゃんとすずかちゃんと守護騎士達もね」

佐助「そうですか・・・」

リビングに入った瞬間にいきなりですか

なのは・すずか・アリサ・フェイト・はやて・リイン？ 「」「」「」
「佐助（君） お話しようか」「」「」

佐助「まで！それよりまずフェイトお前に合わせないといけない人
がいる
プレシアさんアリシアちゃん入ってくれ」

プレシアさんアリシアちゃんが入りましたよ
フェイトが凄い泣いてプレシアさんに抱きつきました

「聞きたい事があるんだけどいいかしら
リンディ

PLLLLLL · · PLLLLL

佐助
「すみません」

携帯がなったので取り出す

佐助 「はい、どちら様？」

スサノオ「我だ、スサノオだ」

佐助 「どうしたスーさん」

スサノオ「あだ名か？いいぞそれで」

佐助「で？用件は？」

スサノオ「そうそう、蘇生させたプレシアだっけ？
そいつの病も治しといたから」

佐助「サンキュー！ さすがスーさん！！」

スサノオ「今度は宴会でもやる時に呼ぶは」

佐助「じゃーなー」

携帯をしまう

佐助「あ、いいですよ」

リンディ「今の携帯で話してた人誰」

佐助「黄泉の国の王スサノオですが、何か？」

全員「!？」

リンディ「どうゆう事かしら」

佐助「簡単に言いますとプレシアさんアリシアちゃんを蘇生してくれたのもスサノオですよプレシアさんの病も治してくれたそうですし」

リンディ「もしかして、1日いなかったのは・・・」

佐助「ええ、あなたの考えてるとおりです」

クロノ「そんな、馬鹿な話信じるとでも」

佐助「信じるしかないでしょう、現に今いるのだから」

佐助「もう帰っていいですか
スサノオとの戦闘で疲れたので」

クロノ「本当に君は規格外だな」

佐助「後の事は、明日にしましう」

21話 黄泉の国へGo（後書き）

作者「おい、お前の攻撃帰って来たぞ」

佐助「そうか、特攻具・霸離仙（岩をも砕こうと思えば砕けるハリセン）」

佐助「虎乱襲、よし終了」

作者「お前も十分チートだ
アロンドイトの方はどうだった」

佐助「かなり使いやすかったな」

作者「そうか」

22話 デバイス完成（前書き）

今回は、なかなか話が浮かばなかったもので短いですがご了承ください

22話 デバイス完成

佐助「ふう、何とか俺の魔力に耐えられるデバイスができたな
あとはom様からいただいたトランザム制御・発動チップをインストールするだけか」

おはよう・こんにちは・こんばんは、佐助です

ついに俺もデバイスを作り完成しました

前から作ってたんですがとうとうできました！

デバイス「君が僕のマスター？」

佐助「そうだ」

デバイス「僕の名前教えてくれる？」

佐助「カイト・・・The Worldを救った英雄の名前だ」

カイト「了解、よろしくね、佐助」

佐助「ああ、よろしくカイト」

さてと、そろそろハラオウン家行きますか

ハラオウン家

プレシアさんとアリシアの事であれこれ2時間話し合った結果

佐助「蘇生のことは厳密にお願いします

プレシアさんとアリシアの方は士郎さんに頼んで何とかしてもらいます」

リンディ「ええ、わかったは」

佐助「では、失礼します」

そして数日後ちゃんと戸籍はできてたし家のほうは用意されていましたw

そして2日後

現在アースラ訓練室

シグナム「早く模擬戦やるぞ」

凄く喜んでますね、そんなに模擬戦が楽しみなんでしょうか
さすがバトルマニアですねシグナム

まず、どうしてこうなったか説明します
俺がデバイス作ったのはいいが性能を調べたいので
模擬戦の相手を探していたらシグナムに模擬戦を頼まれました
それをOKした結果です

シグナム「なにをしている早く準備しろ」

佐助「すみません、カイトセット・アップ」

赤が主体の衣装に変わる。hackのカイトの衣装と同じです

佐助「やはり武器は英雄の双剣だな」

カイト「うん、佐助の記憶の中からカイトの記憶は僕が見たからね」

佐助「そうか、シグナム始めるぞ」

結果をつたえますトランザムを使い

10秒で喉元に双剣を当て勝ちました

その後6回程度模擬戦をするはめになりました、
、
、
o r z

22話 デバイス完成（後書き）

佐助「やっとできたー俺のデバイス」

作者「tomo様からいただいた
トランザム制御・発動チップ使わせていただきました」

佐助「でも何でhackなんだ？」

作者「俺が好きだから完全クリアしてもまだやってるほどにな」

佐助「駄目人間が」

作者「・・・認めよう」

佐助「認めた!？」

23話　なのは墮ちる、えっ？なのは俺が墮とさないよ（前書き）

23話　なのは墮ちる、え？なのは俺が墮とさないよ

時間はかなり飛びます

理由はちゃんと言うから殺そうとしないで！

理由は刺激が無いから

入局2年でやった任務は違法施設の破壊75件他にもSランク
任務だよ

後はラルゴの爺ちゃんとお茶を飲みながら将棋や囲碁それとチ
ェスなどだよ

刺激無いじゃん、

え？なんで『伝説の三提督』の一角であるラルゴ提督と仲がい
いのか？

まあ、いつか話すよ

猿飛家研究室

佐助「カイトお前に真祖様からいただいた、蒼炎データ入れといた
ぞ」

カイト「ありがとう佐助」

佐助「なあカイト、そろそろ、なのはを休ませたいいな」

カイト「うん、なのはちゃんを見てると最初の頃のハセヲみたいだ
よ」

佐助「そうか、忠告しますか」

アースラ内部

今回の任務に向かおうとしている佐助は忠告する

佐助「なのは、当分魔法を使わずに地球にいろ
お前の体はボロボロの状態で無理したら死ぬぞ」

なのは「・・・何言ってるの？佐助君・・・私の体のことは
私のが一番理解してるよ」

佐助「はあ、わかった、もう何も言わん
だが覚えておけ、そんな調子じゃ、かなり大きな後悔をするか
それか死ぬかだ」

なのは「・・・私は後悔なんかしないし死なないよ・・・それじゃ
あね佐助君」

そう言って、なのはは任務に向かった

カイト「いいの佐助、そろそろなのはも限界だよ」

佐助「はあー、あいつは馬鹿なんだよ
魔法を得たことで、色々なことに関わってきた友達・仲間
そして何より周りの人の役に立てた実感を得た、恐れてるんだよね
もし自分が魔法を使えなかったら、フェイトやはやてや俺が離れて
いくんじゃないかってな」

カイト「・・・佐助転送準備終わってるよ」

もしものことがあるから行くんでしょ」

佐助「ああ、さすがカイトだ」

なのはSide

任務現場

なのはは佐助に言われた事が頭から離れないのだった

なのは「（なんであんなこと言うの佐助君
私から魔法を取ったら、何にも残らない必要なのフェイトちゃん達
と友達でいるために!!）」

そんな事を考えているなのはに突然現れたアンノウンをなのは
が迎撃しようとデバイスを構え攻撃　をしようとしたとき、体が
動かなくなった

ヴィータ「おい！なのはどうした!!」

ヴィータの叫びが後ろから聞こえる。だが、なのはは動けず、
アンノウンの凶刃が振り下ろされよ　うとしていた

???「間に合えー!!」

カイト「佐助もう戦闘始まってよ」

佐助「そうかカイトセットアップ」

佐助は《ゲートオブバビロン》から札を一枚出した

佐助「快速のタリスマン」

カイト「佐助！なのはがそろそろやばいよ」

佐助「マジかよトランザム！」

佐助の体が赤く発行する

佐助「間に合えー！！」

佐助は、信じられないスピードでなのはの元へ向かいなのはを助ける

佐助「大丈夫か？なのは」

なのは「え？佐助君・・・なんでここにいるの？」

佐助「それは後だヴィータなのはをアースラに連れて行け」

なのは「ま、まだ大丈夫だよだから・・・」

佐助「駄目だ、なのはお前は死にたいのか
ヴィータ早く連れて行け」

ヴィータ「あ、ああ」

ヴィータは、なのはを連れて行った

佐助「お前ら俺の大事な仲間を傷つけたんだ
塵も残さず破壊してやる」

佐助は蒼炎データを機動させた

佐助「蒼炎・拡散魔王玉!!」

拡散弾のような数の小型の魔王玉に蒼炎の炎を纏わせた

アンノウン達は無数の蒼い魔王玉に全滅させられた

病院 病室内

なのはは病院に運ばれ、ベッドで休んでいた
そこにはフェイト達や士郎達もいた

そして、シャルから衝撃の報告が告げられる

フェイト「嘘だね・・・?シャル・・・」

はやて「じ、冗談きついで?シャル・・・嘘って言ってや・・・」

シャル「・・・嘘じゃないわ・・・、なのはちゃんの身体は、
今までの無理な訓練や魔法の使用でボロボロなの・・・

正直、歩けるようになるかも怪しいわ・・・最悪歩けるようになって
も、

魔法は使えないかもしれないの・・・」

ヴィータ「くそッ!!なんで・・・、なんで!!」

シグナム「落ち着け！！ヴィータ！！」

そんな病室に佐助が入る

佐助「すみません皆さん、なのはと二人で話したいことがあるので少しの間出ていてくれませんか」

皆さんが出てくれました

佐助「まず、なのはお前は仲間を信用してないのか？」

なのは「そんな事ない」

佐助「なら、なぜ頼らない

俺の考えだがなのはは怖いんじゃないのか？

魔法が使えなくなって周りの人が離れていくんじゃないかって」

なのは「・・・やめて・・・」

佐助「お前はバカだよ」

なのは「え？」

佐助「俺やフェイト達もだがなのはが魔法を使えるから

一緒にいるんじゃない高町なのはが本人が好きだから一緒にいるんだお前の周りにいる奴らはそんなの気にする奴らか違うだろ」

なのはは涙目になりながらうなずいた

佐助「それでも信じられないなら最低限俺だけでも信じろ」

なのは「・・・佐助君・・・」

佐助「正直に言えよ、なのはお前はとうしたい？
魔法をあきらめるかそれともあきらめないか」

なのはは目をつぶり、考える、そして、自分の想いを口にする

なのは「・・・私は・・・、私はまた、みんなと・・・、みんなと
空を飛びたい！！」

佐助「なのは、お前の覚悟はわかった
まずは休めそれからは俺もなのはが飛べるようにてずっとやってやる
から」

なのは「・・・私できるよね」

佐助「できる、できないじゃない、やるか、やらないかだ
あきらめるんじゃないぞ」

なのは「佐助君・・・」

23話　なのは堕ちる、え？なのは俺が堕とさないよ（後書き）

佐助「なんか、新しい技増えたな」

作者「うん、他にも増える予定」

佐助「StrikerSに入るのか？」

作者「いや、まだは入らないよ
ヒロインとデートとかやるつもり」

佐助「・・・そうか」

じゃあ夏休みも修学旅行も有るな」

作者「うんStrikerSは当分やらないよ」

佐助「でも俺が大変だな」

24話 ティーダ・ランスター登場

なのはの大怪我から4ヵ月後、時期は3月なのはは完全回復しています

え？早くないかって、俺が色々と回復を早めましたから

現在管理外世界

佐助「あんたがティーダ・ランスター？」

ティーダ「はい！今回の任務に同行させていただくことになりました
たティーダ・ランスター二等空尉です」

佐助「猿飛佐助二等空尉だ、よろしく頼む」

ティーダ「あの『死の恐怖』と同じ任務ですか」

え？なんでこんなに階級高いのか？

かなりの違法施設の破壊とその違法の内容・協力者のデータを
渡していたり

Sランク任務の数々をこなしていたらこうなっていました

あと『死の恐怖』は俺の二つ名だよ、何でハセヲと同じな
んだろ？

佐助「今回の任務は違法魔導師集団の殲滅だ

ランクはリーダーがSランク、リーダー各がダブルAAぐらいだろう
だが油断はするな」

ティーダ「わかりました」

カイト「10時の方向、約半径4キロ先の施設に熱源反応があるよ」

佐助「カイトセットアップ、ティーダミッションスタートだ」

ティーダ「はい」

施設内部

大鎌・首削をもって内部に特攻を仕掛けている

佐助「天葬蓮華！」

ドカアアアアン！

ティーダ「クロスファイア、シュート！！」

バンバンバンバン、ドオオオオオオオオン！！

すげーティーダ攻撃してるな

ここまで強かったんだ

・・・このレベルで何で死んだんだろう？不思議だ

あらかた制圧し終わったあと、辺りを搜索中

佐助「二手に別れるぞ」

ティーダ「そうですね」

ティーダは俺と反対方向に行った

佐助「カイト、英雄の双剣」

カイト「了解」

佐助「ふうくん、あんたがボス？」

違法魔導師集団ボス「まさか・・・『死の恐怖』が来るとは」

佐助「それなら、お前らに教えてやるよ『死の恐怖』をな」

違法魔導師集団ボス「行くぞお前ら」

他の違法魔導師達も魔法を使ってきた

佐助「カイト、蒼炎データ機動」

カイト「了解、蒼炎データ機動」

佐助は蒼炎の炎を体に纏わせた

ドカーン

違法魔導師集団ボス「な！なに！？無傷だと！！
あれだけの砲撃をくらって！」

佐助「この程度じゃ、俺の蒼炎は破れないぜ」

違法魔導師集団ボス「この化け物が！」

佐助は銃剣・白浪を取り出す
そして違法魔導師集団ボスとその周りの違法魔導師に
狙いをつける

佐助「烈球操弾！」

バンバンバンバン！

違法魔導師集団ボスとその周りの違法魔導師に散弾状のエネルギー
ギョー弾を発射する

佐助「これで、終了」

外に出るとティーダ終わっていたようだ

現在時空管理局

俺らは事件の報告書をまとめた

ティーダ「佐助君」

佐助「なんですか？ ティーダさん」

ティーダ「お疲れ様」

そういつて、缶ジュースを渡してきた、ありがたくそれを受け取ることにした

佐助「ありがとうございます」

なに話そうかな？

佐助「ティーダさんは、夢とかはありますか？」

ティーダ「夢、か、・・・実は執務官になりたくてね」

やっぱりな

佐助「そうですか、俺の知り合いも受けたんですが
見事に落とされましたけど、それで今猛勉強してます」

ティーダ「そうなのかい、アレは難しいからね、僕も何度も落ちた
さ・・・」

佐助「それでも、あきらめないのですね」

ティーダ「まあ、ね、未練がましいかもしれないが」

佐助「それでもいいじゃないですか、夢をもてるだけいいじゃない
ですか」

ティーダ「それなら佐助君の夢はなんだい？」

佐助「俺ですか、俺は自分の大切な奴らを守りたい
それだけです、それ以上の夢はありません」

ティーダ「そうなんだね」

佐助「俺なんかより、いい夢を持っているんですから
執務官に頑張っとなってくださいね」

ティーダ「ああ、ありがとう」

佐助「俺はこれで」

ティーダ「ああ、あつ、そうだ。今回のことで君も私も一等空尉に
昇進だそうだよ」

佐助「それはよかった

ティーダさん無理して死なないでください」

ティーダ「おあ、わかっているさ」

24話 ティーダ・ランスター登場（後書き）

佐助「すごい階級上がってるな」

作者「うん、だってかなりのことやってるし」

佐助「でも、なんで『死の恐怖』なんだ」

作者「だって、結構台詞でお前に教えてやるよ死の恐怖をなっ
言ってるじゃんだから」

佐助「まじ、台詞で決まったの・・・」

作者「あとの二つ名は『破壊神の再誕』とか『鬼神の申し子』とか
他にも色々あるよ」

佐助「ねえ、何でもともに言えるの『死の恐怖』だけ
しかも『破壊神の再誕』とか凄く危ないし！」

25話　なのはとデート（前書き）

作者「いつの間にか二十五万PVと四万五千ユニーク突破してた・・・」

佐助「マジかよ！」

作者「うん、『リリなの』の力って凄いな」

佐助「自覚あるんだ」

作者「当たり前だ」

25話　なのはとデート

俺らは無事小学校を卒業

まあエスカレーターだからそのまま上がるだけなんだけどね

で今は、なのはと遊園地でデート中ですw
えいなぜこうなったか

回想

卒業式が終わり、家に帰ってから数分後

電話がかかってきた

佐助「もしもし、どうかしたかなのは？」

なのは「佐助君デートしよ」

佐助「？別にいいぞ」

なのは「明日の朝の9時半に駅でね」

回想終了

カイト？今待機状態の腕輪だよ

なのは「佐助君、早く行くよ♪」

なのははそう言いながら腕を絡めてくる

とても恥ずかしいです

カイト「（佐助も大変だね、僕も通ったけど）」

佐助「わかった、行くかなのは」

まず手始めにジェットコースターに乗る事にした

佐助「さて、乗りますか」

なのは「・・・うわぁ・・・、ちょっと怖そう」

ジェットコースターがレールを登りつめ、降下する

なのは「きゃあー!?!」

佐助「・・・なぜ? いつも飛んでるのに・・・」

ジェットコースターを降りてなのはをベンチで休ませる

なのは「ふええ〜・・・」

なのはは目を回している

佐助「ほら、これを飲め」

と言い飲み物を渡した

なのは「ありがとう、佐助君」

そのあと色々なのはとメリーゴーランドなどに乗りました

佐助「なのは、そろそろ時間だから帰るぞ」

なのは「佐助君、今日はありがとう楽しかったよ♪」

佐助「こちらこそ、今日は楽しかったよ」

まあ、帰ったらフェイト達とのO☆H A☆N A☆S H I☆フラ
グが

立ってました（涙）

その後フェイト達ともデートする事になりました

佐助「なんでこうなるの（涙）」

26話 はやてとデート(前書き)

ゴールデンウィークに入りますので更新を一時的に終了します・
・多分・・・

26話 はやてとデート

ジャンケンの結果まずは、はやてとのデートになりました

現在はやてとの待ち合わせ場所

佐助「そろそろ時間だな」

はやて「佐助君、はいな」

佐助「そんな事より行くぞ」

デパートに行くことにしました

佐助「さてと、で、どこ行く」

はやて「そうやなくアクセサリーショップやな」

佐助「それじゃあ行くか」

アクセサリーショップ

佐助「（はやてにどれが似合うかな）」

現在、佐助ははやてに似合うアクセサリーを探している

まあ5分ぐらい立ちました

佐助「お！この雪の結晶の型のペンダントがいいな」

佐助「おい、はやてちよつとこっちへ来い」

はやて「なんや？」

はやてが近づいてくるを当ててみた

佐助「うん、完璧だな」

すぐさまペンダントを買った

佐助「はい、プレゼント」

はやて「えっ！？ええの？」

佐助「？当たり前じゃん、そのために買ったんだから」

はやて「ありがとうなあ／＼／」

佐助「どういたしまして」

それから服等も買ってはやてとのデートは終わりました

26話 はやてとデート（後書き）

作者「・・・デート編なら10回は死ねる」

佐助「なんとなく分かる」

作者「明日までがなら書けるからその間に更新できるかな」

佐助「その後は家の用事でないからな」

作者「明日までが勝負だな」

佐助「まあ、頑張れ」

27話 フェイトとデート

今回はフェイトとのデートです

現在水族館前

佐助「遅いなフェイト何かあったか？」

フェイト「ごめんなさい佐助！遅くなっちゃった」

佐助「気にするな、でも遅くなるなら連絡しろ心配になるから」

フェイト「うん！！」

現在水族館の中

フェイト「うわー！綺麗だね」

佐助「確かにな」

でも本当に久しぶりだな水族館転生後に行っていないからな

佐助「フェイトそろそろイルカのショー始まるから行くぞ」

フェイト「うん！」

はい、イルカのショーを見ましたよ

フェイト「凄かったね！あのイルカたち」

佐助「確かに、久しぶりに見たがやっぱりいいな」

フェイト「次どこ行く？」

佐助「ペンギンでも見に行くか」

フェイト「うん♪」

はい、ペンギンは見ましたよ一匹以外は普通のペンギンでした
俺はフェイトとそのペンギンを見たときは一瞬固まりました

え？どんなペンギンだったって、ボスらしきペンギンは空を
飛んでました、水の空じゃないよ大空のほうだよ

まあ、あれこれ5時間くらいいましたから

佐助「もう遅いしそろそろ帰るか」

フェイト「うん」

27話 フェイトとデート（後書き）

作者「やっと、書けたー！」

佐助「やつとか！（怒）」

作者「あとは、アリサとすすかとアインだけだ」

佐助「まだずいぶんいるな」

作者「うん」

佐助「俺は早くスパロボαの大雷凰の技を練習したいんだ」

作者「多分神雷はかなりの修行が必要だぞ、それ以外は結構すぐできるだろうが」

佐助「そうだな」

作者・佐助「次回も読んでください」

28話 アリサとデート（前書き）

作者 「なんかもう自分でもよく分からなくなりました」

佐助 「このへボ作者が！」

作者 「ひど！」

28話 アリサとデート

佐助「さてと、そろそろ来るかな」

今回はアリサです

アリサ「早いわね」

佐助「女性を待たせるわけにもいかないからな」

アリサ「そ、そう／＼／＼」

佐助「で、どこ行く？」

アリサ「新しく出来たショッピングモールに行くわ」

佐助「了解、それじゃ行きますか」

現在ショッピングモールの洋服売り場です

佐助「なんか欲しい服あったか？」

アリサ「ええ、合ったわ」

佐助「今持っている服か」

アリサ「ええ、そうよ」

はい、買いましたよ、俺が

まあ、何事もなく一通りの買い物は終わりましたで現在カフェテリア昼食です

佐助「コーヒーとホットドックで」

アリサ「私はコーヒーとタマゴサンド」

ウェイトレス「はい！かしこまりました！ご注文繰り返します
ホットドックお一つにタマゴサンドお一つアイスコーヒーお二つで
すね？少々お待ちください」

ウェイトレスが離れていく

食事が来るまでの間アリサとたわいのない話をしていた

ウェイトレス「お待たせしました。ごゆっくりどうぞ」

佐助「ありがとう」

笑顔でお礼を言ったつけアリサにすねを蹴られました

こんな感じで昼食は終わった、そのあとショッピングモール内
を色々見て回り

アリサ家まで送り終了しました

28話 アリサとデート（後書き）

佐助 「いつまで続くんだよ」

作者 「後二人だ頑張れ」

佐助 「次はすするか」

作者 「俺も高校の方が忙しいし更新が遅くなるな」

佐助 「他にも書いてるからな」

作者 「・・・ごめんなさい」

佐助 「いつか、お前を完全に殺してやるから覚えてろ」

作者 「逃げる！」

佐助 「逃げたか・・・次回も読んでください
俺は作者を追います」

29話　すずかとデート（前書き）

佐助 「結局書けなかったのか」

作者 「うん、やっぱり俺にはまだ他の作者様のキャラを扱うのは無理」

佐助 「もっと努力しろ」

作者 「はい、多分いつかは」

佐助 「頑張れよ」

作者 「おう！」

29話 すずかとデート

佐助「今思ったけどアリサやすずかにフラグ立てたか？」

確かに誘拐されたとき助けたよ

でもそれだけで惚れられるって動機が弱いような気がするが

そんな事考えてるとリムジンで迎えに来ました

すずか「佐助くん今日はよろしくね♪」

すずかは、リムジンの窓から顔を出し俺に言った

佐助「・・・リムジンで迎えに来るか普通？」

さすがはお嬢様だな、それよりもどこ行くんだ？」

佐助は呆れながらすずかに聞く

すずか「まず私の家に、かな？」

佐助「何故すずかの家なんだ？」

すずか「うーん、私が、というよりお姉ちゃんが、佐助君にちよつと用があるんだって」

何故だ？ 凄くいやな予感が・・・

佐助「まあ、了解した」

すずか「うん、ゴメンね」

佐助「別に構わない」

俺はリムジンに乗り月村邸に行った

はい、現在月村邸にいます

凄手数猫がいますね

佐助「でさ、お姉さんはどこ？」

すずか「ここだよー」

屋敷の二階から聞こえてきました、見ると、すずかと同じ紫の髪を持った綺麗な女性がいた

忍「初めまして、私がすずかの姉、月村忍です、よろしくね、佐助君」

佐助「初めまして、猿飛佐助です」

なんでだろー？すずかが離れてる？

しかもイリヤが同情するような目で見てるし

忍「うん。良さそうね♪」

えーっ答えだけ言います遊べれました、女物の服を着せられました

今凄く泣きたいです

佐助「改めて聞くがどこに行く」

すずか「動物園かな」

佐助「では行くか」

動物園に決定しました

動物園には電車で行了きました

現在動物園内部

すずか「それじゃあ行こう佐助君」

佐助「了解、どこから回る？」

すずか「バスに乗って回ろう、佐助君」

佐助「了解、早速乗りますか」

そう言いバスに乗った

すずか「わーっ！ねえ劉臥君見て！ライオン可愛いね♪」

佐助「本当に猫が好きだなお前は」

すずかはライオンを見ながらはしゃいでいる
周りの殺気は痛いが我慢しよ

頑張りました殺気に何とか耐えて最後まで乗ってました

昼食をを食べ終えライオンの赤ちゃんの撮影会に来ています

すずか「見て佐助君！！すっごく可愛いよ♪」

佐助「確かに可愛いな」

俺とすずかはライオンの赤ちゃんと写真を撮った

まあデートはこんな感じで終わったのですが
すずかに今日家に泊まらない？って言われてさ拒否したよ
でもさ涙目＋上目使いで嫌なの？って言われたらさ断る自身は
俺にはない！

泊まりました

続きます

29話 すずかとデート（後書き）

佐助 「え？ 続くのか」

作者 「うん、次回はすずかの家にね」

佐助 「なぜ？」

作者 「ま、多分ほとんどの人は分かってるだろう」

佐助 「そうですか」

佐助・作者 「次回も読んでください」

30話 月村家にお泊まりそして災難

あはよう・こんにちは・こんばんは佐助です
現在進行形で忍さんに遊ばれてます

佐助「もうやめてください・・・」

忍「いやよ♪」

佐助「すずかも止めてくれ!」

すずか「ごめんね」

佐助「不幸だ・・・」

食事の時間まで続きましたよ・・・マジ泣きたい

現在すずかの部屋

猫1「にゃん♪」

猫2「にゃ?♪」

佐助「和むな」

俺の周りに凄い数の猫がいる

すずか「凄いね？うちの猫全部いるよ」

佐助「なぜか犬以外の動物には懐かれる」

すずか「なんで犬以外？」

佐助「知らん」

その後、俺とすずかは他愛のない話をしてすずかにまたもや
涙目＋上目遣いで

一緒に寝よって言われ一緒に寝る事になった

佐助「（寝れんな）」

寝れない俺は庭に出る

佐助「赤い月か・・・」

空を見ると月が真っ赤だった

屋敷の外から気配を感じる

佐助「（数は12か・・・）」

俺は神棒・麒麟をだす

最初に6つの影が俺を襲う

俺は軽く後ろに下がり襲撃者の攻撃をかわす

影が1つの影が俺に向かってくる

俺は麒麟を腹に一撃をいれ倒れる

影達は俺に警戒し俺を囲む、そして今度は4つの影が来る

俺は武器を双剣・界炎に変える

佐助「虎輪刃」

襲ってきた4つの影を倒す

その後残り1の影の間合いに入り倒していく

佐助「終了と♪」

ノエル「申し訳ありません、お客様である佐助様の手をわずらわしてしまいました」

後ろから声がしてそちらを向くとノエルさんが残り6つのうち5つを引きずり俺の隣に来る

佐助「気にするな、俺は厄介ごとにはなれているだが早く出てきな気配は消しても殺気がもれてるよ」

目の前の女は髪はロングヘアでチャイナ服を着ていてどこかノエルさんにといた気配を感じる

女「なかなかやるわね・・坊やのくせに」

女は俺を見下すように喋る

女「坊やは人間みたいだけど何故私の邪魔をするのかしら？」

はあゝとため息を出して答える

佐助「お前はバカ、俺はお前達が俺に剣を向けたから倒しただけそれと、この家にいる人達は俺の大事な奴らだからそれ以外の答えはないが」

俺の答えに女は少しぽかんとして、笑った

女「あはは！ 坊やもバカねえ、ここにいる奴らは皆・・・化け物なのよ！君の隣にいるメイドも私と同じ機械仕掛けの人形なのよ！」

本当に可笑しいと女はウザイくらい笑う・・・殺していいよね
俺の大事な人達を笑ったんだからそれに

ノエルさんは顔を伏せているから表情は見えないが泣いている
だろういや泣かした

女「周りは皆化け物、いつか君も食べられるわよ！」

月の光りが周りでのびている9つの影を照らす

男、ワールフと言われる奴らだ
男、ワールフと言われる奴らだ

女「分かったr・・・」

佐助「殺すぞ」

女が何か喋ろうとしたが俺は結構強い殺気を出し遮る

佐助「たとえ化け物だとしても俺には関係ねえ、すずかも忍さんもファリンさんもそして・・・ノエルさんも俺の大事な奴らだ、そしてお前は重罪を犯した俺の大事な奴を泣かした・・・だから教えてやるよ！死の恐怖をな！！」

俺は女にかなりキツイ殺気をぶつけた周りのワーウルフ達も動けなくなっていたり

気絶しているものもいた

俺の殺気に完全に怯えている

女「あんた一体、何者なのよ！？」

佐助「ただのお客様だが何か問題あるか？」

女は持っている青竜刀で俺に斬りかかる

上から振り下ろすが俺は持っていた双剣で受け流す距離をとる

佐助「ほお、俺が倒せないや死のイメージしか出ない中かかって来るか」

女は手のひらから銃口が現れ撃たれる

ババババ！！！！

佐助「甘いな」

全ての銃弾を双剣はじくその後すぐ間合いを詰め攻撃する

佐助「三爪炎痕」

女を三爪痕を刻み倒す

佐助「さすがに殺さねえよ」

現在テラス

その後ノエルさんがのびている狼達をそれ専門の人達に引き渡し
機能停止した女ロボを忍さんの研究室に運んで行き、

騒ぎと殺気に気付き起きた忍さんとすずかに話があるとテラスに連れて行かれた

佐助「（なんかすげー疲れるしかも・・・もう日付変わってるし）」
（涙）

すずか「私とお姉ちゃんは夜の一族と呼ばれる者で・・・吸血鬼なの」

すずかの表情は暗いそれでも続ける

忍「今回は私が作った最高傑作のノエルとファリンを狙った物・・・
ごめん」

忍さんは泣く

忍「私達のせいでひろ君を巻き込んだ・・・怖い思いさせちゃった」

その後忍さんは黙る

佐助「はぁ、別に俺は慣れてるからいいですけど

俺からしたらあなた方は人間ですちよっと身体能力が高いぐらいの」

月村家「？」

佐助「それに俺のダチには人間からしたら本当の化け物がいますから」

忍「え・・・だれ？」

話しました俺のダチをまずは全ての黄泉の神・北欧のロキの一家・ギリシャのハデスの一家
まで話しました

月村家の皆さんとなぜかいた恭也さんに確かに凄いて言われました

あと普通に真祖の吸血鬼の友達も天狗や鬼や精霊の友達もいますかね

30話 月村家にお泊まりそして災難（後書き）

佐助 「俺って人間のダチ少ないな」

作者 「その代わり人間以外とは多いがな」

佐助 「他のダチはほとんどチートだしな」

作者 「運命だ気にするな」

佐助 「まあな、精霊の友達ってことは精霊に力貸し手もらえるのか？」

作者 「できるよやんないけど」

佐助 「そうか」

佐助・作者 「次回も読んでください」

佐助 「次回でデートも最後だー」

31話 リインフォースとデート（前書き）

作者「リインフォースツヴァイが完成済みです」

佐助「時間的に当たり前だな」

作者「うん」

佐助「やっと最後だな」

作者「おう、長かったデート編がな」

佐助「もういいよ俺には平穩がないから」

作者「チートオリ主に平穩があるとでも？」

佐助「ないな」

31話 リンフォースとデート

今回で最後のデートです

佐助「最後にアインか」

カイト「佐助も大変だね」

佐助「カイト他人事だな」

カイト「ははは」

佐助は待ち合わせ場所に歩いてった

現在待ち合わせ場所に着きました

佐助「早いなアイン（俺は30分前に来たんだけど・・・）」

リンフォース「いや、私もさつき着いたばかりだ」

佐助「そうか、ショッピングモールでも行くか」

リンフォース「ああ」

ショッピングモールに移動中

佐助「リンは元気か？」

リインフォースツヴァイもうできてます、まあ当たり前ですが

リインフォース「おあ元気だ、『私もつれってってくださいよ』とせがまれて主に止められてたがな」

佐助「リインらしいな」

リインフォース「ああ」

着くまでこんな他愛のない話しをしました・・・周りの殺気は痛かったです

現在ショッピングモール

佐助「なんか欲しい服あったか？」

リインフォース「買ってもらうのは悪いような・・・」

ゴチン

リインフォース「痛！」

涙目でこちらを睨んでいます

佐助「遠慮するからだ、デートなんだろう？欲しい服とか買ってやるからさ好きな選べばいい」

リインフォース「あ、ああ」

佐助「おう！（ニコッ）」

リインフォース「／／／」

まあこのあと服を10着買い他にも見て回ることにした

現在アクセサリーショップ

佐助「アインここで欲しいものあるか？」

リインフォース「この腕輪が欲しいんだが買ってもらっていいか？」

色はやっぱり黒ですか

佐助「おう、いいぜ」

買いました、あと俺がアインに似合いそうなペンダントもプレゼントしましたそしてすぐ着けてもらいましたよ

リインフォース「ど、どうだ」

佐助「うん、とっても似合ってるぞ」

リインフォース「そ、そうか／／／」

最後はこんな感じで家まで送って終了です

31話 リインフォースとデート（後書き）

佐助「終わったーーーーー!!」

作者「うるさい」

佐助「ごめん」

作者「分かればよろしい」

佐助「テスト勉強はいいのか？」

作者「・・・あ、忘れてた」

佐助「駄目人間、今日で最後なんだから今からでもやれ」

作者「眠い寝る！」

佐助「本当に駄目人間だな」

作者「言い返せない」

佐助「まあ、ガンバ」

作者「うん」

佐助・作者「「次回も読んでください」」

32話 ティーダ・ランスターの葬儀そしてそれから・・・（前書き）

作者「この頃俺の趣味で他のアニメやマンガ・ゲームの技が増えてます」

佐助「このバカが！」

作者「気にするな俺は気にしないZE☆」

佐助「☆じゃねえよこのバカ作者」

スパーン！

作者「・・・痛い・・・佐助に特攻具・霸離仙^{ハリセン}で殴られました（涙）」

佐助「当たり前だ」

32話 ティーダ・ランスターの葬儀そしてそれから・・・

「現在俺は三等空佐になってしまいました何ででしょう？普通にSランク＋Sランク以上の任務を合わせて150を個超えて

違法施設の破壊が800を超えたぐらいなのに、で、今は書類整理をやってます

今の時期は九月下旬です

佐助「あと少しで終了だな」

カイト「頑張れ佐助」

佐助「あああと20枚だしな」

カイト「でもさ佐助最近の任務魔法ほとんど使っていないよね」

佐助「ああ、修行のおかげで雷鳳と大雷鳳とかの技が完璧にできるようになったしな」

カイト「神雷はかなりてこずってたけどね」

佐助「まじタイムを使って結界内の時間を一日を一時間にしたしな」

タイムっていうのは小説版のデイスガイアに出てくる管理人に頼んで使えるようにしてもらった魔法だラハールの5倍の魔力あげたら無期限にしてくれた

カイト「武器の扱いはその武器の熟練者を軽く超えたしね」

佐助「ははは（苦笑）」

今の俺は陰陽術にアニメ・ゲームの武器の技や素手の技はほとんど使えるようになった

・・・けどかなり努力しましたがけど本当に無理だろ！って技は使えません

俺は残りの書類を終わらせる

ヴヴヴ、ヴヴヴ

通信が来ますた任務かな？

佐助「誰だ？」

クロノ「猿飛」

佐助「手短に頼む」

クロノ「ティーダが、死んだ」

佐助「・・・おい、聞き間違いかもしれないからもう一度頼む」

クロノ「いや聞き間違いじゃない」

死んだ・・・だと・・・

佐助「葬儀は？」

クロノ「今日だ」

俺はすぐに正装に身を包んだ

すまねえティーダさん・・・俺が思い出していれば・・・
原作知識も思い出さなきゃ意味ねえじゃねーか！

俺は急いで葬儀のばへ行った

ティアナSide

お兄ちゃんが、死んだ

最初、ソレを聞いたときは意味が分からなかった
だって、お兄ちゃんは強くて・・・カッコよくて・・・

けど、お兄ちゃんの冷たくなった体を見たとき、その死を再確
認させられた

今は、お墓に棺を納めた

周りには知り合いの人はいない。みんな、お兄ちゃんの仕事の
上司の人たちだった
その中には

上司A「無能だな」

上司B「まったく、死んでも犯人は確保すべきだった」

上司C「局の汚点だな」

といってる人たちもいた

違うお兄ちゃんは、そんな人じゃない、けど言い返せなかった

なぜなら知らない男の人が

男「おい、ティーダさんの陰口叩いた奴前へ出ろ今なら苦しまないように殺してやる」

静かだが重い声が聞こえたからだ

はい現在俺は葬儀中に陰口を叩いた奴らに言っしまいました

佐助「おい、ティーダさんの陰口叩いた奴前へ出ろ今なら苦しまないように殺してやる」

上司A「な、なんだ貴様は」

上司Aが叫んだ

やばいマジでキレそう、だから弱めの殺気を飛ばした

上司A「がっ・・・!」

佐助「俺？死の恐怖ですが何か？」

上司B「なっ!？」

あれ？その場の空気が一変しちゃった

あちこちで「なんで死の恐怖が!」とか聞こえるんだけど

佐助「てめえらカスの相手よりこっちの方が大事だな」

俺は墓の前まで行くと、花を添えた

佐助「ティーダさんあんたにはかなり感謝してる、俺の数少ないダチにでもあるんだからな」

俺はカイトをセットアップし蒼炎データを起動する

佐助「ティーダさんを無能と呼んだ人にもっとも残酷な死の恐怖与えましょう」

蒼炎の波紋疾走をちよつと改良して斬撃を与えずに敵の体内に蒼炎を送り込み内部から燃やし最終的に爆発させるチート技ww
をやるだけだよ殺さないけど

あれ？全員黙っちゃった

佐助「今度ティーダさんを無能呼ばわりしてみろ死の恐怖ではなく死を与えてやるから」

まあ、これでティーダさんは無能と言われないな

俺はオレンジ髪の少女を見た、

え？もしかして幼い頃のティアナ？

佐助「君は、ティーダさんの妹か？」

ティアナ「・・・はい」

やっぱりそうでした

しかも泣いてるのか？いや泣いてますね

この雨の中ただ一人、傘を差さないでたたずんでいたのだから

ティアナ「あなたは？」

佐助「俺は死の恐怖って呼ばれてる猿飛佐助だ、君の名は」

ティアナ「・・・ティアナ、ティアナ・ランスターよ」

佐助「そうか、俺はティーダさんの知り合いだ君がこれからどうするのかが聞きたい」

ティアナ「・・・私は、兄さんの夢を引き継ぐ、絶対に執務官になって、証明する！兄さんの魔法は、ランスターの弾丸は全てを撃ち抜くって！！」

その目には、幼いながらも強い意志が宿っていた、が、それだけじゃ駄目だ戦場じゃ死ぬかもしれないから

佐助「もし管理局に入ったら任務で死ぬかも知れないそれでもか？」

ティアナ「それでも・・・それでも私は証明したい！！」

佐助「覚悟はあるか・・・なら俺が鍛えてやるティーダさんには色々世話になったしな

その代わり俺の修行は厳しいがな」

ティアナ「は、はい！」

佐助「それと、ティアナお前に母親兼魔法の先生をな」

俺はニヤリと笑いながら言った

現在移動中

はい場所は地球です当たり前ですが海鳴です、で現在目的地の前にあります

ティアナ「ここにいるんですか？」

佐助「ああ間違いないから安心しろ」

ピンポーン

????「あら珍しい客人ね」

佐助「おひさしぶりですプレシアさん」

プレシア「本当にさしぶりね」

アリシア「あ！佐助おにいちゃんだ！」

アリシアが走りながら抱きついてくる（鳩尾に入ってます）

佐助「アリシアもさしぶり」

え？痛くないのか？ぜんぜんフェンリルの人間形体の魔法なしでの模擬戦（喧嘩）に比べれば痛くない、結果は最終的に引き分けた

プレシア「あらその子は？」

佐助「はい、そのことで今から説明します」

～説明中～

プレシア「分かったは」

アリシア「私もいいよ！」

佐助「よろしく願いしますねプレシアさん」

ティアナ「えっと、お願いします」

これでティアナが寂しい思いはしないだろ

終わったあとはプレシアさんの家でのんびりお茶会をしてました

32話 ティーダ・ランスターの葬儀そしてそれから・・・（後書き）

作者「まだ痛いのだが・・・なぜ？」

佐助「知らん、それより預けたんだなプレシアさんに」

作者「なんとなくこのパターンにしてみた」

佐助「訓練はやっぱり銃剣と双銃のスキルを覚えさせるんだろ」

作者「当たり前ディスガイアでも良いのがあれば使うがな」

佐助「そうか俺が任務の時はどうするんだ？」

作者「その時はコルベにクまひんの擬人化雅仁に頼むから大丈夫だ」

佐助「よかった」

作者「次回も読んでください」

佐助「次回は俺はどうなるんだろ？」

33話 新たな戦い（前書き）

作者「新章突入！」

佐助「はいはい良かったな」

作者「頑張れよ佐助今回の敵はかなり強いから」

佐助「・・・え？」

33話 新たな戦い

今日はなんとか本当になんとか進級できました
先生曰くあと一日出席日数足りなかったら進級できなかったらしいです

で現在プレシアさんの家にいます

佐助「すげー上達速度だなティアナ」

ティアナはコルベニクの擬人化の雅仁が教えてる

プレシア「そうね」

やっぱり元がオーヴァンだ教え方がなかなかうまい

佐助「でもさ雷光閃弾を使えるって凄くね」

プレシア「当たり前ね、基本は私が教えたのだから」

佐助「さすが大導師だな」

しかもさ俺も教えてから2週間？ぐらいで魔力量は最初は少なかったのに今じゃA＋ぐらいあるしもう撥球弾使えるんじゃないかね

佐助「・・・5、6年後にはインフェルノとコキュートス教えてみよう」

雅仁「今日はここまでだな」

ティアナ「ありがとうございます」

ティアナと雅仁は結界から出た

佐助「お、出た出た、さて俺も修行しまさ……」

ヴヴヴ、ヴヴヴ

また通信ですか

佐助「またかよ、で何」

クロノ「ああ、実は新たなアンノウンが出てきた」

佐助「ふーん、で何」

クロノ「ああ、そのアンノウンにかなりの局員が襲われた、それで明日アンノウンの対策の会議がおこなわれる猿飛も来てくれ」

佐助「了解、明日だな分かった行ってる」

次の日

俺は管理局の会議室にいる

佐助「なぜなのは達までいる」

なのは「私達も任務中に襲われたからだよ」

フェイト「あんまり強くなかったけど数は多かったよ」

ヴィータ「あんなの数が出たって意味ねーよ」

佐助「そうか、クロノそのアンノウンを見せてくれねーか」

クロノ「分かった」

佐助「!？」

モニターから映し出されたアンノウンを見た瞬間俺は驚いてしまった

モニターの画面に映し出されたのがクビアゴモラだったのだから

クロノ「猿飛こいつを知ってるのか!？」

皆さんが俺に注目します

佐助「ああ知ってる今映し出されているアンノウンはクビアゴモラこいつはクビアによって生み出された存在だ、そしてクビアはある力の反存在だ」

はやて「その力ってなんや？」

佐助「そこまでは俺も知らない（俺の碑文と腕輪だがな）」

クロノ「猿飛こいつを倒す方法を知っているか？」

佐助「いや知らない、だが分かるのはこいつが次元世界全体を滅ぼせるだけの力があるってことだけだ、すぐ三提督あたりに連絡しとくのをオススメする」

俺はみんなに隠しておく事にした

クロノ「！分かった」

佐助「（これが吉と出るか凶と出るかだな）」

会議は一応終了して俺はいったん家に戻る事にした

俺の家

佐助「来いフィドヘル・タルヴォス」

俺はフィドヘルとタルヴォスを擬人化状態で呼んだ

あとフィドヘルの擬人化状態はワイズでタルヴォスの擬人化状態は鈴子^{れいこ}だ

佐助「ワイズ知識の蛇の使用を許可するクビアの居場所とクビアゴモラの一番多く出現する場所を調べてくれ、で鈴子さんはその資料をまとめてくれ」

ワイズ・鈴子「了解した」（分かったわ）」

佐助「さて、あとは最後の調整に入るか・・・」

???「やっぱり隠し事してたんだね」

佐助「きずいてたんだなお前達は」

はやて「あたりまえや、あんな顔してたらほとんどの人は分かるで」

佐助「どんな顔だよ・・・」

フェイト「ねえ佐助が隠してることを教えて」

佐助「いや駄目だ」

シグナム「なぜだ！猿飛！」

佐助「今回は危険すぎるからだ」

ヴィータ「危険は承知済みだ！」

???「佐助あきらめろ、こうゆう奴らほど決意が固いとテコでも動かねえからよ」

一人の赤髪の少年？が話に割り込んできた

佐助「曾良^{そら}か、はあ、やっぱりか」

曾良「ああ、千沙^{ちさ}もそうだったからな」

曾良はスキースの擬人化です、で、名前だけですが千沙はスキースの擬人化です、まあ二人は擬人化状態の時は付き合っていることにします

佐助「分かった、お前らに俺の隠している事を教えてやるから上がれ」

なのは達を家に上げる

佐助「さて俺の隠していることを今から話す」

俺は話始めたクビアが俺の碑文と腕輪の反存在である事をそしてなのは達を連れてって危険なめにあわせたくないことを

リインフォース「そんなに強いのですか？」

佐助「ああ八相の力を総合したレベルだ、俺のスキース3rdフォームで倒せるかか俺が倒されるか相打ちだのどれかだ、しかも倒せたとしても俺がただじゃすまないがな」

なのは「そんな・・・」

フェイト達もなのはと同じみたいだな

佐助「最後の賭けだがスキースゼロの本当の最後の力さえ目覚めれば勝算は有るがな」

その場の全員「本当！！（か）（なんか）」

佐助「まあな、だがスケイスゼロはまだ2ndフォームまでは開眼しているからな」

シグナム「だが猿飛今回の事もだが一人で背負おうとするな私や主はやて高町達も猿飛の仲間だ少しは頼っても良いんじゃないか？」

佐助「そうだな、ならよろしく頼むなみんな」

みんな「うん（おう）」

33話 新たな戦い（後書き）

佐助「クビア編？」

作者「うん。hack好きの俺がやらないとでも思ったか？」

佐助「いや思ってたねーよただ。hack／／ZEROまでか」

作者「スケイスゼロは出るけどスケイスゼロ2ndフォームとかは俺のオリジナルだよ」

佐助「だろうな」

作者「クビア編に入るにいたってアンケートをとりたいと思います」

？最終的に。hack／／XXXXのようにクビアを友と認め仲間にする

？クビアを倒すにしたがって8つのセグメントで原作キャラに碑文の力を与える

？何も起こさずクビアを倒して終了

作者「以上の3つの中からアンケートをとりたいと思います」

擬人化碑文キャラ紹介（前書き）

クビア編アンケート

？最終的に、hack／／XXXXXのようにクビアを友と認め仲間にする

？クビアを倒すにしたがって8つのセグメントで原作キャラに碑文の力を与える

？何も起こさずクビアを倒して終了

擬人化碑文キャラ紹介

佐助「今回は八相の碑文の擬人化状態のキャラクター紹介をします」

作者「しまゝす」

佐助・作者「スタート！」

第一相 死の恐怖スキースの擬人化…曾良

性別…男

容姿…髪は赤それ以外は・hack／／G・Uのハセヲと同じ

性格…ハセヲと同じだがハセヲより人付き合いがうまくバトルジャンキー

で現在千沙が一番大事

魔力…EX

戦術…ハセヲと同じ4つの武器による近中距離戦

好きな物・人…千沙・佐助との模擬戦その他はハセヲと同じ

嫌いな物・人…千沙を泣かせたり悲しませた奴（体の3分の2、7は殺す）

あとはハセヲと同じ

佐助「すごい強いな」

作者「まあスケイスだしな」

曾良「おい佐助！確かに千沙は大事だがそこまでいってねえぞ！」

佐助「俺が知らないと思ってんのか？千沙にナンパした奴ら半殺し以上で病院送りにしてたの知ってるぞ」

曾良「どこで見てたんだよ」

佐助「ひ☆み☆つだぜ！」

曾良「はあゝ」

佐助「曾良に溜め息を疲れた（泣き）」

作者「佐助はほうっておいて次！」

第二相 惑乱の蜃気楼イニスの擬人化…千沙

性別…女

容姿…hack／G・Uのアトリと同じ

性格…アトリとほぼ同じだがアトリより腹黒人

魔力…SS

戦術…おもに補助魔法と幻術魔法

好きな物・人…曾良さんその他はアトリと同じ

嫌いな物・人…曾良さんに好意をもって近づく女性（弱めの幻術で心に傷を与える）その他はアトリと
く）
同じ（野菜は除

佐助・作者「「すげーこえー（ブルブル）」」

千沙「誰がですか？」

曾良「ほんと誰が怖いんだ？」

作者「もう無視して次！」

第三相 増殖メイガスの擬人化…ジーク

性別…男

容姿…hack／G・Uのクーンと同じ

性格…クーンとほぼ同じだがクーンの女性にすぐ声をかけるクセを半分にした感じ

地味にバトルマニア

魔力…SSS

戦術…接近戦

好きな物・人…クーンと同じ

嫌いな物・人…クーンと同じ

佐助「クーンの半分か」

作者「でもやっぱり治ってないんだ」

佐助「それよりジーク女性のメアド何件入ってる？」

ジーク「250件ぐらいだな」

佐助「十分多いな」

ジーク「でもみんな大切なダチだな」

作者「え？」

ジーク「俺が本当にほれて好きになったやつだけが彼女だ
佐助も同じだろ」

佐助「はい、確かにそうです」

作者「次！」

第四相 運命の預言者フィドヘルの擬人化…ワイズ

性別…男

容姿…hack／G・uの八咫と同じ

性格…八咫と同じだがこの全次元世界1の情報屋でもあり情報を聞くには対価を払わなければ教え
てくれないしかなり
高い（佐助は払ったことが無い）あと鈴子とは恋仲こと

魔力…SS

戦術…補助魔法＋攻撃魔法

好きな物・人…鈴子その他は八咫と同じ

嫌いな物・人…特に無し

佐助「そういえばワイズなんで俺には情報に対価を渡さずに教えてくれるんだ？」

ワイズ「私達を呼びたしてくれるだけで十分な対価だからな」

佐助「そうなんだ」

作者「次」

第五相 策謀家ゴレの擬人化…太陽

性別…女

容姿…hack／G・Uの朔望の朔

性格…朔と同じ

魔力…SS

戦術…攻撃魔法

好きな物・人…朔と同じ

嫌いな物・人…朔と同じだが曾良はそこまで嫌いじゃない

佐助「なあ太陽なんで曾良が嫌いじゃないんだ？」

太陽「まあ曾良に何度か助けられたからなあ」

佐助「そうか」

作者「次！」

第五相 策謀家ゴレの擬人化…月

性別…男

容姿…hack／G・Uの朔望の望

性格…望と同じだが千沙と同じ位の腹黒仁

魔力…SS

戦術…攻撃魔法

好きな物・人…佐助お兄ちゃん・優しくしてくれる近所の人達その
他は望と同じ

嫌いな物・人…望と同じ

佐助「普通だな」

作者「そうだな」

月「普通じゃ駄目なの？」

望地味に涙目

佐助「いやいや！別に駄目じゃないから安心しろ！」

作者「そうそう！大丈夫だから！」

月「うん！」

作者「次！」

第六相 誘惑の恋人マハの擬人化…エル

性別…男

容姿…hack／G・Uのエンデュランスと同じ

性格…エンデュランスと同じだがハセヲLOVEを半分くらいにした感じ

魔力…SSS

戦術…接近戦

好きな物・人…佐助・猫・猫と話す事・猫に餌をやることそれ以外はエンデュランスと同じ

嫌いな物・人…猫をいじめる奴（全員半殺しにされている）それ以外はエンデュランスと同じ

佐助「エル俺に猫語教えてくれ」

エル「いいよ、佐助ならすぐ覚えられると思うよ」

佐助「エル、サンキュー！」

作者「猫なら情報も結構知ってるだろうしな」

佐助「猫をそんなことに使うなー！！」

作者「・・・っ・・・ぎ・・・」

第七相 復讐する者タルヴォスの擬人化…鈴子

性別…女

容姿…hack／／G・Uのパイと同じ

性格…パイのキツイ性格をかなり和らげたかんじ

魔力…SSS

戦術…接近戦

好きな物・人…ワイズ様その他はパイと同じ

嫌いな物・人…パイと同じ

作者「ワイズとはどこまで進んだの？」

鈴子「キスぐらいかしら」

佐助「よくまあそこまでワイズと進んだものだ」

鈴子「ワイズ様と色々な次元世界に情報収集とデートしてるわね」

佐助・作者「「・・・（哑然）」」

作者「・・・次！」

第八相 再誕コルベニクの擬人化…雅仁

性別…男

容姿…hack／G・Uのオーヴァンと同じでAIDAを隠す
ギプスを無くした感じ

性格…オーヴァンと同じで、アイナがいないので今は弟子のティア
ナがなにより大事

魔力…EX

戦術…遠距離戦

好きな物・人…ティアナあとStrikersに行けばスバル・エ
リオ・キャロも追加でその他はオーヴァン
と同じ

嫌いな物・人…オーヴァンと同じ

佐助「ロリコン？」

雅仁「違う」

佐助「まあいいか、ティアナが大事なら絶対守れよそして強くして
やれ、俺もできる限り強くするつもりだ」

雅仁「わかってるさ」

作者「俺、空気なんですけど」

擬人化碑文キャラ紹介（後書き）

佐助 「つーかみんな強すぎね」

作者 「いや擬人化状態だからだいぶ力がおちてるぞ」

佐助 「でも曾良と雅仁は強いな」

作者 「碑文全員が100分の5の力だぞ」

佐助 「碑文かなりチートだな」

作者 「それを倒せるお前の方がチートだ」

外伝 死の恐怖の力を使いし少年と最強チートの痛みの森攻略（前書き）

今回は魔法少女リリカルなのは　　異邦神と反存在と死の恐怖　と
クロスですこーいうのは初めてなので温かい目で見守ってください

外伝 死の恐怖の力を使いし少年と最強チートの痛みの森攻略

俺は現在亮のいるなのはの世界にいます

佐助「さて亮は・・・発見！」

亮は俺から500メートル先にいました

く移動中く

佐助「よっ亮、迎えに来たぞ」

当たり前ですが挨拶します

亮「げ！」

俺を見た瞬間亮が全力で走り去っていった・・・なんでさ

↓追いかける

追いかけない

当たり前の選択だな

く追いかけてく

佐助「痛みの森にlets go♪」

亮「嫌だゝゝゝ！！」

佐助は転送魔法を使い無理やり亮を痛みの森に連れて行った、そして亮の叫びは虚空へと消えた

ゝ転送中転送中ゝ

佐助「痛みの森にー到着ゝ♪（ツバサ・クロニクルのモコナ風）」

痛みの森…全100区画で構成されたダンジョン、ダンジョンは4区画＋1区画に分かれており、4区画では通常の敵が出現5区画目にはその区画のボスがいます、しかも出現する敵も5区画ごとに変わり上に行く事に強くなります

亮「何が到着ゝ♪だ！」

亮が結構切れてるなまあ気にしないが

佐助「気にするなって、さて亮行くぞ」

亮「分かったよ」

なんでだろう亮がちよっと涙目になってる？

現在痛みの森2区画目でゴブリンメイジ（火）2対オニオンマッシュ1対と戦闘中

佐助「亮頑張れ」

佐助は戦闘中にもかかわらずお茶を飲んでいる

亮「佐助も手伝えよ!!」

亮は魔法使いが着そうな服装のゴブリンときのこを生やしたような敵の攻撃をかわし佐助に言う

佐助「それぐらい一人で倒せるだろ」

そういった瞬間ゴブリンメイジが佐助に火のスキルで攻撃してきた

佐助「ふふふ・・・殺す・・・亮離れてろ」

ドスのきいた声で亮に言う

亮「あ、ああ」

亮は少し怯みながら離れた

佐助は王の財宝から大鎌・黄昏ト万死ヲ刻ム影を出す

その黄昏ト万死ヲ刻ム影にギガファイアを放ち黄昏ト万死ヲ刻ム影は炎をまとう

佐助「火炎環伐乱絶閃!!」
かえんわぎらんぜっせん

炎を纏った環伐乱絶閃を繰り出す

佐助「ふん雑魚が」

亮「（ガクガクブルブル）」

2区画目で佐助が攻撃を受け敵を蹴散らした3区画目4区画目は亮が一人で何とか切り抜けた

現在5区画目

奥に進みガンジャイアントと戦闘！

佐助「少しは手伝いますか」

佐助は静カナル翠ノ楽園出した

亮「さっさと手伝えよ！」

佐助「はいはい、雷光閃弾」

ガンジャイアントの守りの甘い部分に2発銃も発射した

佐助「亮いいぞ」

亮「旋風滅双刃！」

双剣にカマイタチを纏わせて計六回の連撃を加える

佐助「よし次の区画に行くぞ」

亮と二人で次々と区画を攻略していく通常戦闘では佐助が補助

役でボス戦では少し手伝う程度だ

現在30区画目

佐助「30区画目に何が出てくるか覚えてる？」

亮「確か・・・冥王の影」

佐助「正解！さあlet's go」

（現在戦闘中）

佐助「オルバクドーン」

バクドーンの内容に加えて最後に巨大な燃え盛る岩石塊をぶつける

亮「蒼天大車輪！」

佐助「おかしくね、冥王の影ってこんなに強くないはずなんだが」

亮「別に倒せたからいいじゃね」

佐助「だな」

この戦いで佐助はオルバクドーン5回・オルレイザス7回・フアリプス8回使用

そして亮も奥義・甲冑割6回・蒼天大車輪4回使用これで勝利
そしていくら佐助がhack内の最高150レベルの力しか出

していないとはいえ倒すのに時間がかかり過ぎだ

現在50区画目

亮「なあ佐助なんで此処にザワンシンがいるんだ？」

佐助「俺が聞きてえよ確かザワンは70区画目のボスのはずなんだが・・・」

現在死せるザワンと戦闘中

佐助「發球弾」

上方へ銃を發射して目標地点に銃弾をばら撒く

亮「削三連！」

強力な三連攻撃を亮がおこないその隙にカイトの蒼炎データを機動する

佐助「カイト！蒼炎データ起動」

佐助「蒼炎轟雷爆閃弾！」

貫通性を持った銃弾に蒼炎の炎を纏わせて全方位から狙いを定めた辺りを打ち抜く

ザワン「グオオオオオオ！」

ザワンが叫びながら倒れていく

佐助「亮お前は結構魔力を消費したからこれを飲め」

王の財宝から帝の気魂を出し亮に渡す

亮「サンキュ」

亮の魔力が完全回復する

55・60・65区画目のボスを倒し現在70区画目

佐助「真ザワンシンって・・・何それおかしいだろ!!」

亮「佐助レベルの方はもっとおかしいぞ」

真ザワンシン・・・レベル180

佐助「上限越えてね」

亮「ああ、余裕で超えてる」

そんな話を話しているうちに真ザワンはコアから巨大なレーザーを放ってきた

佐助・亮「うお!!」

佐助と亮は危なげにかわす

佐助「チツなら亮!武獣覚醒使うぞ!」

亮「分かった！」

佐助・亮「武獣覚醒！」

佐助と亮はオレンジのオーラに包まれた

佐助「亮さっさと決めるぞ！」

亮「おう！」

真ザワン「グオオオオ！」

真ザワンはコアから4本のレーザーを出し攻撃する

佐助と亮は難無くかわす

佐助「獄炎ナツクル！」

獄炎を拳に宿しおもいつきり真ザワンを殴る

亮「奥義・甲冑割」

大剣で敵を突いた後敵に背を向けて大剣を振り下ろし
振り返って武器を振り上げる

佐助「獄炎双竜刃！」

無印のhackのLv3の双剣の技で、夢幻操武の炎版

亮「無双隼落とし！」

佐助「これで最後だ三爪炎痕！」

蒼炎を纏った双剣で真ザワンに三爪痕のサインを描く

真ザワンを倒す事に成功した

佐助「なんかだんだん痛みの森が危なくなってるねえ」

亮「確かにな」

まあなんだかんだ言って100区画目に到着

佐助「なにあれ・・・」

100区画目ボス…真ケルヌノスEX
レベル…300

亮「上限をはるかに超えてるな」

佐助「本当に痛みの森？」

亮「佐助最初から飛ばすぞ」

佐助「OK」

佐助・亮「神威覚醒！」

佐助はDG-Zを出す

佐助「フリーズショット！」

D G—Zで真ケルヌンノスEX打ち抜きフリーズさせて身動き取れなくする

亮「光刃鎌魔！」

味方の力を集めて光の鎌を創り出し、月をバックに鎌から光の刃を振り下して身動きの取れない真ケルヌンノスEXを撃ち砕くが・

真ケルヌンノスEX「ガアアアアア！」

佐助「全然効いてねえ！」

亮「マジかよ」

真ケルヌンノスEX「ガアアア！」

真ケルヌンノスEXが攻撃を仕掛けてくるのを何とかかわす

佐助「ならこれを使うか、カイト白炎データ機動」

カイト「了解、白炎データ機動」

佐助は全身を白い炎に包まれた

佐助「亮もう一度光刃鎌魔を使え！」

亮「あれは全然効かなかったぞ」

佐助「いい手がある」

佐助はニヤリと笑った

亮「分かった、行くぜ」

佐助「白炎の炎よ光刃鎌魔を包み込め。亮ぶち込め！」

亮「白炎光刃鎌魔!!」

月をバックに鎌から白炎に包まれた光の刃を振り下して真ケル
ヌンノスEXを今度こそ撃ち砕く

佐助「ついでに貰っていけ白炎三爪炎痕！」

真ケルヌンノスEXを何とか倒す事に成功した

亮「はあはあ・・・とんでもない痛みの森だな」

佐助「こっちも予想外だったよ」

佐助と亮はその場に座り込んだ

く休憩中く

佐助「さてと休憩もすんだことだし亮お前に渡すものがある」

亮「なんだよ」

佐助は三つの武器を出す

佐助「まずは双剣・白虎演武これは白虎の爪と血で鍛えた双剣で白虎と同じく白い双剣だ

能力は疾風迅雷で雷属性と風属性を30上げるのと通常攻撃に風雷の追加ダメージと麻痺させる事がある

次に大剣・朱雀炎武これは朱雀の羽を加工して作った大剣で綺麗な赤い大剣だ

能力は朱雀の加護で炎属性を30上げるのと通常攻撃に炎の追加ダメージと魔法攻撃のダメージ70%軽減させる

最後に大鎌・青龍水武これは青龍の鱗を加工して作った大鎌で綺麗な蒼い大鎌だ

能力は水流で水属性を30上げるのと通常攻撃に水の追加ダメージと体力と魔力を25%吸収させる

この三つを渡す今のお前なら扱えるはずだ」

亮「ありがとな佐助」

佐助「じゃ帰るか」

痛みの森攻略に3日かかったようだがその後帰って亮がどうなったかは佐助は知らない

外伝 死の恐怖の力を使いし少年と最強チートの痛みの森攻略（後書き）

佐助 「まず今回俺が使った黄昏ト万死ヲ刻ム影の能力と白炎の紹介」

黄昏ト万死ヲ刻ム影…与えたダメージの体力・魔力を75%吸収し武器の使い手の体力・魔力の回復と武器を強化できる戦闘終了後元に戻る

作者 「チート武器だな」

佐助 「気にするな次白炎」

白炎…蒼炎を強化版一般的に白い炎のほうが蒼い炎のほうが熱いから強化して白炎データにした白炎での技は蒼炎で使った技は一通り使える

佐助 「本当に俺のチートかが進んでるな」

作者 「チートは修行したらもっとチートかするしな」

亮 「でも真ザワンシンや真ケルヌンノスEXてなんだったんだ？」

作者 「普通じゃつままないから俺が強くしておいた」

佐助・亮 「……」

作者 「どうした？」

佐助 「亮、作者に白炎光刃鎌魔やるぞ」

亮「準備はできてる」

作者「え？」

佐助・亮「消え去れー！ー！！」

作者「ギャアアアアア！！」

佐助「今回は亮も頼む」

亮「OK」

佐助・亮「次回も読んでください」

真祖様でしょうか？亮の性格などに間違えはありませんでしたか？これからも亮を使うかもしれませんがまたよろしくお願いします

34話 最初の戦場アルケ・ケルン大瀑布（前書き）

作者「更新が遅れてすみません！（全力で土下座）」

佐助「遅すぎるわ!!」

作者「しょうがないじゃんテスト勉強とかテスト勉強とかテスト勉強してたんだから（涙）」

佐助「全部テスト勉強・・・まあ頑張れ」

作者「うう・・・（涙）」

34話 最初の戦場アルケ・ケルン大瀑布

佐助がみんなを頼ると決め手から約十分後

鈴子「佐助、資料ができたわよ」

鈴子からクビアの居場所とクビアゴモラの多く出現する場所の資料を受け取った

数分後

佐助「俺はすぐに三提督の所に行ってこの資料を渡してくる
その後数分したら連絡が来るはずだそんな時は頼む」

全員「うん（おう）」

現在時空管理局本部で佐助は資料を三提督に渡した

ミゼット「大体分かったわ、此处に載っている場所に局員を送るわ」

佐助「助かる」

ラルゴ「これわ管理局始まって以来の大事件だのう」

レオーネ「本当だな」

佐助「では、そろそろ俺は行かせてもらおう」

佐助は外に出た

三提督が局員を送ってくれと言った場所は俺もなぜ有るのか
は分からないが

一つ目は隠されし 禁断の 飛瀑ことアルケ・ケルン大瀑布
二つ目は隠されし 禁断の 絶対城壁ことモーリー・バロウ城砦
三つ目は隠されし 禁断の 竜骨山脈ことブリューナ・ギデオ
四つ目は隠されし 禁断の 古戦場ことコシュタ・バウア戦場
跡の四つだ

カイト「佐助、多分だけどこの世界にクビアが来たのは佐助だけの
せいじゃないと思うよ」

佐助「どうゆうことだ？」

カイト「僕にも分からないけどそんな予感がするんだ」

佐助は少し考えたすえ答えを出した

佐助「・・・調べてみる価値はありそうだな」

カイト「うん」

??? Side

????「さあ戦いなさい碑文と腕輪の所有者よあなた自身の反存在
と」

佐助「さて俺もそろそろ行くか、ワード隠されし 禁断の 飛瀑に
転送」

現在アルケ・ケルン大瀑布

佐助「本当に多いな」

グビアゴモラ達「グオオオオオオ」

佐助「この場はエル・太陽、局員と一緒にこの場を頼む」

エル「分かったよ佐助」

太陽「エル様が一緒なんや余裕に決まってるやろ」

佐助「そうだな、他のみんなも俺が指定した場所に行ってくれ」

エル・太陽・ワイズ・鈴子以外「分かった（了解）」

曾良達は自分の指定された場所へ向かった、そのあとちょうど
シグナム達管理局も来た

佐助「シグナムとザフィーラお前らにこれを渡す」

王の財宝から快癒の雨と帝の気魂香を50個出し渡す
ゲートオブバビロン

シグナム「たすかる」

ザフィーラ「すまない」

佐助「それじゃ行かせてもらう」

佐助は奥の歪みの中に入ってた

アルケ・ケルン大瀑布メンバーSide

シグナム「行ったようだな」

エル「君達が管理局の人だよね」

シグナム「ああ」

エル「そう、佐助の頼みだから協力するよ」

話を終えようとしたときクビアゴモラが攻撃を仕掛けてきた

エル「邪魔だよ」

振り向いたエルによる居合いの一撃でクビアゴモラは消滅する

シグナムはエルの居合一撃を見て思った戦いたいと
そう思っている間に他の場所では太陽が攻撃していた

太陽「いてもうたるで！」

太陽の頭上にクビアゴモラ二体分のエビフライ？がでてそのエビフライ？がグビアゴモラに直撃するその最後に超巨大なエビフライ？がでこれまた直撃かなりの数のクビアゴモラが消滅する

太陽「どんなもんや！」

局員「おおおお！」

局員の大半が歓声をあげたなんでやろ？

それと局員の士気が上がり次々とクビアゴモラを倒していく

その頃シグナム達は

シグナム「はあああ！」

ザファイラ「獅子連撃！」

エル「ふっ！」

シグナムが一閃で倒したりザファイラが獅子連撃で倒したりエルが居合いで倒したりで無双状態

あとザファイラだが佐助に教えてもらってデイスガイアの拳の武器習得技と拳当スキルは魔拳ビッグバン以外何とかできるようになったらしい

シグナム「レヴァンティン、カートリッジロード」

レヴァンティン「エクスプロージョン」

ガシャン！

シグナム「紫電一閃！」

この一撃で大分クビアゴモラが減る

エル「僕も行かせてもらおうよ」

エルクビアゴモラはかなり集まっている場所に一気に近づき技を放つ

エル「閻魔大車輪！！」

るる剣の技の龍巢閃のように無数の円陣を組むようにして敵を斬り刻んだあとにバラの花びらが舞った

ザファイラ「狼爆」
バーニングファンク

ザファイラから巨大な炎の狼が放たれクビアゴモラどもを喰らう

シグナム「ザファイラいつそんな技を覚えた？」

シグナムは疑問に思ったことを聞いた、まあ原作でも体術ので攻撃技無かったからね

ザファイラ「佐助とフェンリルに息吹ブレスの使い方とフェンリルが技を徹底的に教え込まれた」

ザファイラが少し震えたように言う

シグナム「そうか・・・」

少し哀れむような目でザフィーラを見ていた

その頃佐助は認知外迷宮アウト・ダンジョンで暴れていた

佐助「ハーケンインフィニティーインパルス」

足から高速でプラズマ弾をクビアゴモラに連続で放つ

佐助「カイト此処のクビアゴモラは後何体だ！」

カイト「あと50対だよ佐助」

佐助「了解、さっさと終わらせるぞ」

く現在残りのクビアゴモラ抹殺中く

佐助「法神流奥義・霞雪嶺！」

法神流の奥の技で剣より放たれし冷気でクビアゴモラどもを捕らえ一刀両断する

佐助「次、剣聖奥義・天地無双！」

守護闘神・金剛力士の威を借りクビアゴモラに放つ

佐助「めんどい！これで最後だ、龍震！」

右足に氣を込め踏み出しその唸りで残りのクビアゴモラを全て

倒す

くクビアゴモヲ抹殺終了く

佐助「此処は終わったから次行くぞカイト」

カイト「うん」

佐助は認知外迷宮から出次の場所に転送する

34話 最初の戦場アルケ・ケルン大瀑布（後書き）

作者「あれ？なんかザフィーが強くなって・・・
確かに俺はザフィーは好きだが・・・」

佐助「確かにな」

作者「あとなんで凄くマイナーなマンガから技を取ってるんだろ？」

佐助「お前が決めたんだろ！」

作者「神の戦国生徒会と東京魔人学園の技だしな」

佐助「こんなマイナーなマンガ知ってるやついるのか？」

作者「いるんじゃないまだ東京魔人の方なら」

佐助「でザフィーは魔改造するのか？」

作者「気分で決める」

佐助「そうか」

作者「うん」

佐助「それと????ってマジ誰だよ！」

作者「まあヒントはババアってことだな」

佐助「なぜババア？」

作者「無視！、次回も読んでください」

35話 第二・第三の戦場モーリー・バロウ城砦&ブリュナ・ギデオン（前編）

作者「赤点が三つあったから親にネットを止められたラハールです」

佐助「バカだろ」

作者「ヒドイ（涙）」

佐助「もういいや、それより読者様に謝れ」

作者「皆さま本当にすみませんでした！！（土下座）」

35話 第二・第三の戦場モーリー・バロウ城砦&ブリューナ・ギデオ

現在佐助はモーリー・バロウ城砦に転送した

佐助「あれ？クロノまでいるし」

クロノも戦ってました（笑）、まあ死なない程度に頑張れ

佐助「さて此処には雅仁とジーク居るし快癒の雨と帝の気魂は渡し
アウタ・ダンジョン
てるし認知外迷宮に行きますか」

佐助は奥にある歪みに入ってた

モーリー・バロウ城砦Side

ジーク「お！佐助は行ったか」

雅仁「そのようだな」

ジーク「で、これで何体目だ雅仁、俺は159対目だ」

そう言いながら近くのクビアゴモラを静カナル翠ノ楽園で貫く

雅仁「これで157対目だ」

言い返し来タリシ転生ノ刻でクビアゴモラを撃つ

ジーク「珍しいな俺の方が上なんて」

雅仁「そうゆう時もある」

クロノは少し頭を抱えていた

クロノ「猿飛の仲間はあるな規格外な奴らばかりなのか？」

フェイト「あきらめなよ、クロノ、佐助だよ」

フェイトは苦笑しながらもフェイトはバルディッシュでクビアゴモラを斬り倒す

クロノ「はあ、猿飛だから仕方ないか」

なんか理解してしまったクロノはスティンガーブレイドを放ちクビアゴモラを倒す

その頃ジークと雅仁はクビアゴモラを倒しながらこんな話をしていた

ジーク「あのフェイトって子教える人次第で伸びるな」

雅仁「そのようだな、武器から考えれば曾良だな」

ジーク「だな、でも曾良にできるのか？」

雅仁「問題は無いはずだ、後は佐助次第だ」

ジーク「そうだな」

そんな話をしながらもものすごい数を倒してる二人である

まあその頃佐助はクビアゴモラを絶賛虐殺中

佐助「消え去れアキシオン・バスター」

第三次スパロボのベルグバウの必殺技の魔力バージョンを放つ
たり

佐助「メス・アッシャー！」

次はアキシオン・バスターと同等の威力のデイス・アストラナ
ガンの技の魔力バージョンを放ったり

佐助「冥界に沈めアイン・ソフ・オウル」

佐助のアイン・ソフ・オウルはアストラナガンとデイスのイン
フィニティ・シリンダーが無いので

（有ったら逆に怖いし完全にロストログア認定だけど）魔力を超高
速回転させる事によってなんとか10の中性子星を目標物に向けて
召喚し、時間逆行を引き起こすことで消滅させることに成功した技

カイト「此処も完全にクビアゴモラはいないよ」

佐助「了解では出ますか」

モーリー・バロウ城砦に出た

佐助「こっちは終了つと、で、フェイト達は」

佐助はフェイト達の方を見る

フェイト「フォトンランサー・ファイア」

フェイトがフォトンランサーを放ちクビアゴモラを倒す

フェイト「あ！佐助そちは終わったの？」

佐助「ああ、そろそろ次に行こうと思う、残りは任せた」

フェイト「うん！任せて」

佐助「それじゃあ次行きますか、ワード隠されし 禁断の 竜骨山脈」

転送して現在ブリューナ・ギデオンにいます

佐助「さてと此処で真祖様からいただいた『死の刻印』を使うか」

佐助は懐からスケイスを呼び出す際に出る模様を模ったペンダントを出した

佐助「来い・・・来いよ・・・亮！」

ペンダントから光がで亮を（強制的に）呼び出す

亮「・・・よ」

佐助「なに、その間」

亮「本当に呼び出すとは思ってなかったから」

佐助「そうか、なら此処のクビアゴモラをはやて達と一緒に頼む」

亮「分かったよ」

佐助「サンキュ」

佐助はそう言い残しアウタ・ダンジョン認知外迷宮へ向かった

亮「俺も行くか」

亮もはやて達の下へ向かった

ブリューナ・ギデオンSide

月「あ、亮おにいちやんだ」

亮「月さしぶりだな」

はやて「月ちゃんこの人だれなん？」

月「佐助おにいちやんの友達の亮おにいちやんだよ」

リイン「よろしくです」

はやてのそばから小さな少女が出てきた

亮「よろしくな」

挨拶をすませ亮はクビアゴモラの方を見る

亮「さてやりか」

そう言い大剣・噴竜を装備し攻撃する

亮「おらぁ！」

亮は大剣の一振りで亮の近くのクビアゴモラが数対倒される

亮「骨破碎！」

亮は噴竜を風車のように振り回し更に倒していく

リインフォース「ブラッティードガー」

リインフォースも攻撃する

はやて「みんな準備できたで」

はやては詠唱を終わり亮とリインフォースに言う

亮・リインフォース「分かった（ました）」

そう言い二人は離れる

はやて「デアボリック・エミッション！」

はやてがデアボリック・エミッションを放つ

月「ぼくもいくよお、オルザンルーム、オルガンボルグ、オルバクドーン

オルレイザス、オルアンゾット、ヤースキン・ルフ、メロー・ルフ、ライセオル・ルフ

クケラ・ルフ、ウルカヌス・ルフ、ライネック・ルフ！」

月が・h a c k／／G・U・内の最強の範囲魔法と無印・h a c kの精霊魔法を連発した

はやて・リインフォース「……」

二人は固まっていた、そりゃあそうだこんな小動物みたいな子供がこんな滅茶苦茶強いのであるから

亮「月、やりすぎだろ（苦笑）」

亮は月の実力を一応知っているので苦笑していた

その頃佐助は

佐助「認知外迷宮内ネタ技第3回」
アウタ・ダンジョン

カイト「ネタ技じゃないと思うんだけど（苦笑）」

佐助は風の纏った大剣・風龍を持っていた
ふっすり
形状はエレメンタルジェレイドのクーとレンの同契状態の剣
リファクト

佐助「仕る青龍集わり 強り奔らせ
つかまつ うごな
白白明けと 朧なりに いめ通わん
しらしら おぼろ かよ」

佐助「南風の弦！」
ノストコード

風を作り出す巨大な弦ではじき飛ばしクビアゴモラに強烈な圧力を受け吹き飛ばす技

カイト「その詠唱いつも思うけどいらないよね」

佐助「いつも言ってるがこれは詠唱じゃなくて朋請の唱だ」
えいしやう

カイト「もういいや」

佐助「次！、汝貫とかくいめ結ばん 地の終えのさやけす 天のはら
なんち さつさつ なんち つむ おく
颯颯の声 汝貫かくいめ紡がん
などさは臆せにしか ゆめゆめ独り ぶすなき
さつさつ
かげ光り 満ちらん 地の終えのさやけし 天の海
颯颯の声 かくいめ合わさん」

佐助「東風の環！」
エウロスループ

ループ状に巻き起こす風の刃でクビアゴモラとその周囲を切り裂く

佐助「はい次、紅波の簀を弓に宛行し
めまじろ さ あてがい
瞬きの間 ものがわなん
ゆくり かなりと 八重波は
やつがれ ゆす やえなみ
僕の心 知るを結わん」

佐助「西風の阿！」
ゼフィロスアート

超強力なカマイタチ状の嵐がクビアゴモラを切り刻む

カイト「クビアゴモラはもういないよ」

佐助「え・・・？もういないの」

カイト「うん」

佐助「そうか、なら出るか」

佐助は^{アウタ・ダンジョン}認知外迷宮を出た

佐助「亮、この戦い最後まで付き合ってくれねえか？」

亮「いいぜ」

佐助「サンキュー亮」

佐助は少しニヤリと笑って言った

佐助「それじゃ、後は頼んだぜ亮」

亮「ああ」

佐助は次の場所へ向かった

35話 第二・第三の戦場モーリー・バロウ城砦&ブリューナ・ギデオン（後妻

佐助「今度はスパロボとエレジエ^{リアクト}技かよ・・・
しかも風龍とかレンが同契がないだけで完全に同じって」

作者「気にするな」

佐助「つうか完全に全部お前の趣味だろ」

作者「ああそうだ！」

佐助「だけどさ、アキシオン・バスター、メス・アッシャー、アイ
ン・ソフ・オウルはよく魔力でできたな」

作者「まあ、根性と気合と努力で」

佐助「無理だろ普通！」

作者「冗談だ、あれはかなり大量の魔力を使う代わりに出せる技だ」

佐助「どのくらい？」

作者「さあ知らん？」

佐助「おいおい」

作者「次回も認知外迷宮内でネタ技を使う予定！」
アウト・ダンジョン

佐助「使わなくていい！」

作者「次回も読んでください」

36話 最後の戦場コシユタ・バウア戦場跡（前書き）

作者「引っ越しでまだネットが繋がっておらず更新できないそしてやっと金が入ってネットカフェで更新できた作者です」

佐助「ダメ作者」

作者「言い返す言葉もない（涙）」

佐助「このダメ作者の小説でも楽しみにしていた読者様の方々すみません」

作者「すみません（土下座）」

36話 最後の戦場コシユタ・バウア戦場跡

佐助「コシユタ・バウア戦場跡に来たがすげえことになってるな」

現状を説明するとなのは、ヴィーター、曾良がクビアゴモラを
凄い勢いで倒していた

千沙「あ、佐助さん」

佐助「なあ千沙なんでこんな状況になったか教えてくれないか」

ドカーン！

千沙「曾良さんがなのはさん達を挑発してこんな状況に・・・」

バコーン！

佐助「やっぱりか（苦笑）」

千沙「でも曾良さんらしいですけどね」

佐助「だな」

ドッ・・・カーン

佐助「うるさいから行ってくるは」

千沙「気よつけてくださいね佐助さん」

佐助「おう」

コシユタ・バウア戦場跡Side

曾良「おら！ヴィータ、高町どうした！攻撃がとまってるぞ！」

曾良は万死ヲ刻ム影でクビアゴモラを倒していく

ヴィータ「うるせーよ！」

ヴィータ曾良の言葉にきれながらアイゼンでクビアゴモラを叩きのめす

なのは「ははは（苦笑）」

なのはは苦笑しアクセルシュータで倒していく

千沙「曾良さんいい加減にしたほうがいいと思いますよ」

千沙は良い笑顔で言い火炎太鼓の召喚符など（なぜかなくならない）を使い倒していく

千沙が曾良に陽炎ト踊ル巫女を向ける（この状態の千沙には佐助も勝てない）

曾良「千沙わかったから」

曾良は少しあせって言った

千沙「ならいいです」

なのは・ヴィータ「……（ガクガクブルブル）」

なのはとヴィータは千沙の笑顔の恐怖で震えていた

曾良「ああ！てめえーら！うぜーんだよ！！」

曾良の逆切れ打ち抜かれていくクビアゴモラ……南無三

千沙「曾良さんなんで切れてるんですか？」

なのは・ヴィータ「（それは千沙ちゃん（千沙）の責任だと思うよ）（だろ）」

二人は内心そう思ったが声にださなかった後が怖いからだ

曾良「てめえーら！とっとと消えやがれえー！！」

曾良は愚痴りながら光刃鎌魔で大量に倒す

千沙「曾良さん！やりすぎです！」

曾良「千沙！お前はどっちの味方だ！」

千沙「え？私は曾良さんの味方ですよ？」

ヴィータ「いやいや！完全にあっちの味方だろ！」

千沙「そうでしょうか？」

やはり千沙もアトリと同じように変なところが天然である

千沙「作者さん私もアトリさんも天然じゃないですよ」

なのは「千沙ちゃんなにいつてるの？」

千沙「気にしないでくださいなのはさん（後で覚えといてください
ね作者さん）」

なのは「う、うん」

千沙が怖くなったんで佐助のほうに移ります

佐助「なんだよその理由」

カイト「どうしたの佐助」

佐助「気にするな、気にしたら負けだ」

カイト「う、うんわかった」

佐助「さてと、アウト・ダンジョン認知外迷宮内ネタ技第4回」

カイト「やっぱりやるんだ（苦笑）」

佐助「思ったんだけどカイトって本当にデバイスか？俺が作ったが」

佐助は疑問に思った事を言う

カイト「自分で作ったのに自身無くしてどうするのさ（苦笑）」

はい、俺の些細な疑問を苦笑＋正論で返されました

佐助「だな、さーてネタ技行くぜ！」

カイト「だからネタ技じゃないから」

佐助「気にするな！まず始めは超々マニアック技！銀の0しろがね（ゼロ）撃！！！」

佐助はマッハで何十・何百回ものパンチをクビアゴモラにくります

カイト「確かにね、知ってる読者様いるのかな？」

佐助「いるかもよかなり低い確率だが」

カイト「そうだね」

佐助「カイト、モード陰陽師」

カイト「衣装はどっちで」

佐助「皇」すめらぎ

カイト「了解」

はい、今回初めて俺の陰陽師姿です、で衣装の事ですが俺が用意したのは

CLAMP作品のXの皇 エックスすめらぎ すばる 昴流と桜塚 星史郎の衣装ですあと技もこの二人の技です

佐助「まずはオン バサラ ダルマ キリ ソワカ 浄魂星蓮！」

五ボウ星（漢字だせなかった）からSLBを軽く超えているかなり危険な光線でかなりのクビアゴモラを倒す

佐助「次は鳳翼針波」

呪符が前と斜め右と斜め左に展開し一直線に猛スピードで進みクビアゴモラを倒す

佐助「オン カタガン ビサンマイ ソワス 宿陰動『闇鏡』」

二枚の呪符の何十対ものクビアゴモラが挟まれ鏡のように破壊され消滅する

佐助「宿陰動『飛影』」

左右の呪符がXを描くように飛びクビアゴモラを倒していく

佐助「最後Xエックスつながりで神威の技エナジーエミッション！」

かなり大量の蒼い玉が残りのクビアゴモラを倒していく

カイト「佐助！最後の場所も終わったね」

佐助「ああ、次はクビアか・・・死ぬ気で頑張りますか」

アウタ・ダンジョン
認知外迷宮を出た

佐助「……ねえ君たちこの状況は何かな？」

はい、出たのは良かったんですがクレーターやら瓦礫やらでコシュタ・バウア戦場跡が本当に戦場跡になっていて面影すらない状態です

佐助「誰がやった？」

千沙「……ここにいる全員ですそれとすみません」

曾良・なのは・ヴィータ「」「すまない（ごめんなさい）（すまねえ）」「」

みんなが謝ってきた、まあ当たり前だが

佐助「なぜクビアと戦う前に修復をやってるんだろ？」

なのは「本当にごめんね佐助君」

佐助「もういい、気にするな」

終了と同時に佐助は猛り立つ 相剋の 宿世の最深部に向かった

36話 最後の戦場コシュタ・バウア戦場跡（後書き）

千沙「作者さん（超良い笑顔）」

作者「な、なんでしょうか（汗）」

千沙「O☆H A☆N A☆S Iしましょうか（まだ超良い笑顔）」

作者「いやだー！ー！！」

佐助「あわれだな」

O☆H A☆N A☆S I中〓O☆H A☆N A☆S I終了

作者「ごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさい……」

千沙「佐助さん後処理お願いします」

佐助「わかったじゃあな」

千沙「はいでままた」

佐助「次回も読んでください」

37話 激闘クビア外部編（前書き）

作者「今回はなんと！佐助の秘密が明らかに！！」

佐助「俺の秘密って何だよ」

作者「考えたんだけどさ一人の人間に全ての碑文ってありえないよな」

佐助「そりゃあな、まあ俺はできたけど」

作者「そこでそのありえた理由を考えたら・・・うんほんとに普通じゃないことになった」

佐助「わけわかんねえな」

作者「で、この理由に読者の皆様にはできる限りつつこまないでください」

佐助「わけわかんねえがお願いします」

作者「それと今回は《The World》（ザ・ワールド）の英雄がです、あと作者がこんなカップルだったらいいなとゆうカップルになってます」

佐助「おい！」

千沙「さあ作者さん続きをはじめますよ（良い笑顔）」

作者「死んだ・・・（涙）」

37話 激闘クビア外部編

佐助と亮は猛り立つ 相剋の 宿世の最深部で今クビアの目の前には俺と亮がいる

現在のクビアの状態は大きな殻を被った球体様な姿をしている

亮「まだ俺の世界のクビアと戦ってないんだけど」

佐助「まあ特急列車×10に引かれたと思ってあきらめろ」

亮「なんで松と同じ風に！そしてどんだけ引かれるんだよ！」

佐助「気にするな俺は絶対に気にしないから」

亮「気にしろ〜！！」

佐助「ま、バカな話は置いといて始めますか」

亮「置いとくのかよ！」

佐助「あちらさんはもう臨戦態勢だしな」

下部からクビアアルファとよばれる4体のうちの1体が姿を出している

それを見た亮は答える

亮「そのようだな」

佐助「いいぜ・・・来い・・・来いよ・・・俺はここにいる!! スケエエイス!! ゼロオオオオ!!」

佐助の体から紋様が浮かび上がるだが、hack／G・Uのハセヲ達と同じように

スケイス2ndの金色の部分が赤くなっているスケイスがいた

亮「来い・・・来いよ・・・俺はここにいる!! スケエエエィィィス!!」

そして亮からも紋様が浮かび上がりスケイス3rdになぜかなくていった

スケイス3rd、色は純白になり身体もどこか像微的で神々しい姿で

剣のような翼まで着いており『死の恐怖』という異名が似合わないどころか逆に天使のような姿

佐助「おい亮いつから3rdに開眼した!」

亮「しらねえよ! つーか俺の世界じゃまだ3rdに開眼してねえぞ!」

佐助「まあわかんねえことは後回しだな」

佐助はクビアに大鎌『始まりと終焉の死を与えし大きな影』(勝手に命名)を構えながら言う

亮「そうだな」

亮も『死を与える者』を構える

クビアα「グオオオオオ！！」

クビアが大量のクビアゴモラを出し自分の周りにバリアーを張る

亮「いけえー！！」

亮はスケイス3rdで使えるマルチロックオンでクビアゴモラを倒していく

佐助「まだ俺はマルチロックオンは使えないがな使えないなりの戦い方があるんだよ！」

佐助「誘惑の甘き歌声&新緑の閃光&愛の紅薔！」

誘惑の甘き歌声↓相手に向かって音波を放ち相手の移動速度を低下させる効果を持つが

佐助のはそれをかなり広範囲に広げ味方には移動速度上昇の効果を与える↓

新緑の閃光↓上下に移動するビームを無数に放つ技↓

愛の紅薔↓もとは複数だが佐助が改良し無数のバラを射出し、そのバラから相手を狙うレーザーを放つ↓

亮「俺でもあんなに複数の憑神アバターの技は同時に使えないのだが・・・やそういえば佐助はチートだったな」

亮はあきれながらクビアαにダッシュで近づく

亮「オラオラオラ！」

チャクラムによる連撃でクビアαにダメージを与えていく

クビアα「グオグオグオオオオ！！！」

亮「きりがねえ！」

クビアα「グオオオオオオ」

エクトプラズムくクビアの息吹？で相手との間合いを離す技く
によって亮は間合いを離させられる

クビア・クビアα「くくくくグオオオオオオ！！くくくくくく」

トワイライトバスターの準備をしているクビア達

トワイライトバスターくクビアと下部のクビアα4体が同時に
砲撃を放ちそれが一個の砲撃に纏まる大技く（オリジナルの技）く

数十秒後準備が整ったのか砲撃を亮に向けて放つ

亮「?!」

だが佐助が亮の前にでコルベニクの相手の攻撃を無効化バリア
とメイガスのリーフガードを五重に張って向かい撃とうとする

ッドドドドドドドドド!

佐助「つくリーフガードが破壊されたか!!」

トワイライトバスターはまだ続きコウベニクのバリアと激突している

ドドドドドドドドド! ビキ・・・ビキビキ

とうとうコルベニクのバリアにまで罅が入った

佐助「ッ! やべーなこりゃあ」

ドドドドドド! ビキビキビキ・・・パリン!

そして数十秒後に破壊されまだ直撃を受けた

佐助「グハッ」

亮「佐助! 大丈夫か!!」

佐助「だい・・・じょ・・・う・・・ぶ・・・だ」

佐助は気を失った

精神世界? Side

??? 「目覚めてくださいモルナガの子よ」

佐助「ッ！ここはどこだ？俺はクビアと戦ってたはずだが」

その空間には白髪に白いドレスを着た少女アウラと銀髪の呪紋使いの少年司と赤い服の双剣士の少年カイトと銀髪に白い服の少年ハセヲと最後に銀色の鎧に頭の方に角をつけた双刃剣士の少年トキオアウラ「私が連れてきたからです」

佐助「なるほどそれと何で《The World》（ザ・ワールド）の英雄が勢ぞろいで女神アウラがいんだよ」

カイト「僕達にも分からないんだ急にアウラに連れてこられて」

司「でもアウラが僕達を呼ぶなんてアカシャ盤以来だね」

ハセヲ「たく、で今度はなんだ女神さん」

トキオ「ハセヲ少し焦りすぎじゃないか？」

ハセヲ「うるせえ！こっちはカールに呼ばれてログインしたのにいきなり連れられて来たんだぞ！！」

カイト「そういえばハセヲって今カールと付き合ってるんだもんね」

佐助「え？カイトサンイマナンテイイマシタキキマチガイカモシレナイケド、カールトツキアツテイルツテイイマセンデシタカ？」

カイト「うん言ったよ」

カイトが無茶苦茶良い笑顔で言ってきた

佐助「はああああ！マジ？マジなのかハセヲ！！」

ハセヲ「うるせえ！！／／／」

司「それを言うなら僕とカイトの現実^{リアル}じゃ付き合ってるよあとオルカと昴^{すばる}も付き合ってるけど」

＊司の現実^{リアル}は女の子です

佐助「・・・」

もうなにも言う事ができなくなった佐助です、だってさ司がカイトとオルカと昴が付き合ってるってどんだけさ

佐助「（でもよく認めたなアウラが）」

アウラ「司なら認めますよ、あの黒バラとか天然天使とかバカ双剣士は認めませんが」

佐助「（ブラックローズと寺島良子となつめかい）」

佐助「トキオは彩花とか」

トキオ「いやクラリネツテとだけど」

佐助「マジで？」

トキオ「おう！」

親指を立てて笑顔で言ってくる

佐助「で、アウラなんで俺達をここに？」

アウラ「あなたにお願いがあります、モルナガを母を止めてくださいそれと母に私はあなたのことを怨んでないとあなたと一緒に居たいと伝えてください」

佐助「モルナガ！なんでリリカルな世界にいんだよ！！ってことはあのクビアもあいつのせいか！！」

アウラ「はい」

佐助「了解そんじゃ俺をクb・・」

アウラ「まだ話は終わってません」

佐助「終わってないって？」

アウラ「はい、どうやったらskeisszero3rdを開眼できるかです」

佐助「ッ！ほんとか！！」

佐助はアウラに詰寄った

アウラ「はい、最後のカギは仲間を信じる心です」

佐助「信じる気持ち・・・ね」

佐助には思い当たるところがあった

アウラ「はいですからここにいらっしゃる皆さんの話を聞いてもらおうと思
って」

ハセヲ「そんな事で俺を呼ぶな!!」

アウラ「まず司の話からですね」

アウラがハセヲの言った言葉を完全に無視した

ハセヲ「無視するんじゃないええ！」

司「僕の場合は昴とミミル達のおかげかな？あのお節介のおかげで
今の僕がいるし信じられる仲間ができたんだ
それに昴の現実^{リアル}の真理子のおかげで海斗に告白もできたし」

佐助「カイトお前の本名教えてくれ」

カイト「いいけど？鷹村 海斗だよ」

佐助「さいですか、それと司の本名は？」

司「莊司 杏だよ」

佐助「じゃあ杏は今海斗と暮らしてるの？」

司「・・・うん／／／」

佐助「さいですか（よく認めたな佐々間さん）」

カイト「僕の場合は本当にいろいろな人のおかげだね、バルムンクやブラックローズ・ミストラルその他の人達の助けがあったからこそ、禍々しき波にも立ち向かえたし勝つこともできたんだ」

ハセヲ「チツ！しゃあねえな、俺はよ最初の頃は志乃さへ救えればあとはどうでもよかったトライエッジ三爪痕にデータドレインされてそれからだなお節介なアトリ達のおかげでもあるからな特に櫂には助けられたないろいろと」

佐助「（改造せられたり改造されたりしてたけどね）」

ハセヲ「確かにそうだな」

佐助「（心読まれた！）」

トキオ「俺はいろいろな時代でいろいろな人達にあって協力してもらって、そこで俺は1つの結論に至ったんだ、歯車はさ1つじゃ動かないんだよ
いくつもの歯車が絡みあって始めて動きだすんだ、だからさ佐助はもっと頼ってもいいんじゃないか？」

佐助「ははは確かにそうだなもっと頼ったって良いんだよな、やっぱすげーよトキオ」

トキオ「へへへ、佐助これをもって行け」

トキオが渡したのは自分の武器であるギアを発射できる双刃刀だからだ

佐助「いいのか？」

トキオ「ああ！」

佐助「アウラ頼む」

アウラ「わかりました、あなたに夕暮れ龍の加護があらん事を」

最後に見せた笑みはととてもとても優しい笑みだった

アウラSide

私は心配だった

カイト「アウラ彼なら佐助なら大丈夫だよだってアウラの弟となんでしょ」

アウラ「そうですね彼ならやってくれるとなんせ私の弟ですから♪」

カイトのおかげで心配も和らいぎました、ありがとうございます
すカイト

神「お久しぶりですね女神アウラ」

はい佐助を転生させた神です

ハセヲ「あんたは何者だ？」

万死ヲ刻ム影を構えて言うハセヲ

アウラ「大丈夫ですハセヲ」

ハセヲ「ならいい」

ハセヲは武器をおろす、本当に心配だったんだねハセヲちゃん

ハセヲ「誰がハセヲちゃんだ!!」

司「何言ってるのハセヲ」

ハセヲ「チッ!」

ハセヲ一人が恥をかく

アウラ「本当に久しぶりですね創造神」

神「いやゝ調べてビックリですよ最初の時に全ての碑文と言われましたが本当は全ての碑文は一人の人間には扱えないはずなんですからそれに碑文は人間が扱うには大きすぎる力ですからだが

全ての碑文が彼の中に入ってたんですから私は適正のある碑文だけを理由を説明して入れる予定でしたが呼んだ瞬間に全ての碑文が入ってくんですから、それで疑問に思って調べたらモルナガが現実に産み落とした子だったんですから

そのあと猿飛の家系の人間に拾われその名字になる」

アウラ「でもこのことは佐助には伝えないでね」

神「わかってますよ、なんせ彼はこの世界のほとんどの神に好かれていますしね」

アウラ「ふふ、やっぱりね」

神「ですが《The World》のアウラあなた以外の精霊神は
気にはないようすがね」

やはりそうですか・・・佐助にはつらい思いをさせるかもしれ
ませんね

神「では私はこれで」

アウラ「すみませんね」

神「気にしないでください私個人も佐助さんは気に入ってるんで」

アウラ「ふふ」

佐助のいない間の亮Side

亮「おい！佐助！！」

佐助はスケイスゼロの状態で気絶しているしかもコルベニクの
相手の攻撃を無効化バリアとメイガスのリーフガードを五重に張っ
てあるこの状態ならトワイライトバスター以外じゃ早破れないから
気にせずに戦えるな

亮「行くぜ！」

亮はその場にいるクビアゴモラをマルチロックオンで倒してい
くそれを何回からやりクビアゴモラいなくなるとクビアαが張って

いたバリアーがなくなり『死を与える者』のチャクラムで攻撃をしたり他の憑神アバターの技で攻撃をするこの行動を何回かおこない最初のクビアαを倒す

亮「やっと一体かよ・・・だがな負けるわけにはいかねえんだよ！」

亮はまたその場のクビアゴモラを倒していく

クビアα「グアアア！！」

ゴモラ射出くその名の通りクビアゴモラが減ってきた時に出すかなり面倒な技く

その射出してきたゴモラのうちの一体が亮に突撃してくる、だが亮は『メイガスの盾』に守られる

亮「くらいやがれ！！」

そして亮はすぐにマルチロックオンで倒していく、何回かゴモラ射出されたがなんとかバリアを消せ攻撃の繰り返しそのおかげで二体目のクビアαを倒せた
だがそれはクビアの罠だった

ジバドバスターくジバドを一箇所に集中させ放つ砲撃技一（オリジナルの技）く

亮「チッ！『メイガスの盾』！」

ドドドドドド・・・ビキビキ・・・パリン！！

亮「やべ！」

『メイガスの盾』を試してみたがすぐに破壊され亮はジバドバスターを直にくらう

亮「グ・・・どんだけ強えんだよ・・・」

クビア「グアアアアア！！！」

フルカオスベナ「カオスベナをフルでおこなう技」（やっぱりオリジナル技）

亮「おいおいこの数は反則だろ」

通常のカオスベナの三倍ぐらいはある

亮はチャクラムの連続攻撃で応戦するが3分の1倒して『メイガスの盾』でガードしたがそれでも半分

亮「チッ！」

ガード体制に入る横から???「ツインサイズチャクラムシューター12連」声と12発のチャクラムが飛んでき残りのカオスベナを蹴散らす

そこには両手に『始まりと終末の死を与える大きな影』を持っている深紅で頭の方には・hack／／ZEROの楚良が巻いている赤い帯を巻いたスケイス3rdがいた

スケイス3rdが天使のような姿ならスケイスゼロ3rdは完全な

死神といった感じだろう、真っ赤な血に染まった死神と

亮「この声は・・・佐助！目覚めたのか！！それにその姿は・・・」

少し時間戻して佐助が精神世界？から出て亮を助けるまで

佐助「来いよ・・・来いよ・・・来いよ来いよ来いよ！！俺は！ここにいる！スケイス！！ゼロオオオオオオオ！！！」

スケイスゼロ3rdになった佐助がいた『始まりと終焉の死を与える大きな影』を両手に持っている

佐助「・・・え？これがスケイスゼロ3rd・・・なんですかこのチートな憑神^{アバター}は」

スケイスゼロ3rd

能力：碑文の技の同時発動（何種類でも可）

碑文の技の合成

蒼炎のカイトの技も使用可能

敵を喰らえば喰らうほどその敵の力・能力を全て取り込むこと可能（やめることも可能＋減らす事も可能＋クビアは不可）

・hackの全ての武器の使用可能^{アバター}（大きさは憑神の大きさ）
・スキルの使用可能・魔法の威力は憑神レベルで

喰らえば無限に強くなるチートな憑神^{アバター}

佐助「まあさておき亮は・・・」

亮はちょうどフルカオスベナをチャクラムで応戦しているところだった

佐助「さて目覚めた事だし行きますか」

ダッシュで亮との距離に近づく、ちょうど『メイガスの盾』が壊れかけているところだった

佐助「ツインサイズチャクラムシューター12連」

二本の『始まりと終焉の死を与える大きな影』で亮がガードの体制に入ったときに12発のチャクラムで蹴散らす

亮「この声は・・・佐助！目覚めたのか！！それにその姿は・・・」

佐助「ああ、アウラと《The World》（ザ・ワールド）の英雄のおかげでな」

亮「《The World》英雄ってハセヲとかかよ」

佐助「まあな、正確にゆうと司・カイト・ハセヲ・トキオだがな」

亮「俺はそこまで詳しくねえよ！」

佐助「まあしょうがねえわな、俺の知る限り今までのゲームの・hack／／シリーズで一番人気はG・Uだったし、俺的には無印だけど

小説・マンガは・hack／／ZEROが好きなんだがな、なぜか俺が転生するまでの間に続きが出なかった（涙）」

亮「なんか知らないがドンマイ」

佐助「もういいよ、それじゃあ倒すか、がその前にファリプス」

亮（スケイス3rd）が光に包まれ体力が全回復する

亮「なんで憑神アバターの姿で使えるんだよ」

亮に飽きれながら言われる

佐助「チート憑神アバターだからじゃね」

亮「やっぱりか」

佐助「ひどくね、まあいいやそんなじゃあ行くぜ!!」

佐助はまずスケイスゼロ3rdの能力の1つの憑神技アバター合成を使う

佐助「新緑の紅薔」

新緑の紅薔ゝ新緑の閃光と愛の紅薔の合成技、無数のバラが上下左右に移動＋狙ったら消えるまでレーザーを放つ（威力は二つの技を合わせた威力）ゝ

新緑の紅薔が周りのクビアゴモラを一掃しクビアαのバリアが消える

佐助「四滅の魔針」

四滅の魔針ゝ掃討の魔針と四滅光輪波の合成技、48本の針が

ら強烈なレーザーを4発同時に出す（これまた威力は二つの技を合わせた威力）ゝ

この技を直接くらった2体目のクビアαは3体目のクビアαが出る

亮「どんだけチート技だよ四滅の魔針って・・・ぜってえくらいたくないな48本の魔針からの四発のレーザーは」

佐助「うん、俺がやった張本人だが見てくらくないと思った・・・つかかわせないだろあの攻撃は」

今回はコルベニクの用に出したが横一列などにもできますから多分いや絶対交わせません、これに愛の紅薔が加わったらもつとむごいです
考えてみてください48個のファ○ネルがZ○ンダムのハイパーメガランチャーのビーム級を出すのを

亮「自分でやっというて・・・クビア南無三」

とか言いながらもマルチロックオンでクビアゴモラを倒している
く亮である

佐助「んじゃ俺は凶運旋回刃＋因縁の大輪＋蒼炎舞・虎輪刃＋チャクラムブーメラン」

凶運旋回刃ゝフィドヘルの持つ円盤をブーメランのように投げる技ゝ

因縁の大輪ゝ朔モードのときの周りに浮かんでいる花をブーメ

ランのように投げる技」

蒼炎舞・虎輪刃」蒼炎の守護神の持つ双剣をブーメランのように投げる技」

チャクラムブーメラン」スケイスゼロ3rdのチャクラムをブーメランのように変えた技」

計4×2種類のブーメランと亮のチャクラムがクビアαを襲う、ブーメランは破壊しないかぎり消えない

クビアα「グオオオオ?!、グオオオオ!!、グオオオオオ!!!!」

クビアはブーメラン軍を破壊しようとしているが亮のチャクラムをくらっているせいで怯んでブーメラン軍をまともにくらってしまふ

エクトプラズムをやるうとしてもブーメラン軍が襲ってくる・・・ある意味での地獄、それを連続で受けて最後のクビアαがでる

クビアα「グオオオオオオオ!!!!」

佐助「さて武器はこれで」

佐助は『始まりと終焉の死を与える大きな影』が消え憑神に合わせた大剣・シラードが出てきた

亮「なんで!憑神でシラードが使えるんだよ!!」

佐助「スケイスゼロの能力のようなんだ」

平然と言い返す佐助、まあそれしか言いようがないんだけどね

亮「もう何もいえない」

佐助「ならいいじゃん、秘奥義・重装甲破！」

重装甲破が終了した瞬間に双銃・D G—Zに持ち替える

佐助「連撃！JUSTICE！！」

JUSTICEでさらにダメージを与えるJUSTICEが終了で『始まりと終焉の死を与える大きな影』に持ち替えるしかもかなりの魔力を集めながら

亮「え？何しようとしてるんだ？」

チャクラムを放ちながら聞く亮

佐助「曾良が考えた大技！『死への誘い』！」

死への誘いゝこれは曾良が考えた技、大鎌に魔力を溜めていき魔力で鎌の部分を巨大化させていくそして最後に近づいて斬るなり放つなりして攻撃する（曾良はほとんど斬りにかかる）ゝ

想像は某の鎌職人の魔女狩りか魔人狩り

佐助「くらいやがれ！！」

クビアα「グオオオオオオオオオオ？！！？！！」

死への誘いを放ったその大きさは軽くクビアαの大きさを凌駕しているそれをくらった、それをくらったクビアαは消滅する

亮「ほんとチートだな・・・おい」

それをみた亮は軽くあきれてしまう

クビア「グオオオオオ!!!」

亮「さっさと終わらずぞ!」

佐助「わかってる!」

佐助と亮のマルクロックオンで周りにいたクビアゴモラはすぐにいっそうされる、そして近づいてチャクラムで攻撃を繰り返す

クビア「グオオオオオオオオオ!!!」

フルトワイライトバスター

トワイライトバスターの最強バージョントワイライトバスターの軽く五倍の威力はある

亮「おいおい最後にこれかよ」

佐助「大丈夫だ今回はな!!!」

リーフガードを五十重にコルベニクのバリアを二重にかける

クビア「グオオオオオオオ!!!!」

フルトワイライトバスターが放たれる

佐助「おおおおお!!」

ドドドドドドドドドドドド!!

クビア「グオオオオ!!!!」

ドドドドドドドドドドドドドド!!

佐助「負けるかよ!!!!!!」

ドドドドドドドドドドドド・・・ビキ・・・ビキビキ・・・パリーン!!

五十重に張ったリーフガードが破壊される

佐助「まだだ!!」

そして二重に張ったコルベニクのバリアにあたる

クビア「グオオオオオオ!!!!」

ドドドドドドドドドドドドドドドド!!!!

クビア「グオオオオ!!」

ドドドドドドドドド!!

ドドドドドビキ・・・ビキビキ・・・ビキ

佐助「やべー・・・な！」

ビキ・・・パリ・・・・・・・・・・

その音から割れたりする音が聞こえなくなりフルトワイライト
バスターが止んだ

亮「佐助！データドレイン行くぞ！！」

佐助「おう！」

亮と佐助は翼のような剣が砲台になりデータドレインの準備を
する

佐助「亮！ありったけの力を込めろよ！」

亮「言われなくても！」

亮と佐助は準備ができありったての力を込めてデータドレイン
を放つ

佐助・亮「データドレイン！！」

クビアはデータドレインをくらいかなり弱まる

佐助「チッ！やっぱクビアコアを破壊しなきゃ死なねえか！」

亮「なら中に入るまでだな！」

佐助「よっしゃあ！」

佐助と亮はクビアの内部に乗り込む

37話 激闘クビア外部編（後書き）

作者「すみませんすみませんすみませんすみません」

まだO☆H A☆N A☆S Iが続いてる、あの時はまだ第一段階

千沙「まだ終わりませんよ（超良い笑顔）」

ヴァルク「俺参上！って・・・え？まだ続いてるんですか！！」

佐助「よヴァルク、そのことだがまだあれは第一段階だまだあと五段階ある」

ヴァルク「ちょ佐助さん！とめてください！！まじで死にますって！！！！」

佐助「無理だ、この状態の千沙には俺でも勝てないし死にたくない」

ヴァルク「マジですか？」

佐助「うんゆういつ止めることが可能なのは曾良のみだ」

ヴァルク「なら呼んでください！」

佐助「うん無理、今任務でいないから」

千沙「佐助さん、あとヴァルクさんでしたっけ手伝ってください（顔に血がついて超良い笑顔で杖を向けて黒いオーラを出した状態）」

佐助・ヴァルク「はい!!喜んで!!! (ガタガタブルブル×1
00)」

作者「次回も読んでください・・・すみませんすみませんごめんな
さいごめんなさいごめんなさい生まれてきてごめんなさいすみませ
んごめんなさいごめんなさいごめんなさい・・・」

38話激闘クビア内部編始まり（前書き）

作者「今回はバトルはありません、ただ進んでいって敵の紹介だけです」

佐助「戦わないのかよ！」

作者「うん、戦うのはこれが終わってからだよ」

佐助「そうかい」

千沙「作者さんは連れ逝きますね（やっぱり良い笑顔）」

佐助「作者よい頑張れよ」

作者「いやだあああ~~~~~!!!!!!」

38話激闘クビア内部編始まり

佐助「ここがクビアの内部か・・・」

亮「さて佐助行くぞ」

佐助「ああわかってる」

そのとき急に周りが光だし光がおさまるとなのは達と曾良達
がいた

＊曾良達は八相の碑文の擬人化たちです

佐助「・・・なんで？」

なのは「えーとアウラっていう人がここに送ってくれたの」

亮「あはは、やっぱりアウラか」

フェイト「佐助また私達をおいていこうとしたでしょ」

佐助「いやいや！まずクビアの内部だし呼べないだろ！！」

シグナム「それはウソじゃないな」

シグナムよレヴァンティンを向けるな怖いから

佐助「さすがにそれはほんとだ」

シグナム「ならいい」

それでシグナムはレヴァンティンを下げる

曾良「とつとと進むぞ」

曾良が不機嫌にゆうので佐助達は奥に進んでいく

奥に進んで行くと広い場所に出るそこには各関節ごとにパーツを分解した人形のような奇妙な姿で、顔に当たる部分にはボウリングの球のような三つの穴が存在しており、ケルト十字に似た赤い十字架を得物にしている謎の物体がいた

佐助「おいおい、なんでここにR…1のスケイスがいんだよ!」

曾良達以外亮は含まない「ええええええ!!あれがスケイスなのかよ)(ですか)!!」

曾良「うるせえ!!」

曾良の怒鳴り声で場が静かになる

曾良「おい佐助ここは俺とフェイトに任せて先に行け

フェイト「ええ!私も!」

曾良「ああ、てめえはここに残って俺と戦うぞ」

フェイト「う、うん」

フェイトが答えると曾良が速攻で攻撃を始める

曾良「旋風滅双刃！」

曾良の攻撃をスクェイスは十字架でガードする

曾良「行け！そして佐助クビアをぶん殴って来い！！」

佐助「わかったぜ！！フェイトがんばれよ！」

フェイト「うん！」

雅仁「フェイト、お前の武器が曾良と似ている曾良の戦い方を見て学べ」

雅仁はフェイトに曾良の戦い方を見ろと言い佐助達を追っていた

次に佐助達が到着する前に何回か外郭は地図のような形で、歪な形にくり貫かれた古代壁画に、一つ目のような物が描かれた何とも無機質な外見を持っている的が何回か出てきては消えてを繰り返していた

佐助「次はイニスかこの調子ならR…1の八相が全て出そうだな」

千沙「ここは私となのはさんが残りますね」

なのは「ええええええ！私なの！！」

千沙「はい、私には強力な攻撃方法はありませんから」

嘘ですいっぱいありますSLBを軽く超える攻撃があります

千沙「そんな攻撃はありませんよ作者さん」

は！もしやまたO☆H A☆N A☆S I☆フラグを立ててしまった！！

なのは「またなに言ってるの？千沙ちゃん」

千沙「気にしないでくださいねなのはちゃん」

佐助「ははは、ドンマイ作者よ」

千沙「早くいってください佐助さん」

佐助「わかった、なのはがんばれよ！」

なのは「うん！佐助君」

千沙「あなたがイニスであるならわかりますよね、今私が仕掛けた技が」

イニスが逃がさんと攻撃を仕掛けてくるがそれは幻影であった

佐助達がその場から走り去っていく

千沙「”蜃気楼”である事ぐらい」

千沙は一瞬で幻影魔法の蜃気楼を使っていた

佐助達が次の広い場所に出るとそこには大きな球体に十数枚の葉を付けた一本の枝というような植物の形をしているが、無機質な印象を感じさせる敵がいた

佐助「次はメイガスか」

ジーク「ここは俺が相手するお前らはいきな」

ヴィータ「私も残るぞ」

ジーク「讓ちゃんいいのか？」

ヴィータ「うるせえ！私が残るって言ったら残るんだよ！」

ジーク「わかったから少しおとなしくしてくれ、刺々舞」

刺々舞で攻撃をし一時的だが怯ます

ジーク「行け！」

佐助「すまない」

ジーク「気にするんな佐助はわかってると思うがこいつらと俺らは因縁的なものがあるからな」

そして今度の広い場所に出るとイニス以上に無機質な雰囲気を持っているため、まるで落書きのようなその姿は言葉では形容し難い。強いて言えば、様々な形状の仮面を組み合わせた様な形状をしている

佐助「やっぱりフィドヘルか・・・」

ワイズ「私が残ろう」

クロノ「ここは僕も残ろう、いいですよねワイズさん」

ワイズ「いいだろう」

クロノ「ありがとうございます」

ワイズ「ラプドウ、さあ行きたまえ、特に佐助、君にはやるべきことだ」

ラプドウは味方全員のスピードを25%上げる魔法

佐助「ああ、わかってる」

またまた次の広い場所には外見は二枚の対称的に並んだ菱形状の岩盤いた

太陽「ここはうちと月・はやてとリインフォースが残るから先行きや」

月「そうだよ佐助おにいちゃん」

はやて「なんでうちも残らないかんかわからんが先行きや」

リイン「そうですよ」

佐助「わかった」

だがゴレが佐助達を先に行かせないために攻撃してくるが太陽と月に阻まれ

太陽「そんな攻撃でウチや月が佐助に当てさせると思ったんか？」

次の広い場所には一匹？のネコ型の斬刀士が頭を抱えていた

ネコ型の斬刀士「いやだ・・・やめてくれ！

ボクは・・・ボクのままでいたいんだ！」

ネコ型の斬刀士「ボクに近寄らないで・・・

ボクを・・・見ないで・・・」

ネコ型の斬刀士が赤く光を放ち上半身は女性を象ったものであり、下半身は目のような模様がかたどられた一枚の巨大な花を連想させるような物がスカートのように展開している敵になる

佐助「ミア・・・いや、マハか」

エル「ここは僕だね、それとシグナムだっけ？きみも残って」

シグナム「私がか？」

エル「そうだよ」

マハが佐助達を爪で攻撃を仕掛けてくるのをエルは魅惑スル薔薇ノ雫で受け止める

エル「ねえミア、君の力はこんなものじゃないよね、それと佐助達は行って」

佐助「エルお前がミアを助けるかはお前しだいだからな」

エル「うん」

でやっぱり広い場所には不可思議な形をしていて、強いて形容するならハテナマーク。曲がりくねった石柱の midpoint に、一本の巨大な杭が打ち込まれているという、何とも抽象的な形態での敵がいた

佐助「はあ、やっぱりタルヴォスか」

鈴子「ここは私が残るわ」

ザフィーラ「俺も残ろう、そのほうが早く終わる」

鈴子「助かるわ」

ザフィーラ「気にするな、こいつや他の八相もだが完全に黒鬼達の頂点に立つ俺の好敵手ライバルの闇月やみつきを超える敵だからの」

鈴子「鬼達もそうだけど地球にいる者たちだけで佐助やあなたがいなかったら完全に管理局なんて滅ぼせるわよ」

ザフィーラ「確かにな」

佐助「先に俺達は行くぞ」

タルヴオスが佐助達にレーザーで攻撃するがザフィーラが狼氷^{フアンダアイス}トライク
撃でタルヴオスの攻撃を氷の狼で
凍らせそれに乗って鈴子がタルヴオスに蹴りを入れる

鈴子「相変わらずね、あなたも佐助が考えてる部隊にはいない？」

ザフィーラ「無理だな、俺は主はやてについてくだけだ」

鈴子「でしょうね」

次の広い場所には巨大な種のような形、発芽したかの如き二枚の葉のような姿、人間の眼を象った無数の花卉の敵がいた

佐助「・・・コルベニクか」

雅仁「ここは俺と亮だな」

亮「わかったぜ雅仁さん」

雅仁「ふっ、行くぞ！」

亮「おう！」

雅仁が来タリシ転生ノ刻でコルベニクが出してくる針を射撃で壊し亮はコルベニクに近づき万死ヲ刻ム影で斬りつける

佐助「そんじゃ行くぜ」

雅仁「ああ」

亮「頑張れよ佐助！」

俺は一番奥に行くとそこには・hack／／xxxxxにでてるクビアがいた

クビア「やあ始めまして佐助♪」

佐助「始めましてだなクビア」

クビア「フフ、本当に密かにだけどついてって良かったよモルナガに♪」

佐助「どうゆうことだ」

クビア「それは僕との戦いが終わってからだよ♪」

クビアが黄昏の大鎌を構える

佐助「それもそうだな」

俺は自分の持つ最強の武器、薄明の双剣を構える

薄明の双剣くカイトの使う英雄の双剣に似てるが色は薄明を似せた色く

適正レベル????? (佐助しか使えない、投影魔術でも出せない)

クビア「いくよ♪」

佐助「ああ、来い！」

二人が踏み込み戦いが始まる

38話激闘クビア内部編始まり（後書き）

千沙「だれがSLBを超える攻撃は確かにありますよ、だけど対人戦での話ですが（無茶苦茶良い笑顔で炎で燃やしてるさらに顔には血がついてるし杖にも血がついてる）」

作者「ぎゃああ！！熱い！熱い！熱すぎるって！！」

リョウ「きた・・・ぞ・・・」

リョウが固まってしまった

佐助「来たかりョウ」

リョウ「あれはひどくないか・・・いやひどすぎるだろ」

佐助「・・・だよ「ぎゃあああ」今度は冷たい」今度hs絶対零度で凍らされてるし」

リョウ「・・・（かなり汗だく）」

千沙「佐助さんえーとヴァルクさんの息子さんのリョウ君でしたっけ？」

リョウ「はい！そうです！！（なぜか敬礼している）」

千沙「良い子ですね、そうそう佐助さん今度は白炎で燃やしてください、いいですよね？（超良い笑顔）」

佐助「イエス・ママ!!」

佐助は千沙に言われたとおり白炎で燃やしてる

リョウ「・・・（オヤジ・・・ごめん情けねえって言ってあれはドズル100人いても勝てねえよ）（泣き）」

作者「熱い冷たい熱い冷たい!!!!!!!!!!!!!!」（白炎と絶対零度同時にくらう作者）」

リョウ「あのおひどすぎじゃ・・・（涙目で）」

千沙「ぜんぜん甘いですよ（本当に超良い笑顔）」

リョウ「佐助・・・もお帰っていいか？」

佐助「ヴァルクの気持ちわかったか？（涙目で）」

リョウ「ああ（オヤジあれを手伝えはああなるはな）」

佐助「そんじゃ転送」

リョウが帰ったところにはもっとひどくなったそうだ

39 話クビア編内部スキースの間編（前書き）

佐助「おせえいったい何やってたんだ」

ラハール「パソコンにコーヒーこぼしてパソコンが壊れたからケータイ更新になって記憶をたどってやっと更新できた」

佐助「バカだろお前はそれじゃあ一生ランクアップの超魔王ラハールになれないな」

ラハール「グハア」

佐助「それとこれをくらいやがれ超蒼炎魔王玉！」

ラハール「ギヤアアアア！」

佐助「今回はお客様が結構来るらしいから準備するぞ千紗、曾良」

曾良「なんで俺が」

千紗「曾良さん行きますよ！」

曾良「わあたよ」

39 話クビア編内部スケイスの間編

第一相スケイスの間

曾良「オラオラオラオラ!!」

曾良が万死ヲ刻ム影で何回も斬りつけるがスケイスは赤い十字架・生と死の十字鎌（作者命名）で防ぐ

フェイト「フォトンランサー・・・ファイア!」

フェイトはスケイスが生と死の十字鎌を持ってない方にフォトンランサーを放つが手で防がれる

曾良「くらいやがれ! 骨破碎!」

曾良が大剣・シラードに持ち替えて骨破碎を放つ・・・がスケイスの生と死の十字鎌が大剣ほどに大きさになり骨破碎を防ぐ

スケイス「クオオオオオツ!」

曾良「ッ!」

力はスケイスの方が強く曾良はスケイスに弾き飛ばされる、その間にフェイトはバルディッシュをザンバーフォームにしてスケイスの後ろから斬りかかる

フェイト「はああ!」

スケイス「クオオオオオオツ!!」

だがスケイスの反応速度の方が速くスケイスは後ろに振り向き生と死の十字大剣（大剣状態だから）で受け止めフェイトを弾き飛ばさず

フェイト「クッ」

スケイスは容赦なくフェイトを殺そうと近づき生と死の十字大剣を十字鎌に変え振り下ろすが曾良がフェイトの前に出てスケイスの攻撃をシラードで受け止める

曾良「オラァァ!!」

曾良はそのままスケイスを力任せに弾き飛ばす

スケイス「クオオオオッ!？」

さすがのスケイスもビックリしたようだ

曾良「おいフェイト大丈夫か」

フェイト「う、うん」

曾良「ならいい」

曾良は双剣・虚空ノ双牙を構える

曾良「いくぞ! 疾風滅双刃!!」

曾良の疾風滅双刃を使うがスケイスは生と死の十字鎌でガードしそこから環伐式閃を放つ曾良はギリギリガードに成功した

フェイト「ハーケンセイバー！」

その間にフェイトはハーケンセイバーを放ちスケイスに直撃するがあまりダメージにはならなかった

曾良「チッ！それでもダメか・・・つーかなんでスケイスが大剣使えるんだよ」

今度は曾良は双銃・D G－Xに変えて乱射したがスケイスは生と死の十字大剣に変えて盾にしやり過ごす

曾良「（おいフェイト、俺が奴を引きつけてる間にお前の今ある最強の魔法を放て）」

フェイト「（うん！）」

曾良が念話でそうつたえ万死ヲ刻ム影を持ってスケイスに斬りかかる

曾良「オラ！」

スケイスにガードされてからすぐに双銃のアーツJUSTICEをを放ち時間稼ぎをする

フェイト「（曾良準備できたよ！）」

曾良「（わかった！）」

フェイトは念話で曾良につたえ曾良は答える

フェイト「トライデントスマッシー!!」

スケイスはトライデントスマッシーをくらう、
煙でその場が見えずスケイスが倒れたかがわからないが

フェイト「倒した・・・かな？」

曾良「油断すんじゃないぞ」

煙がはれた瞬間にスケイスの赤い十字架がフェイトを捕まえる

フェイト「え？」

曾良「な！」

急なことで曾良は対処ができなかった
それからすぐフェイトにデータドレインが放たれた

だが白髪に黒いドレスを着た女性がスケイスのデータドレインを阻
んだ

???「あいつら私の子供達の偽物を使ってなめてるのかしら・・・」
「

その女性はなぜかフェイトを下ろしてスケイスに向かって言った

モルナガSide

モルナガ「あいつら私の子供達の偽物を使ってなめてるのかしら・
・」

モルナガからかなりの怒気が出ている

曾良「てめえが何で居やがる」

フェイト「え？曾良の知り合いなの？」

あらここに息子が居るなんてねしかもR・2の時の、佐助が出
して擬人化させたってとこかしら・・にしてもハセヲに似てるわね

曾良「ああ、この事態を起こしたのはてめえか」

モルナガ「確かに私ね・・だけど八相に関しては知らないわ（八
相は私の娘アウラ以外のThe Worldの神達ね）」

フェイト「あの、八相にかんしては知らないってどうゆう意味です
か？」

モルナガ「そのまんまの意味よ、まあ今から説明するわね」

＊現在はモルナガが張ったバリアに守られています

モルナガ「クビアは私がこの世界に来るときに何故か気配を消して着いてきてね 私としては呼ぶつもりだったから好都合だったけどね、まあ八相はあいつらの差しがねみたいだけどね」

曾良「おい、あいつらって誰だ」

モルナガ「今は言えないわ、けどあと何年か後にはあいつらは完全に動くでしょうね・・・」

でもやっぱり佐助・・・息子を巻き込むのはね・・・

フェイト「あの・・・なんでそれを私達に言うんですか？」

モルナガ「それはナイシヨよ♪それにタルヴオスのところ以外は危なそうだしね」

曾良「おいタルヴオスのところは誰々だ」

モルナガ「鈴子とザフィーラよ」

曾良「確かに大丈夫だな」

フェイト「え？なんで？？」

あらフェイトちゃんは知らないようね

曾良「そういやお前らは知らなえのか佐助を抜けば完全に管理局最強だぞザフィーラは俺らの中でさえ負ける奴だっているぐらいにな」

フェイト「え？本当に？」

曾良「ああ」

フェイト「なんでザフィーラが・・・確かに三年近く見てなかったけどなんで三年近くでそんなに強くなるの・・・」

かなりショックを受けるフェイト

モルナガ「私はイニスのところに行くわね」

曾良「そーかだけど気よつけろよ、これでも一応俺達の母さんなんだしな（ボソ）」

あら心配してくれるのね

モルナガ「ありがとね曾良」

曾良「んなことより早く行け」

フフ素直じゃないわね

モルナガ「それじゃあまたねフェイトちゃん、曾良」

モルナガはバリアを解き奥に進んで行ったその間にスケイスが攻撃を仕掛けるも曾良に防がれる

フフ私的には佐助が誰と結婚するかが楽しみなね♪（実は今じやかなりの親バカである）

モルナガSide終了

曾良「おいフェイト戻ってこい」

フェイト「！えなに曾良？」

曾良「どんだけショックだったんだよ・・・まあ今はそれは置いてだ、二分時間を稼いでくれ」

フェイト「いいけどなんで？」

曾良「俺の大技を使う」

フェイト「わかった」

フェイトはまず最初にフォトンランサーを10本放つがスケイスは生と死の十字鎌でフォトンランサーを全て破壊するだがフェイトはソニックムーヴで後ろに回り込みバルディッシュをザンバーフオームに変え攻撃する

スケイスは環伐を放つがフェイトは後ろに大きく下がり回避する
それを見たスケイスは生と死の十字鎌をブーメランのように投げる
フェイトは横に回避するが生と死の十字鎌は追ってくる

フェイト「ッ！」

バルディッシュがプロテクションを張ったそれはギリギリ破壊
されずに持ちこたえた

フェイト「ありがとうバルディッシュ」

バルディツシュ「イエ」

フェイト「フォトンランサー、ファランクスシフト！」

ファランクスシフトを放つがスケイスは環伐式閃で全て破壊する

フェイト「これでいたい二分は稼いだよ後はお願い曾良」

曾良の準備はできており自分の魔力をほぼ全て万死ヲ刻ム影の鎌の部分に溜まっております鎌の部分がかなり巨大化していた

曾良「これが・・・俺の・・・全ての力だあああ！！！！」

曾良はスケイスに全力で斬りつける

スケイス「クオオオオオ！！！！！！」

スケイスは曾良の超全力の死への誘いをくらい消滅した

曾良「はあはあはあはあ・・・なんとか・・・勝てたな」

曾良は完全に肩で息をしていた

フェイト「そうだね、大丈夫曾良」

曾良「ああなんとか・・・早く奥に行くぞ」

フェイトと曾良はスケイスを倒し奥に進んで行った

39 話クビア編内部スキースの間編（後書き）

ラハール「では今回はこの小説SとSに入ったら登場してもらうナイトホーク様のところの主人公志水喜六君です」

佐助「復活早いな」

喜六「つうか俺！なに！この小説戦闘よくやるよね！それって俺に死ねと！それとラハールさんにロストログア級の剣が串刺しにされてるのに無視なの！」

ラハール「大丈夫だ作者が不死身みたいなものだから死にそうなほど痛いけど、それと喜六君達にはこの小説ではスカさんや三提督＋地上本部の人達との平凡ライフを送ってもらう予定だから」

喜六「よっしゃ！」

佐助「良かったな喜六、おデスプラ様のクドちゃんとゼロスちゃんが来たぞ曾良、千紗出迎えよろしく」

クド「きたよー」

ゼロス「来ましたー」

千紗「（かわいい）よくきましたねクドちゃんゼロスちゃん」

曾良「変なやつに声とかかけられなかったか」

クド「黒いサングラスをかけたはあはあゆってる人に声をかけられ

たぐらいいです〜ねえ」

ゼロス「うん」

曾良「どこで合った」

→かなりの怒気が出てる

ゼロス「くるとちゅうに」

曾良「千紗、クド・ゼロス・佐助・バカ作者と先に牛丼食ってくれ喜六には最高級のオイルを俺はクドとゼロスに声をかけた変態を殺しに行ってくる」

千紗「いつてらしい曾良さん、では行きましょうか」

クド・ゼロス・佐助・喜六・ラハール「は〜い（了解）（わかりました）」

その頃の曾良

曾良「死にやがれ！変態！」

変態「ギャアアアア！」

曾良「まだだ！死への誘い！」

変態「ぐあああ！」

曾良に変態はフルボッコにされていましたそのあとヴァルクの所に転送させて千紗達と美味しく牛丼を食べたようです

番外編　もしも佐助が違う世界に行ったら？ 1（前書き）

ラハール「ぜんぜん書けないので番外編を書きました」

佐助「おい作者早くクビア編終わらせろそしてStrikersに入れ」

ラハール「そうしたい・・・そうしたいさ！だけどぜんぜん書けないんだ！佐助とクビアの戦闘風景は浮かんでるのに他がぜんぜん書けないんだよ！」

佐助「ダメ作者が・・・」

ラハール「すみません」

番外編 もしも佐助が違う世界に行ったら？ 1

くもしも佐助がネギま！（大戦中）の世界に行ったらく

くその一く

??? 「千の雷！」

佐助「来ていきなりこれかよ・・・
ギガファイア！」

??? 「お！俺の千の雷を打ち消すなんてお前強いな！
俺はナギ・スプリングフィールドだ！お前はなんて名だ！」

佐助「猿飛 佐助」

ナギ「猿飛！俺と戦え！」

佐助「なんでこうなるんだ？」

いきなり大戦中の主人公と出会い戦うように言われます

くその二く

ナギ「はあはあ百重千重と重なりて走れよ稲妻
千の雷！」

佐助「お前はそれしか脳がねえのかよファイローム」

ナギ「チクショー！」

佐助「少し眠ってるメガクール」

あまりやる気を出さずに勝つやはりチートな佐助

＼その三＼

ラカン「食事中失礼！俺は放浪の傭兵剣士ジャック・ラカン！！
いっちょやろうぜ！」

佐助「飯を・・・よくも俺らの飯を・・・」

ナギ「お、落ち着け佐助！」

ゼスト「そうじゃ落ち着け！」

佐助「死にやがれ！獄炎ナックル！」

飯を食い損ねて滅茶苦茶切れる佐助です

＼その四＼

佐助「オメガヒール

コレでお前らはもう大丈夫だな
ライフメイカー
創造主てめえに教えてやるよ終焉の死をな」

ナギ「佐助！どうするきだ！」

ラカン「佐助待て！奴はマズイ、奴は別格だ！！死ぬぞ！体制を建て直してだな・・・」

佐助「安心しろ俺はまだ憑神^{アバター}を使ってないから」

佐助「来い・・・来いよ・・・俺はここにいる！スケイエエエス！ゼロオオオオ！」

スケイスゼロライフメイカー

佐助の創造主との本気のバトル

くもしも佐助がF a t e / s t a y n a i g h tの世界にサーヴァントとして行ったらく

くそのく

佐助「サーヴァント黄昏召喚^{トワイライト}に応じたあんたが俺のマスターであつてる？」

????「・・・は！ええそうよ」

佐助「トワイライト名は猿飛 佐助だマスターの名は？」

????「私はイリヤスフィール・フォン・アインツベルンよそれと

あなた忍者？」

佐助「違う！断じて違うぞ！！」

これがマスターイリヤとの出会い

（その二）

イリヤ「ねえ佐助あなたの力を見てよ」

他のサーヴァントやそのマスタートワイライトは長いので真名の佐助と呼んでもらうことにした

佐助「別にいいぞ出ろにする俺はセイバーにもランサーにもアーチャーにもアサシンにもキャスターの也能る最高のサーヴァントだぜ」

イリヤ「じゃあまずキャスターの技を見せて」

佐助「了解、魔王玉！まあ軽くこれぐらいか？」

イリヤ「やりすぎよ！これで軽くなの？」

佐助「うん、まあ前の世界じゃこれより結構強めにやったら無人の星消し飛んだしな」

イリヤ「規格外ね・・・」

軽く力を見せて規格外と言われますこれで憑神アバターを見せたらもつと規格外と言われます、世界の静止力なにそれおいしいの？

くその三く

??? 「俺はサーヴァントランサーだ」

佐助 「俺はサーヴァントトワイライトだ」

ランサー 「トワイライト？イレギュラーかまあいいか
んじゃいっちょ戦うか」

佐助 「ランサーならこれだな神槍ヴォーダン」

ランサー 「ランサーに槍で戦うか・・・おもしれえ！」

佐助対ランサーの槍での戦い

くその四く

イリヤ 「やっちゃえ！トワイライト！」

佐助 「了解・・・まずはセイバーかならこれかな海王の大剣」

セイバー 「な！」

佐助 「お前らに教えてやるよ『死の恐怖』をな」

佐助の死の恐怖を与えるバトルの始まり

くその五く

佐助「士郎お茶お願い」

イリヤ「それじゃあ私も」

士郎「はいはい・・・え？」

凛「なんで貴女達が居るのよ」

佐助「気にしたら負けだ遠坂」

イリヤ「そうよ」

普通に士郎の家に居る佐助達

くその六く

佐助「それでは衛宮　士郎強化計画実行しまゝす」

セイバー「どんなことをやるのですか？」

佐助「まあまず回式・芥骨、これを持ってみてくれ」

士郎「これ無茶苦茶危くないか」

セイバー「どんな風にですかシロウ」

士郎「これだけでも普通の奴なら塵芥のように細切れになる、しか

も刃こぼれも壊れたりもしない」

佐助「じゃあ次はこれ回式・風鉈これはどうだ」

士郎「なんでかわからないがちょっと重たいぐらいで持てる」

佐助「これは虚空ノ双牙」

士郎「・・・消えた・・・」

佐助「持てないものは消えるか・・・この分だとシラードは持てないな・・・なら紅蓮剣・赤鉄」

士郎「ちょっと重いけど持てる」

佐助「なら風鉈と赤鉄を投影して俺との軽く打ち合いOK」

士郎「おう！」

衛宮 士郎強化計画実行

（その七）

???「サーヴァントアサシン名は佐々木小次郎だ」

佐助「ならサーヴァントトワイライト名は猿飛佐助だ」

アサシン「忍者か？」

佐助「違う！断じて違う！どう見ても俺は忍んでないよね！」

アサシン「では殺ろうか」

佐助「だな」

佐助は薄明の双剣を構えアサシンは物干し竿を構える

佐助・アサシン「いざ・・・勝負！」

佐助とアサシン・双剣対刀のバトル

ゝそのその八ゝ

???「雑種にしてはなかなか良い目をしてるではないか・・・名は」

佐助「サーヴァントとトワイライト名は猿飛佐助だ」

???「トワイライトか・・・黄昏とは大層な名だな、

我は英雄王ギルガメッシュ、我を楽しませろトワイライト王の財宝」
ゲートオブバビロン

佐助「夢幻繰武」

佐助「お前の宝具って案外もろいな、それと俺を殺してえならもつと全力で来な」

ギル「いいだろう、王たる我にそのような暴言を吐いた度胸に敬意を表して」

全力で貴様を葬ってやる・・・起しろ、『乖離剣エア』」

ギル「この一撃を受けて死ぬることを誇りに思え、
天地乖離す開闢の星『エヌマ・エリシャ』」

佐助「カイト蒼炎データ起動」

カイト「了解」

佐助「蒼炎環伐乱絶閃！」

ギル「何・・・だと」

佐助「英雄王あんたに敬意を払ってこれで倒す・・・来いスケイス
ゼロ

英雄王の魂を刈り取って喰らえ」

佐助は英雄王との戦い

これで番外編は終了します

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3678k/>

魔法少女リリカルなのは ～転生者は最初から最強でした～

2011年1月10日19時37分発行